

平成23年度

日本脚本アーカイブズ

調査・研究報告書

[Ⅶ・最終版]

新しいステージへ
～7年間の総まとめ～

社団法人 日本放送作家協会



文化庁

Agency for Cultural Affairs

平成23年度文化庁芸術団体人材育成支援事業

平成 23 年度

日本脚本アーカイブズ 調査・研究報告書

[Ⅶ・最終版]

日本脚本アーカイブズ 特別委員会

日本脚本アーカイブズは平成17年より、散逸の危機にある放送番組の脚本・台本を中心に収集・保存・管理してきた。

テレビ創成期の番組の多くは保存されることなく消えており、その内容は脚本・台本でしか知る手立てがない。これまでに収集した脚本・台本・資料等は約5万点。その中には映像がすでに失われてしまった番組の脚本・台本も数多く、今では貴重な「文化遺産」「文化資源」といえる。

平成23年、文化庁と国会図書館との間で結ばれた「協定」を受けて、次のステージへと進むことになり、日本脚本アーカイブズとしての活動は平成24年3月31日をもって終了する。

本報告書〔Ⅶ〕が、日本脚本アーカイブズの活動についての最後の報告書となる。

社団法人 日本放送作家協会

「失われた脚本・台本を求めて」——文化リサイクルの意義——

平成 24 年 2 月 15 日 国立国会図書館講堂

■第 1 部 座談会

夢——脚本アーカイブズの、



長尾 真 国立国会図書館長の開会挨拶



南川泰三初代委員長（左）と、香取俊介現委員長が脚本アーカイブズ7年の歩みを語る



市川美保子夫人(左端)も登壇。亡き市川森一氏の思い出を語った



堀川とんこう氏
演出家・司会



藤村志保氏
女優



山田太一氏
脚本家



中園ミホ氏
脚本家



奥山侑伸氏
放送作家

アーカイブとは一言でいえば「先人たちの積み上げてきた仕事を記録し、後世にきちんと伝えていく」ことである。平成 23 年に続く今回のシンポジウムでは、文化庁と国会図書館の間で結ばれた協定を受け、脚本アーカイブズ構築に向け、次のステージでの方向性・可能性を探る議論が交わされた。



近藤誠一 文化庁長官 挨拶

■第2部 パネルディスカッション

デジタルアーカイブの潮流の中の脚本・台本



テレビ・映画・図書の各分野からアーカイブのあり方・未来像を語る



吉見俊哉氏
東京大学副学長・司会



長尾 真氏
国立国会図書館長



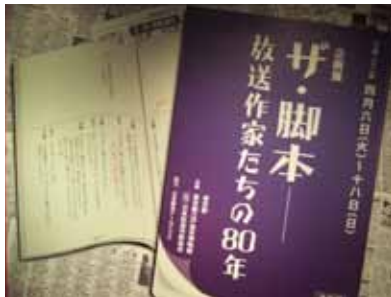
木田幸紀氏
NHK 理事



岡島尚志氏
東京国立近代美術館フィルムセンター主幹

アーカイブズ脚本展から

■ザ・脚本——放送作家たちの80年 平成22年 江戸東京博物館



大会場を生かし、80年間の放送脚本・台本を年代順に構成した



珍しい初期の向田邦子作品も展示

■脚本・台本の半世紀 平成21年 新宿・芸能花伝舎



テレビファン・放送作家・放送人が多数集まって盛り上がる

■足立区サークルフェア・ミニ脚本展 平成22・23年 学びピア21



近藤やよい足立区長も興味深げに見学



会場では古い脚本・台本の修復も

■日大藝術学部 平成23年



江古田キャンパスのリニューアル記念で開催

■北海道文学館 平成22年



北海道で初の脚本展とあって大盛況

■脚本展 シンポジウム関連展示 平成24年 国会図書館内



故・市川森一氏や登壇者ゆかりの脚本・台本が多く展示され興味をそそる



● も く じ ●

■巻頭写真 脚本アーカイブズ・シンポジウム、脚本展から	2
■国立国会図書館・文化庁協定 ～我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承～	6
■市川森一追悼特集 巻頭言集	8
■日本放送作家協会理事長挨拶 秋元 康	18
■日本脚本アーカイブズ特別委員会委員長挨拶 香取俊介	20
■電子的なアーカイブの大切さ 長尾 真 (国立国会図書館長)	22
■脚本アーカイブは何を指すのか 吉見俊哉 (東京大学教授)	24
■脚本アーカイブズのメタデータ管理 緑川信之 (筑波大学図書館情報メディア系教授) 谷口祥一 (筑波大学図書館情報メディア系教授)	26
■ネットに「テレビドラマデータベース」を構築した経緯 古崎康成 (テレビドラマ研究家)	30
■脚本の収集・保存・公開に要する権利問題 福井健策 (弁護士・日本大学芸術学部客員教授)	32
■文化版の公共事業 松岡資明 (日本経済新聞社編集委員)	34
■放送界の「負の遺産」を乗り越えるために 鈴木嘉一 (読売新聞編集委員)	36
■日本脚本アーカイブズ特別委員会 7年の歩み	38
■脚本アーカイブズ・シンポジウム 『失われた脚本・台本を求めて——文化リサイクルの意義』抄録	45
■脚本アーカイブズ推進コンソーシアム報告	65
■研究調査部	71
■収集管理部	81
■アーカイブズ概論	95
■脚本アーカイブズと足立区の歩み	97
■広報部	98
■編集後記 ——委員たち、脚本アーカイブズへの思い——	100

平成23年5月18日

国立国会図書館と文化庁との協定について

～我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承～

本日、国立国会図書館と文化庁は、我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承に関して協定を結びましたので、お知らせいたします。

(同時発表：国立国会図書館)

1. 概要

国立国会図書館と文化庁は、我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承を目指し、歴史的・文化的価値のある作品や資料等について、その所在情報の把握や目録の作成、収集・保存、活用等について、一層緊密な連携・協力を行っていくことにしました。(詳細は別紙をご参照ください。)

2. 目的・意義

歴史的・文化的価値のある作品や資料等は、我が国の歴史や文化等の正しい理解のために欠くことのできない貴重なものであり、将来の創造活動の基礎をなすものです。また、ひとたび消失すると再び入手することは不可能です。

このため、国立国会図書館と文化庁は、歴史的・文化的価値のある作品や資料等の適切な収集・保存及び活用等について、一層緊密な連携・協力を行っていきます。

3. 当面の具体的な連携・協力分野

- ① テレビ・ラジオ番組の脚本・台本
- ② 音楽関係資料（過去に我が国で出版された楽譜等）
- ③ マンガ、アニメーション、ゲーム等

なお、今後も、連携・協力内容の充実について検討していきます。

(お問い合わせ先)

文化庁文化部芸術文化課

電話：03-5253-4111

FAX：03-6734-3814

メール：geibun@bunka.go.jp

我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承に関する協定

我が国では、図書、新聞、雑誌、CD、DVD等の出版物は、国立国会図書館に保存され、美術品や歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料は、美術館や博物館等に保存されている。

一方、これらの施設において、これまで必ずしも収集・保存の対象とされてこなかった分野の文化的な作品や資料等については、その所在情報が一元的には把握されておらず、体系的な収集・保存がなされていない状況にある。歴史的・文化的価値のある作品や資料等は、我が国の歴史や文化等の正しい理解のために欠くことのできない貴重なものであり、将来の創造活動の基礎をなすものである。また、ひとたび消失すると再び入手することは不可能である。

このため、歴史的・文化的価値のある作品や資料等が散逸・消失することのないよう、その適切な収集・保存及び活用を図ることが必要である。

政府は、「文化芸術の振興に関する基本的な方針」（第3次基本方針）（平成23年2月8日閣議決定）において、文化芸術に関する各種の情報や資料の収集・保存（アーカイブの構築）及び活用方法について、国立国会図書館をはじめとする関係機関と連携することとしている。

一方、国立国会図書館においては、日本の知的活動の所産を網羅的に収集し、国民の共有財産として保存するとのビジョンを掲げている。

これらを踏まえ、国立国会図書館と文化庁は、これまで必ずしも体系的な収集・保存がなされてこなかった歴史的・文化的価値のある作品や資料等について、その所在情報の把握や目録の作成、収集・保存、活用等について、一層緊密な連携・協力を行っていくこととする。

一層緊密な連携・協力に取り組むにあたっては、これまでのそれぞれの分野における取組も踏まえ、当面、特に以下の3分野について、具体的な連携・協力を推進することとする。

1. テレビ・ラジオ番組の脚本・台本について、国立国会図書館と文化庁は、連携・協力して、所在状況や保存方法等に関する調査研究を行うとともに、過去の重要な資料の保存について検討する。
2. 音楽関係資料について、過去に我が国で出版された楽譜等に関する所在情報に関し、国立国会図書館と文化庁は、連携・協力してデータベースを作成し、国立国会図書館においてそれを広く国民に公開し、その活用を推進する。
3. マンガ、アニメーション、ゲーム等のメディア芸術について、国立国会図書館と文化庁は、連携・協力してそのアーカイブの構築を推進する。

この協定の締結を証するため、本書2通を作成し、双方が押印の上、各自1通を保有する。

平成23年5月18日

国立国会図書館
文化庁

報告書 I ～ VI の巻頭言採録

脚本アーカイブの夢 市川 森 一

昭和 16 (1941) 年 4 月 17 日、長崎県諫早市生まれ
「黄金の日」 「淋しいのはお前だけじゃない」 ほか
多数のドラマ脚本を執筆
日本放送作家協会理事長などを歴任
平成 23 (2011) 年 12 月 10 日永眠

ご報告に寄せて 【I 平成 17 年度】

わが国のテレビ業界は、その開局当初から、電波の一過性の特徴にのみ気を取られて、ビデオが普及し、収録という機能が備わってからも尚、「残す」というシステムを放棄してきました。

それがテレビ開局から五十年を経たいま、欧米におけるテレビ資産の保存と活用の充実ぶりとも比較するにつけ、わが国のテレビ資産がいかに貧弱なものであるかを悟るに及び、近年、ようやくにして、財団法人の「放送ライブラリー」や「NHKアーカイブス」などの機関が設立され、映像物を中心にその収集と管理が図られるようになりました。

そうした気運の高まる中でも、放送台本に関しては、一向にシステムティックな収集や保管がなされない現状を憂慮したわが日本放送作家協会では、三年ほど前から、国会の総務会や関係行政機関、地方自治体、テレビ関係者等に、過去五十年間散逸に任せていた放送台本の収集と保存のための施設の必要性を、さらには、長き将来にわたって、テレビ局から放送されるすべての番組台本の管理委託を請け負うシステムの確立をお願いしてきました。

放作協では、そのプロジェクトを「日本脚本アーカイブズ特別委員会」と銘打ち、足立区のご賛同の下に生涯学習センター内に準備室と図書館内に収集台本の臨時保管室をご提供いただき、活動を開始いたしました。

そしてなによりも、この運動の原動力になりましたのが、文化庁のこのプロジェクトに対する深いご理解と、向こう三年間の活動研究費の助成でありました。

今般、ここにわれらの研究活動の成果のご報告をさせていただきますと共に、日本の放送文化の発展に務めるこのプロジェクトへの、さらなるご協力とご支援を厚くお願い申し上げます。

日本脚本アーカイブズの早期実現を【Ⅱ 平成 18 年度】

放送界と日本放送作家協会を代表し、国会の総務委員会において、放送済み台本の保存と管理システムの必要性を訴えたのが四年前の春でした。

その時、私は、ラジオ放送開始から八十年余、テレビ放送開始から五十年余を経る中、この間放送された膨大な数の脚本・台本がどこにも保存されず、雲散霧消している現状を訴え、欧米では常識となっている「脚本アーカイブズ」の早期の設立を懇願いたしました。

ご出席の各党委員の皆様方からは、一様に、「遅蒔きながらも、既存の放送台本の収集にかからなければ、この国の放送文化に禍根を残すことになる」というご認識で一致していただき、その後、文化庁のご支援を得て、放作協内に「日本脚本アーカイブズ特別委員会」を立ち上げる運びと相成りました。

ただ、理念と現実の間には予想以上の深い谷間が横たわっておりました。

運動資金も保管場所も何一つ持ち合わせのない社団法人の放作協としては、活動はすべて協会のボランティアに頼るしかなく、資金面では、このアーカイブズ運動の趣旨に賛同し参加していただく公共団体や民間企業、放送機関等にご支援を呼びかけていくしかありませんでした。

幸い、近年、文化振興に意欲的な東京都の「足立区」が「脚本アーカイブズ」の重要性をご理解下さり、この運動への熱いご賛同の下で、区内の「学びピア 21」（区立図書館）の一室に収集作業のための「準備室」と台本の保管場所をご提供頂き、ようやく、協会の放送作家を中心にした脚本・台本保存の実態調査を手始めに、具体的な活動を開始することが可能になりました。

収集作業の急務としては、すでに他界された放送作家のご遺族が、家中に残された膨大な遺稿の処置に困り、心ならずも廃棄せざるを得ない状況の多くあることに鑑み、まずは、その方面への遺稿の引き取りの呼びかけを始めました。

目下は、そうした脚本・台本が一万五千冊以上、準備室の方に収集保管されております。その中には、テレビドラマ史上、記念碑的作品と位置づけられる橋本忍脚本『私は貝になりたい』や長期番組『太陽にほえろ！』の全巻、向田邦子の初期台本をはじめとする有名脚本家の稀少な台本も含まれております。

アーカイブズ委員会の今後の活動としましては、脚本・台本の管理実態調査やアンケート、台本保存の調査研究を続行すると共に、それ以上の最優先課題として、まだまだ社会的な認知が不十分な「脚本アーカイブズ」運動への喧伝と、一刻を争う脚本・台本収集の作業に全力を傾けなければならないと思っております。

「日本脚本アーカイブズ」設立運動への支援に対しては、文化庁が先鞭をつけてくださいましたおかげで、NHK、民放連、公共機関、大学機関、一部企業なども少しずつ理解を深め、支援の輪も広がりつつあります。

文化庁におかれましては、日本の放送文化の発展と質の向上のため、「日本脚本アーカイブズ」の活動にますますのご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

牛歩ながらも前進を【Ⅲ 平成19年度】

今年（2008年）の1月、私は、韓国放送作家協会のお招きを受けて、常務理事の津川泉氏と共に、「放送台本デジタル図書館」の開館式に出席をいたしました。

そのパーティで、韓国の脚本家たちとシャンパンの乾杯を交わす私の心はいささか複雑なものがありました。「おめでとう」という気持ちの片隅で、わずかではありましたが、羨望と屈辱感を禁じ得なかったのです。それというのも、韓国放送作家協会のみなさんに、過去の放送済みのテレビ台本の収集と管理の必要性を説いたのは、私たち日本放送作家協会だったからです。

それは、3年前の釜山での「第1回東アジア放送作家カンファレンス」まで遡りますが、その頃、わが協会は、長年の課題としてきた「脚本ライブラリー」の設立、即ち、テレビ開局から50年、散逸に任せていた数多のドラマ台本の収集と保存、管理、活用をするためのシステムを確立することの重要性を、国会の総務会や文化庁、NHK、民放連、民放各社などの公共団体に訴え始めていた時期でした。私たちは、「東アジア放送作家カンファレンス」の席上でも、各国のドラマ作家たちに、これからは、日本がリーダーシップを取るから、「脚本ライブラリー」の設立運動をアジア規模で広げていこう、と呼びかけていたのです。

そして、私たちのこの呼びかけに一番関心を示してくれたのが、韓国放送作家協会の皆さん方でした。その後も、韓国と日本の脚本家同士が交流する機会があるたびに、韓国側は私たちの「脚本アーカイブズ準備室」の活動内容を尋ね、「自分たちもがんばる」と言う彼等に、私たちも先鞭をつけた者として、「なんでも訊いてください」と先輩面をしていたのです。

しかし、私たちの実情は、アーカイブズ運動の発想から5年を経ても、不甲斐ないほどの牛歩を余儀なくされてきました。理由は、資金難でした。個人所蔵の台本を預けたいという作家や遺族がいても、その郵送料は準備室の着払いですから、その予算にも限度が生じ、送呈を待ってもらっている状態がつづいています。足立区が提供してくださっているオフィスはあっても、専任の事務員を雇う資金はなく、協会所属の作家たちがボランティアで交代で務めている状況です。

それでも、この運動を中止しないで、いまでも辛うじて継続できているのは、文化庁、民放連、NHK、足立区のご理解とご支援の御陰でした。また、アーカイブズ運動に賛同して日常の雑事や交渉事や、こうした報告書作りに至るまで、ボランティアで参加してくれる協会員たちの存在でした。

—それにしても、専任のデスクがいてくれたら……

—脚本アーカイブズ・センター設立のプランが立てられたら……

そんな詮無き夢を追っていた、ある日ある時でした。韓国放送作家協会の、南愛梨理事から、事もなげに、「おかげさまでこのたび、政府の支援で放送台本デジタル図書館が設立の運びとなりました。開館式にお越し頂けますか」という電話があったのです。

ショックでした。同時に、さすがは映像文化に力を入れている韓国だ、と感服もしました。伺ったところでは、韓国政府はこの「放送台本デジタル図書館」設立のために、10億ウォン（約1億4000万円）を支援したということでした。

「私たち議員には、あなた方脚本家が書いたテレビ台本にどれほどの芸術的価値があるのかわかりません。ただ、今後二度と放送されない古いドラマの台本には、テレビ資産としての価値があることは容易に理解ができますし、そうした希少価値のある台本が保存管理されるセンターができれば有益な文化コンテンツになり得ると判断し、出資をしました。決して、道楽でやったことではありません」

開館式で同席した韓国議員の言葉です。

私は、韓国の「放送台本デジタル図書館」の誕生をこころから慶んでいます。それは、私たちの目の前に具体的な目標ができたからです。テレビは国境を越えていきます。共同制作や制作協力も増え、ドラマ・マーケットも東アジア全域に広がっていくでしょう。特に、隣国である韓国の動向は他人事ではなくなっています。

そうした広域な視野の中で、これからも私たちは、一刻を争う過去の台本収集の手を休めることなく、このアーカイブズ運動の意義と有益性への理解を多くの日本国民に求める努力を続けていく覚悟です。

アーカイブズ特別委員会主催の「脚本展」は、北千住でも、横浜でも大好評でした。足立区の文化団体の皆様方による「日本脚本アーカイブズ倶楽部」という支援団体も立ち上げて頂きました。東京大学大学院情報学環とのコラボレーションも進んでいます。少しずつではありますが、停滞することなく前に歩みを進めています。

今後共、一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

頑張っています【Ⅳ 平成20年度】

今年平成21（2009）年は、私たちテレビ・ラジオのドラマ、構成に携わる作家の団体である「日本放送作家協会」が設立されて、ちょうど50年目を迎える記念の年に当たります。

その同じ年に、「日本脚本アーカイブズ」も、平成17年の10月に足立区の公共施設である「学びピア21」の一隅に準備室を開設し、本格的に活動を開始してから5年目という節目にたどり着きました。

わが国にテレビが開局して五十数年間、テレビ産業という巨大マンモスが食い散らしてきた無数のテレビドラマの台本の欠けらを、落ち穂拾いのように集め歩くことが、私たちの仕事でした。古い台本をもらってきて、整理し、保存する、目立たない地味な作業の日々でした。欧米では、貴重なテレビ文化資産として宝物のように扱われているこうした過去の台本群も、「現在（いま）」の視聴率にしか価値観を見出せないわが国のテレビ業界にあっては、放送が終わったあとの台本など、ただの無価値なゴミでしかなかったのです。

そうした寒々しい認識下の中で、私たちは辛抱強く「脚本アーカイブズ」の意義を説き、支援者を求め歩きました。

幸いにも、文化庁には当初からこの運動にご関心を示され、積極的な応援をいただきました。文化庁のご支持が牽引車となって、NHK、民放各社、民放連も、私たちのアーカイブズ活動に好意ある理解を頂くに至りました。中でも足立区は、区内の文化振興プランの一環に「脚本アーカイブズ」活動への支援を組み入れていただき、収集した脚本の保管場所と準備室を無償でご提供いただきました。協会員による何かと気苦労の多い業務が、辛うじて今日まで持続してきましたのも、足立区の皆さま方の日頃のご厚意のお陰と感謝しております。

ただ、こうした理解者は、全体から見ればまだほんの一握りでしかありません。私たちの頑張りはいまからです。先見的に支援をいただいている皆さま方への恩返しは、いま以上に「脚本アーカイブズ」活動を活発にして、その存在を大きく世間に認めさせていくことだと思っています。

そのためのPR活動として、ご好評をいただいている「脚本展」を、放作協の50周年記念事業として、さらに充実させていく予定です。

また、これは事業ではありませんが、エポック・メイキングな出来事として、この2月10日に女優の三田佳子さんが来館、50年前のデビュー作から今日までの所蔵台本800冊を寄贈いただくというセレモニーを行い、マスコミ20社ほどが詰めかけました。このニュースは、翌朝のNHKニュースを始め、ワイドショー、新聞各社の記事となって全国に喧伝され、「脚本アーカイブズ」の存在を世間にアピールする恰好の機会となりました。

三田佳子さん寄贈の台本の中には、主演した二度の大河ドラマの「いのち」「花の乱」の全台本や、劇作家唐十郎が初めてテレビのために書き下ろした「幻のセールスマン」など、文学的価値の高い台本も多く、今後の「脚本展」のさらなる充実に貢献していただけるものになりました。また、三田さんのこの行為が呼び水となって、今後も多くの方の俳優諸氏からの台本寄贈が期待できる状況が生まれました。

さらに、一方では、去年から東京大学大学院情報学環と提携して、デジタルアーカイブズのシステム構築作業をスタートさせました。これにより、紙質の悪さが欠陥だったドラマ台本の寿命を、さらに長く保存できるようになったのです。

私たちは、放送文化の向上と、未来のテレビ界を担う後継者たちのために、精一杯、頑張っております。

文化庁におかれましては、これからも一層のご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます、ここに今年度の報告書をご提出させていただきます。

国民共有の財産として【V 平成21年度】

テレビ電波というものが日本全土の上空を飛び交い始めてから半世紀を超える時間が流れ続けています。

情報化社会といわれる現代に生きる私たちは、テレビ・メディアの多様な情報の垂れ流

し状況から逃れて生きることはできません。テレビ・メディアは国民の情操を豊かにしてくれる一方で、時に暴力的に日常生活に押し入ってきては、私たちの生活習慣を変え、価値観を変え、人間関係に割り込み、家庭、学校、会社などのあらゆるコミュニティにも大きな影響を与え続けて今日に至っております。

テレビはいまのままでいいのか。

テレビをもっとよりよい社会の実現のため、未来の子供たちの育成のために活用できないのか。

そうした声はいまや巷に充満しています。

テレビ番組を無批判にただ受容するだけの時代は終わりました。

これからは、私たちがテレビを検証する時代です。

テレビ・メディアが個人と社会に与える悪影響については、いままでも時折、先見性をもった少数の識者によって警告が発せられてきましたが、それが社会的な広がりをもたせなかったのは、検証するに必要な番組資料がどこにも残されてこなかったことに起因します。これは、テレビの持つ「一回性」の特性と、放送時の視聴率だけにすべての価値をおいてきた放送事業者の偏狭な商業主義の故に他なりません。

では、テレビ先進国の欧米ではこれらの問題にどう対処しているのか。

私たち日本脚本アーカイブズ特別委員会では、文化庁のご支援の下に、この数年、アメリカ、イギリス、フランスなどでのテレビ・アーカイブズ施設（主にはテレビ台本の収集、保存、管理状況）の視察調査を行ってきました。加えて、近年開設された韓国の「放送台本デジタル図書館」の視察でも明らかになったことは、これらの国々においては、テレビから生み出されるさまざまな番組（作品）を「国民共有の財産」とふまえて、国家を上げて「テレビ資産」の保存に力を注いでいるということでありました。そこには、二つの目的があり、ひとつは、デジタル化に伴い、ソフトの需要が高まって再放送の機会が増え、過去の作品群が商品として再評価される市場が出現した事。もうひとつは、過去の番組を省みて、未来のため、取り分け、テレビにもっとも影響を受けやすい子供たちの育成のために、より良い番組作りを指向する材料にするためであります。視聴率のため、その瞬間さえ良ければあとのことには無関係という長い間のテレビ業界の慣習から脱却し、より高い公共性と社会的責任をテレビに求めていくのも、各国が「アーカイブズ事業」の重要な使命としている理由であります。

ひるがえってわが国では、残念ながら、国家も、放送事業者も、制作現場でさえも、「テレビ作品」を未来に残すという概念が著しく欠落したまま五十余年を経てきたというのが実情です。

この「放置された五十余年」の荒れ野から「落ち穂拾い」のように先人たちの放送台本を収集し始めてからはや六年が経ちました。

ここにきて、文化庁への一つのお願いは、支援名目とされている「調査研究」からそろそろ本来の目的である、埋もれている台本の収集、保存、管理作業に本腰を入れさせて頂きたいということでもあります。これまで文化庁のご支援のおかげで、脚本アーカイブズの保存方法、各国の施設の運営法など、この数年間で相当の研究成果を上げました。この上は、いよいよ実践の段階に踏み出たく、支援体制もそのように切り替えて頂きますことをここに強く希望するものです。

同時に、文化行政の担当大臣と関連機関におかれましては、国民生活に密着しているテレビから生み出される「テレビ資産」を国民共有の財産と位置づけていただき、そのための収集・保存作業が円滑に進むための義務化、法制化の実現にご尽力賜り、そのことによって、国民の「テレビは私たちの文化なのだ」という自覚が芽生え、必然的にテレビの質の向上を求める機運へ繋がって参りますようにご指導を賜りたく、ここにお願い申し上げる次第でございます。

「思い出」の発掘作業【Ⅵ 平成 22 年度】

芸術祭の受賞作にも輝くような優れたドラマを数々残した某脚本家が、ある日突然身まかり、その一作を観直したくなってテレビ局にビデオの貸し出しを頼んだところ、80年代前半に放映されたその作品は収録ビデオテープの再使用のため放映完了と同時に消去してしまったとの返事。ならば、せめて脚本なり読んでみたいと思って遺族に脚本の貸し出しを頼んでみると、返ってきたのが、「あの人は、放送が終わると台本はいつも捨てていました」という言葉だった。

自分の作品のみならず、自分という人間がこの世に存在した足跡をすべて消し去ってしまいたいというこの種の発言は、実は、テレビ業界の中ではよく耳にするフレーズで、似たような職種の小説家とか演劇人とか、あるいは音楽業界でもほとんど聞くことがない。

物事を創造する仕事に携わる者なら、むしろ、共感者を求めて少しでも長く自己の創作物が持続していくことを望むのが通常意識である。

なぜ、テレビに関わるクリエイターだけが、仕事の痕跡を残したくないと思うのか。それは、おそらく当人の意思より先に、日本の放送事業者たちが、初期のテレビ機能の「一過性」を避け難い宿命として受け入れ、テレビ番組には過去も未来もなく、たったいま流

れ去る時間の中にしか存在し得ない電波メディアであることを前提として、「残す」という概念を捨て去ったことに帰因するのではないか。そこに関わる放送作家たちも、自分が苦勞して書いた脚本が、ようやく映像化された次の瞬間には泡のように消えていく光景と向き合いながら、その状況を是認するために、「残さないことこそがテレビなのだ」と自らに言い聞かせるよりほかになかったのではないか。

そのメディアも50年を経て、どんな番組もビデオやDVDで「残せる」ようになり、文化アーカイブズの自覚が芽生え、国家も、軍事力やGNPなどのハード・パワー以上に、文化、芸術、観光のソフト・パワーがその国の「国力」の尺度になることに気づき始めた。ここに至ってテレビもようやく、過去の番組が価値あるテレビ資産として認知される時代を迎えたのだ。

テレビ資産といえるものは、大きく二つに分けられる。「映像」と「台本」である。このうち映像の収集作業は、NHKアーカイブスや放送ライブラリーがすでに活発な活動を始めていた。「台本」の収集・保存に関してはテレビ局がその任に当たってくれているものとばかり思い込んでいたのだが、その認識は甘かった。長年にわたってビデオテープ代の節約のために、その何百倍の経費をかけて作った映像を消し去ってきた制作現場で、映像の設計図である台本が保存されているはずはなかった。

見渡せば、先輩脚本家たちの脚本の山は、その人の死と共にゴミの山として遺族に捨てられている状況があった。

——なんとかしなければ。

テレビ開局以来、散逸に任せていたドラマ台本の収集作業を宣言はしたものの、日本放送作家協会にはその資金もなく、保存、管理する場所も人手もなく、あるのは、「先輩作家たちの脚本を後世に残したい」という同業者としての使命感だけだった。

幸い、文化庁が私たちの脚本アーカイブズ活動に理解を示して下さり、支援金を頂ける体勢ができた。足立区からは協働事業として準備室や保管場所の提供をして頂いた。JKAからの支援も有り難かった。これらの資金で、各地で「脚本展」を催し、毎回、予想を超える反響にこちらが驚かされた。準備室の委員たちは講師を招いての研究会を重ねアーカイブズへのさまざまな知識を体得した。その中の数人はアメリカやヨーロッパ、中国のアーカイブ施設の視察に出向き、欧米のテレビ資産への意識の高さを再認識させられ、その事は毎年の文化庁への報告書に明示してきた。そして、いよいよ今年度から本格的な脚本の収集活動に入るべく陣容も新たに再始動の決意を期しているところである。一方では、昨年度から放送文化基金を得て、東大大学院情報学環との共同研究のための「放送脚本デジタル化研究会」を設置し、アーカイブズ運動を軸にした他の団体組織との連帯を促

進している。当研究会では、昨年11月に足立区の東京芸術センターにおいて、「文化アーカイブズ活性化シンポジウム」を開催し、ここには、長尾真国立国会図書館長、石田英敬東大大学院情報学環学環長、吉見俊哉情報学環教授、竹本幹夫早稲田大学演劇博物館館長、大路幹生NHK放送総局ライツ・アーカイブスセンター長、金泳徳韓国コンテンツ振興院日本事務所所長といった専門家に、テレビ界からは今野勉さん、山田太一さんにご参加を仰ぎ、脚本アーカイブズへの応援とさらにこの活動のあるべき指標をお示し頂いた。

テレビ文化は、恐ろしいほど多くの人々の「思い出」に根ざしている。過去のテレビドラマ、あるいはその時代のバラエティ番組等は、その人が生きた時代の証言者である。テレビ時代においては、一本のドラマがその人の青春を甦らせる呼び水にもなる。現代人はテレビと共に人生を歩んできた。その意味において、脚本アーカイブズ活動は、多くの人々の人生をより豊かなものにする「思い出」の発掘作業であるともいえる。時代と個人との絆の役割も果たしていく脚本アーカイブズ運動にさらなるご支援を乞う次第である。

【追悼特集に寄せて】

市川森一さんの遺志を生かしたい

香 取 俊 介 (日本脚本アーカイブズ特別委員会委員長)

文化庁への最終の報告書では、故・市川森一さんの熱い思いのこもる第1回から6回までの「挨拶文」をそのまま掲載することにした。通読していただくと、脚本アーカイブズにかける市川さんの強い思いや、準備室設立後6年半にわたる脚本アーカイブズの動きが概略わかりいただけるはずである。

脚本アーカイブズの運動は平成15年、国会の総務委員会で市川さんが、番組の制作が終わると従来廃棄されてきた脚本・台本を収集保存していくことの重要性を訴えたことで動き出したものである。平成17年10月足立区の学びピア21内に足立区と日本放送作家協会との「協働事業」として「脚本アーカイブズ準備室」が設立され、文化庁はじめNHK、民放連等のご支援のもと、「散逸の危機にある脚本・台本」を中心に収集・保存活動が開始された。

以来、6年半、組織運営には不慣れな脚本家、構成作家らがボランティア精神を発揮して運営にあたり、約5万点の脚本・台本・関連資料等を収集するに至った。1冊ごとに書誌情報を取ると共に劣化のすすんだ脚本・台本については中性紙などに入れたりして足立区内の図書館の保存庫等に厳重に保管してきた。

未だ誰もやっていないことを素人の物書き集団が資金の目途もたたずに始めたわけで、前途を危ぶむ声もあったが、市川さんを先頭に「必ず後世の人に評価されるはず」という強い確信のもと、試行錯誤を繰り返しながら運営してきた。この間、市川さんとともに政治家をはじめ官庁、放送局等々に陳情や協力・支援を要請したりしたことを、今は懐かしく思い出す。

関係者のご理解とご尽力の結果、文化庁と国立国会図書館との「協定」が成立したことで、市川さんともども、「なんとか脚本アーカイブズを軌道にのせる道筋がついたのでは」と語り合ったものである。それから数ヶ月足らずで市川さんが亡くなられるとは夢にも思わず大変なショックを受けた。市川さんの葬儀後の会合で、「脚本アーカイブズ推進コンソーシアム」の座長の吉見俊哉東大副学長から「手始めに市川さんのすべての脚本をデジタル化して『市川森一アーカイブ』をつくったらどうか」という提案があった。デジタル化した「市川森一アーカイブ」をひとつのモデルとして様々な角度から研究を重ねることで、一般公開はもちろん、新たな利活用の可能性についても有効なデータ等が得られるに違いない。

今後とも関係諸兄のご理解、ご協力を切に賜りたいものである。

故・市川会長の想いを受けて……

秋 元 康 (社団法人 日本放送作家協会 理事長)

近年の大きなムーブメントとして、世界では、文化芸術が有する創造性を社会の活性化に生かす政策、または、文化芸術をコンテンツとして発信することによって、国の魅力を高めようとする戦略が当たり前となりつつあります。そんな中、日本は「クールジャパン」として、世界中から注目の的となっています。日本には古くからの優れた伝統文化が脈々と受け継がれており、この古くて魅力ある文化と新しい文化をハイブリッドさせたものを、日本のオリジナル文化として世界に向けて発信することが求められているのです。

一方、忘れてはならないことに、過去の貴重な文化財産を残して、伝承していくということがあります。

日本放送作家協会では、散逸・消失の危機にあるテレビ・ラジオの脚本・台本を収集する活動を、7年間続けてきました。文化庁を始め、NHK、民放連等の助成を受けながら運営を行ってきた結果、現在、4万冊以上の脚本・台本を寄贈していただき、保管しております。

この活動は、故・市川森一会長の「脚本・台本は作家だけの財産ではなく、放送業界全体の財産」という想いからスタートしました。後に続く若い作家・研究者のためにも、出来るだけ多くの脚本・台本を収集・保存して欲しい……と。

日本放送作家協会の「脚本アーカイブ活動」は協会員の熱意に支えられてきました。活動の中心となった日本脚本アーカイブズ特別委員会には、多くの放送作家たちが志願して参加してくれました。ただ残念なことに放送作家は、収集・保存の専門家ではありません。脚本・台本を大切に思う気持ちは誰にも負けません。7年間に及ぶ活動を経て、専門家の知識・技術が不可欠な段階に突入しました。今後、本格的にアーカイブ活動を推進していくために、リスタートのときを迎えようとしています。

そんな中、文化庁と国立国会図書館は昨年5月18日、『我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承に関する協定』を結び、放送の脚本・台本について「連携・協力して所在状況や保存等に関する調査研究を行うとともに、過去の重要な資料の保存について検討する」と発表しました。これを受けて、昨年夏、東京大学大学院の吉見教授を座長に任意団体「日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム」が発足し、関係諸団体とともに脚本・台本の収集・保存のあり方に関する検討会が行われてきました。このコンソーシアムの主たるメン

バーとして、日本放送作家協会も参加しています。

そして、今年の6月からは、わが国の脚本・台本アーカイブのより豊かな実りを目指して関係者が結集する組織、「一般社団法人 日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム」が誕生します。

日本脚本アーカイブズ特別委員会は、日本放送作家協会の一般社団法人化に伴い、この3月に一旦活動を終えることになりましたが、日本放送作家協会は引き続きこの新組織に参加し、活動に加わってまいります。私は、放送作家・脚本家の熱意だけでなく、制作関係者、俳優等出演者、放送局、制作会社、放送評論家、メディア研究者等が連携する形で、今後、脚本・台本のアーカイブ活動が推進されていくことは大変素晴らしいことと考えます。さらには、アーカイブや権利処理の専門家も加わっていただき、指導や助言を受けながら、文化資産である貴重な脚本・台本を収集・保存そして活用できる道がひらければと願っております。

文化とは伝統の積み重ねです。放送作家の先輩たちが魂を込めて創りだしたものを蓄積し、次の世代に伝えていくことは今を生きる放送作家として大事なことです。

放送作家が書いた脚本・台本はかけがえのない文化遺産の1つであり、後世に残すべきだという「脚本アーカイブ」の思想は、この日本においては、故・市川森一会長が提唱者です。その遺志を継ぐ意味でも、この脚本アーカイブ活動は続けていかなければなりません。そのステージが、日本放送作家協会から、文化庁と国会図書館を中心とした国家レベルに移行できたことが朗報であり、故・市川会長の願いが実を結んだことは、日本放送作家協会としても感慨深く、より一層の発展を願っております。

映像文化の向上に資する脚本アーカイブズ

香 取 俊 介 (日本脚本アーカイブズ特別委員会委員長)

平成 23 年度の脚本アーカイブズの活動の総括ともいべき「報告書」を、関係者のみなさまのおかげでここに送り出すことができました。社団法人日本放送作家協会の一委員会としての活動は今年度をもって終止符をうちます。

平成 17 年 10 月、足立区内の学びピアに準備室をオープンした当時、「アーカイブズ」という言葉自体、耳慣れないもので、そもそも脚本アーカイブズとはどのようなもので、どのように構築し、どのように運営すべきか等々、定まったイメージを持っていない状態でした。アーカイブや法律の専門家などを招いて研究会、勉強会を重ねるうち、おおよそのイメージがつかめてきたのですが、一方で設立には膨大な資金を要し、さらに維持管理をしていくには大変な資金と人材が必要であることを、強く認識させられました。

脚本アーカイブズの運動は足立区との「協働事業」でもあり、一時は足立区内の小学校の廃校あとに「脚本アーカイブズ会館」を設立するなどという構想もありました。しかし、現下の経済事情等ではそれは夢物語であり、「公的な機関」が主導していくしか設立の可能性は少ない——といった結論に達するまで時間はかかりませんでした。

一方で、脚本アーカイブズの活動をマスコミ報道他で知った脚本家や放送作家、制作者、出演者などから、寄贈したいとの申し出が相次ぎ、6 年半ほどの間に約 5 万点の脚本・台本・関連資料が集まりました。そのうち半分ほどは、映像・音声作品が残っていない可能性の強い 1980 年以前の大変貴重な脚本・台本です。

脚本・台本は少数しか作られず、しかも長期保存を想定していないため劣化が早く、図書のように現物を多くの人への閲覧に供することはできません。一般公開のためには、内容のテキストデータ化がぜひとも必要です。テキストデータ化することで、キーワード検索等によってさまざまな角度からデータを瞬時に呼び出すことも可能となります。文字情報は検索システムに容易に馴染むもので、今後の IT 技術の発展を考えると、将来的には今の我々が想定しない、新しく画期的な利活用の仕組みが生まれる可能性もあります。

アーカイブは現時点の価値観のみで判断してはならず、遠い将来をも見越した観点も必要であり、今後資料の取捨選択が大きなテーマとなってくるはずです。

周知のように脚本・台本は一般の図書と違って、それ自体が「完成品」ではなく、あくまで映像（音声）作品を作るための「設計図」です。ドラマ脚本に限ると、脚本家が書い

た第1稿がそのまま映像化されることは稀なケースであり、さまざまな角度から検討し第2、3稿と改訂を重ねて決定稿となります。第10稿に至るケースさえあります。

さらに制作段階で出演者、スタッフが書き込んだ脚本もあるし、演出家がカット割りをした撮影台本もあり、ひとつの脚本が制作過程でさまざまな形態を取るという性格を持っています。初稿から撮影台本に至るまでの複数の脚本には、ひとつの作品が創られるプロセスが内包されているとあってよいでしょう。

関係者にぜひ留意していただきたい点は、作品が創られるプロセスにこそ作品の秘密や本質が宿されているということです。次代の映像表現を目指す若い人にとって、作品が創られるプロセスを学ぶことは、最終的な作品に接する以上の効果を発揮します。従って、今後アーカイブしていく脚本・台本は「決定稿」1冊だけを保存するのではなく、初稿から決定稿、さらに撮影台本までふくめて保存すべきではないか。とはいっても、保存・管理するための容積には限りがあり、「図書館」としての従来の所蔵概念からは、当該作品について1冊の脚本があれば十分という見方も成り立ちます。そのため、同じひとつの番組の元になった複数の脚本は、「図書館」が担うというより「博物館」で担うべき資料かもしれません。

現段階では脚本・台本が書籍であるのか単なる資料であるのかも確定していないため、分類法も定まっていません。今後の調査・研究を通じて形が決まってくるはずですが、その際大事なことは、脚本アーカイブズを利用する人たちの観点にたつと同時に50年100年先を見据えたシステム構築です。

いずれにしても、関係者のおかげをもちまして、平成23年5月、文化庁と国立国会図書館によって「協定」が結ばれ、脚本アーカイブズの運動は新たなステージへと踏み出します。今後はこの協定にそって生まれた「脚本アーカイブズ推進コンソーシアム」が中心となって、脚本アーカイブズ実現にむけての「調査・研究」を深めていくことになります。

推進のリーダーであった市川森一前放送作家協会理事長が急逝され、大きな傷手をうけましたが、市川氏の遺志を無駄にしないためにも「脚本アーカイブズ」が一日も早くホップ、ステップからジャンプをして、国民のだれもが利用できる環境の整うことを願ってやみません。

末筆ながら、6年半にわたり準備室や所蔵庫等を提供されるなどしてご協力下さった東京都足立区の関係者の皆さま、ありがとうございました。

電子的なアーカイブの大切さ

長尾 真 (国立国会図書館長)

1. アーカイブの大切さ

近年デジタル化技術の進展と大規模記憶装置の開発によって、ぼう大な記録がデジタル的に保存され、活用される時代となって来た。デジタル化しアーカイブすることの利点は数々ある。まず第1に原資料は唯一で、これが火事などで消失したらおしまいであるが、デジタル化すれば幾つでもコピーが簡単に出来て、これをあちこちに分散して保存しておけば、万一の災害に対してもどれかが残るわけである。今日では原資料のファクシミリ印刷等による複数コピーの保存と比べて安価であると考えられる。もう1つの利点はアーカイブされた資料がネットワークを経由してどこでも自由に見ることができるし、ぼう大な資料の中から欲しいものを簡単に検索して取り出せることである。貴重な資料であればあるほど保存という観点からは限られた人しか見られないし、いつも手元において見るということは不可能であるのに対して、デジタル化されたものはだれでもいつでも自由に見ることができる。最近のデジタル化技術によれば十分な分解能のデジタル化ができ、資料の細部は現物を拡大鏡で見なければ分からないような所についても簡単に調べることができる。さらに大切なことは1つの資料と関連する他の資料とを同時に取り出して比較検討するといったことが容易にできることであろう。

2. 国立国会図書館における努力

国立国会図書館は日本で唯一の納本図書館として日本の全ての出版物を納本してもらい、保存し利用に供している。その収集範囲は出版社から出されるものだけでなく種々の組織や個人が作る定価の付いていない出版物、報告書類、音源・映像資料などである。当館における“出版物”の概念としては“おおむね100部以上のコピーを作って配布されるもの”としているが、小冊子やビラなどの一枚物は収集していない。脚本や台本は舞台芸術やテレビ番組などの製作のために作られ、限られた人達が使うものであるとして、これまで収集の対象として来なかった。

資料のデジタル化については、明治以降の出版物を順次デジタル化しており、今は1968年までに出版された図書88万冊、古典籍7万冊、1万2千種の雑誌の創刊号から2000年までのもの、さらに博士論文14万点、その他国会会議録、帝国議会議事録の全て、官報などがデジタル化された。また最近では国や地方公共団体、国立大学、独立行政法人

等のウェブサイトの情報を頻繁に収集している。これらの資料の電子的サービスは既に行っているが、高度に組織化されたアーカイブとするのはこれからである。また東日本大震災に関連する各種の記録を関係する省庁と連携して収集し、デジタルアーカイブ化して誰もが利用できるようにしようとする事業を開始した。

3. 脚本アーカイブの大切さ

最近までその価値がよく認識されずに捨てられていた脚本・台本の創作物的、文化財的資源としての重要性が認識され、そのアーカイブへの努力が始められていることは喜ばしいことである。その意義等についてはここでは述べない。ここで強調したいことは2つある。その1つは脚本・台本とそれによって作られた映像（テレビ番組、映画など）とを対にしてデジタルアーカイブをすることの大切さである。もう1つはこのようにして記録されたデジタル資料の再利用についてである。

脚本・台本だけを記録しておき、これを取り出して読むということの価値はいうまでもないが、これがどのような舞台芸術に実現されたか、どのようなテレビ番組などになったかを同時に知ることによって得られるものは大きい。そもそも脚本・台本はそのようなことを前提として作られているからである。そして場面ごとにおける演出家、あるいは登場人物のパフォーマンスなどにおける創造性をも見ることができる。したがって脚本・台本と映像を時間の流れにそって対応関係を取った形でアーカイブすることが最も大切なことになるわけである。

このような形で映像と脚本・台本を対にして記憶しておけば、映像の特定の部分を取り出して再利用することが比較的簡単に出来ることになる。たとえば北欧の風景映画を作る際、過去のソグネフィヨルドの風景を取り出して再利用したいという時に、沢山ある映像を全て見て当該部分を取り出すことはとても出来ない話である。そういった時に映像とともにその作成の元となった脚本・台本が対になって記憶されておれば、“ソグネフィヨルド”という言葉によって脚本・台本のアーカイブを検索し、ヒットした部分に対応する映像部分を取り出せばよいわけである。このような検索システムはまだどこにも実現されていないが、やれば容易に出来ることであるから、日本においてぜひ積極的に推進すべきことであらう。

いずれにしても、無くなりつつある脚本・台本を急いで収集し、対応する映像とともにデジタル化し、アーカイブを作ることは日本の文化財の保存と利用にとって大切なことである。

脚本アーカイブは何を目指すのか

吉見俊哉 (東京大学教授)

脚本アーカイブのプロジェクトが狙っているのは、放送文化の設計図を残し、再活用可能な基盤を形成していくことである。今日、番組や映画のアーカイブ化と再利用の基盤構築の重要性が認識されつつある。映画に関しては、東京国立近代美術館フィルムセンターが国内最大の拠点であることは疑いない。他方、放送に関しては、NHKで放映されたものはNHKアーカイブスに集まり、他にも一部は放送番組センターに収蔵されている。しかし、民放は地方局のなかには、必ずしも番組保存の基盤が整っていないところもある。

その一方で、これらのアーカイブ化で重要なのは、作品が集団的なプロセスの結果であること、つまり作品は、あくまでこのプロセスの連続性のなかにあることである。だから、映画も放送も、本質的に演劇に似ている。映画や放送では、演劇と異なって作品が映像として残されるが、しかしそれらはプロセスの記録として残るわけで、重要なのは、作品が制作されていく集団的営為と、それが受容されていく社会的過程である。この意味で、映画や番組は、それが生まれ、受容された時代性を完全に超越することはない。

こうしたなかで、脚本は、ちょうど演劇の台本がそうであるように、一連の実践的なプロセスの設計図として機能する。演出家も、俳優も、スタッフも、脚本という同じ設計図を共有することによって、それを異なる立場から様々に解釈し、その異なる解釈がぶつかり合い、調整されていくなかで映像作品が創造されていく。この作品の創造プロセスによって、脚本家は神ではないが、関与者の想像力を触発する最高の媒介者である。

そうだとすると、この脚本のアーカイブ化は、たとえば完成された文学作品の収蔵などとは意味が異なる。後者においては、収蔵された作品は自立した完成品で、読者によって個別に享受されていく。しかし脚本の場合、それ自体に様々な段階の異なるバージョンがあることや、実際に俳優やスタッフに使われたものであれば、現場感覚に溢れた書き込みがなされていることなど、プロセスの一部として位置づけられる。

まさしくそうであるが故に、脚本のアーカイブ化は、文字通り 21 世紀的な文化の基盤的な変化に対応した動きである。それはしばしば「活字」から「デジタル」へと言われているが、これは事柄の一面にすぎない。「活字」が象徴しているのは、単一の著者の名前と共に固定され、同じものが大量生産されていく文化のあり方である。これに対して「デジタル」が象徴するのは、参加自由の集団的なプロセスと化し、無数の多様性が生み出さ

れていく文化のあり方である。21世紀は、人類文化全体が前者から後者へ地殻変動を起こしていく時代である。このような地殻変動のなかで、図書館は固定したパッケージの収蔵庫から、脚本や草稿、設計図などのプロセス性の強いもののアーカイブへも拡張していく。

つまり、脚本をアーカイブ化することは、番組が制作され、視聴された歴史をアーカイブ化し、異なる文脈で再利用可能なものとしていくことである。だから保存のフェイズでは、その脚本が番組の制作過程のどこでどのように用いられたのかを明らかにしておくことが必要となる。また、脚本家の他の脚本群との関係や、演出家や俳優との関係、映像がどのように放送されていったのかといった情報も貴重である。そのような様々な情報がメタデータに書き込まれ、脚本のデータと映像が結びつけられていくなれば、脚本やシナリオのアーカイブは、単に図書館の文献データベースのようなものではなく、わたしたちの放送文化、映像文化そのものの、最も完璧な集合的記憶となるであろう。

まさしくこのような意味で、脚本アーカイブが目指している理想型を示していくことのできる最高の種子が、本プロジェクトの足元に存在する。このプロジェクトの呼びかけ人であり、立ち上げから一貫して推進のリーダーであった亡き脚本家・市川森一さんの脚本をアーカイブ化していくことである。これを今、「市川森一アーカイブ」と名づけよう。

市川森一アーカイブは、市川さんの記憶を歴史にとどめるだけでなく、脚本・シナリオのアーカイブ化プロジェクトの未来にとって、いくつかの際立ったプラス面を含んでいる。まず、市川森一さんの脚本家としての活動期間は長く、日本の番組制作の早い段階から現在までの歴史と深く結びつき、それぞれの時代状況に作家独自の視点で対してきた。そうした意味で、市川作品は、戦後日本のテレビドラマの歴史の最良の部分的代表してきたといってもいい。しかも、市川さんは非常に多くの作品を残されており、それら全体が「市川森一ワールド」とでもいふべき宇宙をかたちづくっている。いくつかの代表作の主演、脇役を演じてきた主だった俳優たちとの結びつきも深く、今ならばそれぞれのドラマについての俳優やスタッフの聞き取りも十分に可能である。これらを総合していけば、理想的な脚本アーカイブのモデルを構築していくことが不可能ではないのである。

脚本アーカイブの大きな役割は、作家の魂は死なないことを証明することでもある。脚本のみならず、映像が体系的にアーカイブ化され、再利用可能になれば、映像文化全体が死なないことが証明される。実際、わたしたちは今日でも著名な小説家や画家の作品を読み続けるし、彼らの創造を永遠の文化財としていくが、同じような位置をテレビ番組や映画が得るためには、脚本・シナリオと映像のアーカイブ化、その再利用の仕組みの整備が必須なのである。散逸した大量の脚本についての調査や権利処理、収蔵スペース、デジタル化のための基盤整備など、解決すべき課題は多い。しかし、本事業の誠実で熱意の満ちた営みは、そうした未来に道を拓く着実な一歩であると確信している。

脚本アーカイブズのメタデータ管理

緑川 信之 (筑波大学図書館情報メディア系教授)
谷口 祥一 (筑波大学図書館情報メディア系教授)

1. 脚本とそのメタデータ

脚本（台本）とそのデータ（メタデータ）の管理という課題には、それら対象とする資料群が構成する世界に対するモデリングが先ず重要となる。換言すれば、対象とするアイテムとは何か、その単位と相互の関連をどのようにとらえるべきかとの問題である。

この問題を考える際には、対象とする資料群の特徴を考慮することが必要となる。

- ・脚本は物理的に独立した資料を構成しており、数量の上でもこれが基本的な対象資料となる。
- ・脚本には、第1稿、第2稿……完成稿といった、いわゆるバージョンが存在する。
- ・関連する多様な資料群（写真、メモ、ポスター、その他）が併せて存在する。ただし、現時点での数量は限られている。
- ・脚本（そしてそれが属する「番組」）には「シリーズ」等と呼ばれる「まとまり」（グループ）または「つながり」がある。
- ・脚本（「番組」）に関する外部のデータ／データベースが存在し、それらとの連携が求められる。

こうした資料群をモデル化したのが、図1である。

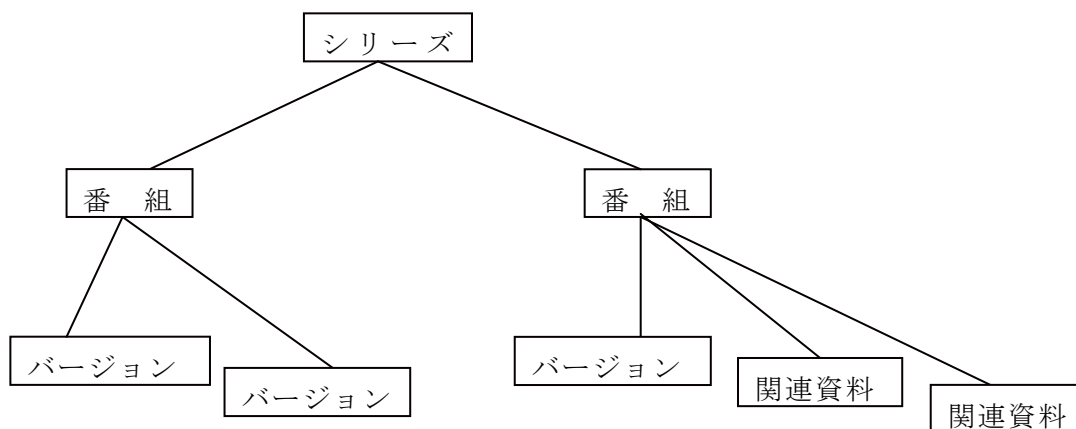


図1 対象資料群のモデル

ここで「番組」と呼んでいるのは、「タイトル+放送局+放送日/放送回」によって同定識別できるものを指しており、「作品」との名称も適用されよう。なお、「タイトル」自体、複数の階層を構成している場合があり、その上位階層が図の「シリーズ」に該当する。たとえば、番組「オレンジの季節 第2回」は、シリーズ「オレンジの季節」と2階層を形成するが、番組「長七郎江戸日記 1 第1回」や「長七郎江戸日記 1 スペシャル」は、論理的には「長七郎江戸日記」、その「1」（シリーズ1）、「2」（シリーズ2）……さらにそれぞれの「第1回」、「第2回」となり、合わせて3階層となる。加えて、「第1回」、「第2回」それぞれが独自の（固有の）タイトル（「謎の五郎兵衛」など）をもつ場合もある。

こうしたモデルに依拠して、具体的なメタデータの作成や管理の方式を選択することになるが、そこには複数の方式が考えられる。

①資料単位を基礎とする方式：モデル図の「バージョン」に該当する個々の脚本単位にメタデータを作成する方式。脚本（資料現物）自体の管理と連動させやすく、現在進められているメタデータ作成・登録作業は概ねこれに該当するものと見られる。なお、同一番組の異なるバージョンの脚本（第1稿、完成稿など）が登録された場合、「タイトル+放送局+放送日/放送回」等によって事後的に（すなわち検索システムの検索結果として）それらがまとまりを形成することに委ねるかたちとなる。つまり、メタデータの作成・登録時点で「番組」としてのまとまりを指示することはしない。また、脚本の関連資料が存在する場合には、便宜的な対処として特定の「バージョン」に伴う注記（備考等）においてその内容と数量等を記載することになる。関連資料は特定の「バージョン」に関連するのではなく、本来「番組」に属するものであるため、便宜的な対処となる。

②番組単位を基礎とする方式：番組すなわち「タイトル+放送局+放送日/放送回」で特定できるものを基礎的な単位としてメタデータを作成する方式。さらに、a) 番組単位のメタデータと資料（バージョン）単位のメタデータの双方を作成し、相互にリンクさせて管理する方式と、b) 番組単位のメタデータのみ作成し、個々のバージョン固有の情報や関連資料の情報は、多少とも無理をしてそれに収める方式とがある。a) の方式がより柔軟な表現力をもつことになるが、同時にメタデータ管理の複雑さが増加する。

他にも、シリーズ単位でメタデータを作成する方式もありうるが、シリーズ自体が前述の通り複数レベルを構成する場合があり、また資料現物の管理との乖離も大きくなるため、今回は現実的な選択肢ではなかろう。

上記の方式①または②、さらにはその下位の選択肢のいずれを採用すべきかは一概には決めがたい部分もあるが、現実的な作業進行をも考えた場合、現行の方式①によって進め、番組単位の管理の必要性が相当程度に生じた段階で何らかの手立て（弥縫策であろうが）を講ずることになろうかと考える。

2. メタデータを介した脚本へのアクセス

作成したメタデータを介して（検索して）個々の脚本にアクセスするためには、いくつかの方式がある。

まず、脚本の表紙や本文に書かれている語（記号を含む場合もある）をそのままメタデータに記述し、それを検索の対象とする方式である。例えば、「次郎物語」という語で検索する場合、脚本の表紙や本文にこの語が書かれていて、それをメタデータに記述してあれば、この脚本は検索される。

上記の方式では、検索に使う語が脚本の表紙や本文に書かれていない場合には、この脚本は検索されない。例えば、「刑事物」という内容の脚本であっても、表紙や本文に「刑事物」という語が書かれていないとは限らない。このような脚本は「刑事物」という語では検索できない。そこで、脚本の表紙や本文には書かれていない場合でも、検索に使われるだろうと考えられる語を、メタデータの中に追加して記述しておく方式がある。このように、対象資料に書かれていないとは限らないが、検索のために追加してメタデータに記述する語を索引語と呼ぶ（キーワードと呼ぶ場合もある）。

索引語の方式はさらに、メタデータを作成する人が思いついた語を記述する場合と、あらかじめ用意した用語リストの中から語を選んで記述する場合とに分けられる。

前者は自由に語を選べるので自由語（自由索引語）の方式と呼び、後者は用語リスト中の語という限定された（統制された）語の中から選択するので統制語（統制索引語）の方式と呼ぶ。

自由語の方式では、メタデータ作成者が「刑事物」という索引語を記述しても、利用者は「刑事ドラマ」という語で検索するかもしれない。こうした同義語・類義語の中から、用語リストで指定された語だけを使うようにするのが統制語の方式である。メタデータ作成者も利用者も用語リスト中の語を使えば、索引語として記述された語と検索に使う語の一致度を高めることができる。統制語の方式はさらに、他のデータベース（アーカイブ）と互換性を持たせる上で有効である。その反面、統制語の方式には、用語リストに収録されていない語は使えない、いちいち用語リストを見なければならぬ、という問題がある。後者の問題は、メタデータの作成時も検索時も用語リストをプルダウンメニューなどで提

示して選択できるようにすれば、ある程度は軽減できる場合もある。

用語リストの形式としては、体系を中心とした分類表と、語の間の関係に重きを置いたシソーラスや件名標目表がある。分類表は厳密に言うとは語ではなく概念の体系を示すものであるが、概念も語を使わなければ表現できないので、一種の用語リストとみなすことができる。ただし、概念を表現する語は必ずしも一つでなくてもよい。例えば、『日本十進分類法』では、「(日本の) 脚本」という概念は「912.7 シナリオ. 放送ドラマ」という項目に位置づけられている。つまり、「シナリオ」と「放送ドラマ」という二つの語で表現されている（さらに、特定の概念を一意に定めるために分類記号「912.7」が使われているが、これは不可欠ではない）。検索における分類表の機能は、分けていくことによって特定の対象を探し出すことと、纏めていくことによって類似の対象を見つけることである。例えば、「912.7 シナリオ. 放送ドラマ」は、「912.4 浄瑠璃」、「912.5 歌舞伎」などととも「912 戯曲」の下位項目とされているので、これらを纏めて検索したいときは「912 戯曲」で検索すればよい。

一方、シソーラスや件名標目表は、「脚本」、「シナリオ」、「台本」などの語の間の関係を示している。例えば、『基本件名標目表』では、「脚本」は「戯曲」と同義とみなされ、索引語や検索語としては「戯曲」を使うように指定されている。また、「シナリオ」は「映画の脚本」および「台本」と同義とみなされ、索引語や検索語としては「シナリオ」を使うように指定されている。そして、「シナリオ」は「戯曲」の下位語であることも示されている。このように、同義語や上位語・下位語の関係を示すことによって、索引語や検索語としてどの語を用いればよいかを判断できるようにするのが、シソーラスや件名標目表の機能である。なお、シソーラスや件名標目表でも語の間の上位・下位の関係が示されているので、ある程度の体系性があるが、分類表ほど厳密ではない。例えば、先ほどの「戯曲」の上位語には「演劇」と「文学」の二つがある。分類表では上位項目が二つ以上あることはなく、『日本十進分類法』では「912 戯曲」の上位項目は「91 (日本) 文学」だけである。

以上のように、メタデータを介した対象資料（脚本）へのアクセス方式には様々なものがあり、どれが最適かを検討する必要がある。いくつかの方式を組み合わせる方法も考えられる。また、索引語をメタデータに加える場合は、その種類を検討する必要がある。脚本の内容を示す語（ジャンルなど）は最も有力な候補であろう。脚本の表紙や本文に書かれていても表現が統一されていない語（作品情報など）も、用語リストによって統一する方がよいかもしれない。

ネットに「テレビドラマデータベース」を構築した経緯

古崎 康成 (テレビドラマ研究家)

私はネット上で「テレビドラマデータベース」(<http://www.tvdrama-db.com>) というサイトを運営している。このサイトでは日本のテレビドラマすべてを収録対象として、放送期間、放送回数、制作会社、スタッフ、キャストなどの情報を集積し、これを誰でも無料でタイトル名やスタッフ、キャストの名前から自由に検索してご覧いただけるようになっている。

収録総本数は、2012年2月現在で、52,000件になる。

どうやってテレビドラマのデータを収集しているのかといえば、実際に放送されたドラマを録画し、それをせっせと一作品ずつ再生し、表示されるクレジットを画面から入力していく作業が基本だ。それ以外に過去の文献資料を図書館や古書店で手分けして検索してその記述をもとに入力することもある。かなり面倒だ。作業は基本的に私一人だが、最近はネットを通じて多くのドラマ好きの人からデータの提供も受けている。

なぜこんなサイトを運営するようになったのかといえば、簡単な理由だ。私がテレビドラマを大好きだからだ。

私がテレビドラマを好きになった理由は高校生のころにさかのぼる。今から考えるとお恥づかしい話だが、高校生になるまでテレビドラマというものを軽視していた。じっくりと作られる映画と比べ、テレビドラマはお手軽な存在という程度の認識であった。その認識が根底からひっくり返されたのは、とある日の夕方に、なにげなく見た再放送のドラマからだった。山田太一氏脚本の『早春スケッチブック』だった。ドラマの主人公が同じ高校生ということもあったのかも知れないが、主人公の心の動きがまるで自分の気持ちのように感じた。ものすごいドラマだと思った。テレビドラマというのは、身近な存在だ。だからこそ、多くの人の生き方を変えるほどの影響を与えることもあるのだ。それまで映画ばかりに熱中していた私が、テレビドラマに開眼した瞬間だった。

そして改めて気づかされたのは、テレビドラマをめぐる社会の認識の希薄さだった。多くの人々の気持ちをゆり動かしたドラマなのに数年後には記録も残らず記憶の中で薄れゆくに任せるのみのように映った。そこでテレビドラマを記録に残し、もっと文章で語ったり、キチンと後世に残していく場というものが必要ではないか、という思いに強くとらわれた。自分がそれをしなければ誰もやってくれない。そんな思いにとらわれた。「月刊ドラマ」や「放送文化」「放送批評」などの専門誌を手にし始めたのもこの時期だ。

大学を山田太一氏と同じ大学の同じ学部に進んだのはほんの偶然だったのだが、そこで



放送学を専攻し、授業のないときは図書館、演劇博物館で過去のテレビドラマの情報を片っ端から調べていった。1986年から90年にかけて、この大学生時代の調査が現在の「テレビドラマデータベース」のベースになっている。

インターネット上のサイトとして「テレビドラマデータベース」をオープンしたのは1997年7月のことだ。稼動当初はドラマのデータをインタラクティブに検索する機能はなかった。制作年度ごとに主要なドラマのデータを単に並べているだけだった。私にはWEB作成の知識がほとんどなく、検索システムなど搭載できるはずもなかったのだ。そこで、サイトの目立つところにドーンと書いておいた。

募集・教えて下さい。

本当はインタラクティブな検索ページをつくりたかったのですが、私の浅薄な技術では残念ながらまだ無理のようです。検索ページを作ってくれる技術をお持ちの方はアドバイス下さい。

するとわずか2ヵ月後に検索システムを作っている専門企業の方から連絡をいただいた。ドラマを検索するシステムを用意してあげるというのだ。この申し出を下さったのが株式会社キューズ・クリエイティブの藏田正彦氏であった。藏田氏は昔のドラマを検索していて私のサイトを見つけたそうだ。おかげで、その年の12月から現在の「テレビドラマデータベース」の検索システムの原型となる検索エンジンが搭載されるに至った。システムは2009年に大幅に拡充されて現在の形に至っている。

テレビドラマのデータを収集し始めて驚いたのは、整備されたドラマデータの少なさだった。未発掘の放送作品が見つかるのはザラだ。数少ない文献資料も多くが記憶に頼っている記述が少なくなく、「誤り」も多かった。基本的な放送期間、放送局などの記述すら間違っていることがある。記述されている放送開始日を曜日換算すると、放送曜日と一致しないことなど往々にしてあった。あるいは、正しいとされている放送期間から換算すると、その放送回数は明らかに正しくないケースが少なくなかった。これらは入力内容を系統的にチェック手法で徹底的にあぶりだした。

現在もこうした作業はまだまだ道半ばなのだがある程度のデータが蓄積できてきて、おかげさまで多くの人に利用していただくようになった。最近「テレビドラマ研究家」としていろいろとドラマに関する文章を各所に寄稿させていただいたりもしている。

だがいつまでやっていけば終わりがあるのだろうかという漠然とした心配もある。もはやこういうレベルになってくると個人の努力ではどうしようもないところまで来てしまっているのではないか。映画のデータベースのように、テレビドラマについても公的機関が過去の放送記録の把握につとめていくことが必要ではないか。そのためになら協力はいとわないつもりだ。

現在進行している脚本アーカイブの動きは、貴重な第一歩ではないだろうか。当データベースのデータとも有意義な協力関係ができればと願っている。

脚本の収集・保存・公開に要する権利問題

福井 健策 (弁護士・日本大学藝術学部客員教授)

【1】 脚本の収集・保存・公開に関する権利問題は多岐にわたる。

【2】 言うまでもなく最大の問題は著作権であり、脚本・台本はほとんどが著作物と予想される。著作者・著作権者は原則として脚本家・台本作家だろう。また、小説など原作がある場合には原作者も同様の権利を持ち（著作権法28条）、その双方の許諾がなければ脚本・台本の利用はできない。

利用の段階ごとに見れば：①現物たる脚本・台本の収集・保存は、複製を伴わない限り著作権とは関わらないので許諾は不要。

②現物たる脚本・台本の公開も、「展示権」はここでは働かないので著作権的には許諾は不要だが、もしも脚本・台本が未公表作品ということになると著作者人格権のうちの「公表権」が関わるので許諾が必要となる。しかし、脚本・台本は通常100～250部配布される由であり、そうであれば（対象が関係者のみであっても）著作権法の「発行」の条件を十分満たす数なので、発行・公表著作物となり（同法3条1項・4条1項）、公表権の問題は生じない。より小部数しか作成されなかった脚本・台本でも、同一の内容を含むTV番組が放送されたことで、（編集などにより放送された番組と脚本・台本とに本質的な相違が生じた場合を除いて）やはり公表著作物とみなして良いのではないか。

③脚本・台本のデジタル化は「複製権」の問題であり、許諾が必要。国立国会図書館の収集資料となれば、この点は特別規定があるので解決できる（同法31条2項）。

④デジタル化された脚本・台本の館内公開・ネットアーカイブ化は、それぞれ「上映権」「公衆送信権」の問題なので、やはり許諾が必要。また「公表権」については②と同じ問題となる。

こうした許諾における問題点・課題を記せば、脚本・台本は著作物としては（それでも）比較的近時の作品といえるため、日本脚本家連盟・シナリオ作家協会・（原作であれば）日本文藝家協会などに加盟ないし管理が委ねられた作品であれば連絡・交渉までは相対的に容易であろう。後は上記①～④のいずれの利用について、どんな条件で許諾が得られるかの問題となる。放送文化の保存・継承のため関係諸団体の前向きな努力を期待したい。

ただし、権利者団体に加盟していないノンメンバーの場合、作家や遺族を探して交渉す

る労力その他のコストが小さくないことは「国会図書館近代デジタルライブラリー」「NHKアーカイブス」などの経験が教えている。上記権利者団体をはじめ、**権利の集中管理**の一層の進展が望まれよう。

なお、脚本・台本の収集・公開の努力は、紙資料ばかりか権利者情報の散逸を防ぎ、その集約・一元管理化を促進する上で、番組自体の将来の広汎な二次利用にも大きく資することを指摘しておく。その意味で、収集された文献に**メタデータを付する際に権利者情報を同時に記載する、権利者情報をデータベース化する**などの運用が望まれる。

努力しても見つからない権利者の場合、**文化庁長官の裁定制度**を利用する。近時、一定のルール改善が図られたとはいえ、なお決して使いやすい制度ではないという声が強い。文化庁における人的・物的体制の大幅拡充が無理であれば、民間委託や更なるルール改善などを検討すべきである。

【3】 上記以外の権利問題を眺めておけば、所蔵家の権利、つまり**現物の所有権**がある。当然ながら現物たる脚本・台本の収集には所蔵家の許可・協力を要する。いったん寄贈などを受ければその後の上記②～④の利用に所有権は直接及ばないが、実際には寄贈・寄託の際に利用範囲を条件づけられる可能性がある。将来の再交渉の負担を考えれば、寄贈・寄託先において出来るだけ自由に使える条件での収集が望ましい。

最後に、**脚本・台本への書き込み**の問題に触れる。それらが新たな著作物であるケースは少ない（あるいは現実の法的リスクが比較的低い）だろう。ただし、書き込みが個人情報にあたる場合（特に生存する個人の連絡先やセンシティブな事柄に関連する場合）は、その公開には一定の配慮が必要となる。

文化版の公共事業

松岡資明（日本経済新聞社編集委員）

秋田県公文書館が2009年3月、「市町村公文書保存状況調査」という興味深い調査の報告書をまとめている。平成の市町村合併が行われた際、合併に伴って旧市町村の公文書が大量に廃棄される恐れがあり、これを未然に防ぐ目的で行われた。調査は合併前の全市町村、69を対象に行われたが、実に面白いことが分かった。

それによると、「市町村役場における一般公文書の保存優先順位は、行政的な現用性に価値基準を置く傾向にある。残念ながら、この方法ではアーカイブズ的価値観が含まれることは少ない。これが、文書管理規定の内容、保存場所のランク差、庁舎建て替え時の大量廃棄に大きく関係している」というのである。

通常、一般公文書は戸籍関係、土地関係、その他の行政分野関係といった順位で扱われ、戸籍や土地関係の文書は明治期のものであってもきちんと整理され、環境の良い場所に保管されている例が多いという。これに対し、各種委員会や森林組合、消防団など外部団体関係の文書になるとあまりきちんと保管されていないことが明らかになった。

確かに役場にとってみれば、戸籍や土地関係の文書が大事であり、歴史的な資料としても重要であるのはうなずける。しかし、その地域の政治や経済、社会の諸相を知ろうとすればむしろ、その他の行政分野の文書、各種委員会や森林組合、消防団などに関する文書の方が記録として意味があるというのである。公文書、つまり記録はそれを読む、あるいは見る立場によって価値が違ってくる。どの立場の人間にも等しい価値があるわけではないのである。だから、記録は一つが残っていれば良いというわけにはいかない。できる限り多種多様な記録を残す必要がある。

国の記録に関しても同じことが言えるのではないだろうか。国の記録、なかでも行政機関の記録に関しては2011年4月の公文書管理法施行によってまがりなりにも保全されることになった。しかし、50年後、100年後の人が21世紀初頭の日本の歴史を紐解こうとした時、国の公文書だけで事足りるということには間違ってもならない。経済や社会、文化さらには風俗といったところまで記録に関する視野を広げておく必要がある。

その意味で、2011年5月、文化庁と国立国会図書館の間で「我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承に関する協定」が結ばれ、「連携・協力してテレビ・ラジオ番組の脚本・台本の所在状況や保存方法等の調査研究を行い、重要な資料の保存について検討する」こ

とになったのは大いなる前進である。

2012年6月には推進母体として一般社団法人「日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム」が設立されることになるという。コンソーシアムは脚本・台本アーカイブズ構築に向けた調査研究などの活動、脚本・台本の収集と保存に向けた活動を二本の柱として具体的な活動を始める予定というが、脚本や台本の所在情報を収集するだけでも容易なことではない。まして集まった脚本・台本をどこに保管し、活用に供するかとなると、乗り越えるべき壁はとてつもなく高く、厚い。

筆者のような門外漢にすれば、まるで巨獣を相手にしているようで取り組み方など見当もつかないが、ただ一つ言えることと云ったら、脚本・台本アーカイブズ構築の意義を広く国民一般に理解してもらうことが必要なのではないか。どこを見回してみても壁だらけという現在の状況からすると、突破できるような場所は見当たらないかもしれない。しかし、経済大国から転落しつつある日本にとって、何を将来のよりどころにできるかといえは文化、伝統といった、曖昧模糊とした分野だけなのかもしれない。

振り返ってみれば、私たちは日本の文化について系統立てて教えられた覚えはない。ほとんどの場合、自分の興味が赴くままに日本文化の何かをかじり、糧としてきた。よほどの例外を除き、それは断片的だったような気がする。「文化力」が長年、軽視されてきたのはそのためかもしれない。おしん、ポケモン、コナン……。いずれも海外で爆発的な人気を誇る、あるいは誇ったキャラクターである。そこには恐らく、現代日本人が自覚していない魅力がひそんでいる。皮肉な話だが、日本文化とくに現代日本文化の魅力を日本人自身が最も知らないのではないだろうか。

その魅力を改めて見つめ直していく必要があるはしないか。とすれば、近代以降とりわけ昭和の時代に焦点を合わせた壮大な文化アーカイブズといったものを構築していくというアイデアを仕掛けてみてはどうだろうか。昭和という時代を文化の視点から改めて見つめ直す。昭和の文化総集編である。荒唐無稽な話に思えるかもしれない。しかし、脚本・台本のアーカイブズに狙いを定めて知恵を絞っても今の状況を突破するのは容易ではないように思える。「昭和の文化まるごとアーカイブズ」を構築する中で、脚本・台本アーカイブズを構築してゆく。むろん、構築のプロセスは随時、発信する。いささか気宇壮大に過ぎるかもしれないが、思い切って大風呂敷を広げてみてはどうであろうか。換言すれば、文化振興の基盤を整えるための公共事業とも言えようか。しかし、決して無責任に提案しているわけではない。

放送界の「負の遺産、を乗り越えるために

鈴木 嘉一（読売新聞編集委員）

日本放送作家協会が文化庁の支援を受けて発行してきたこの調査・研究報告書も、今回が最後になると聞いた。「日本脚本アーカイブズ」設立運動の趣旨に賛同するとともに、これを推進してきた故・市川森一理事長をはじめ、南川泰三さん、香取俊介さんら日本脚本アーカイブズ特別委員会のメンバーの献身的な努力と情熱には感じ入った。新聞記事として取り上げるだけでなく、東京・北千住の準備室での勉強会で講師を務めるなど、個人的にもささやかな協力を惜しまなかった。そうしたかかわりから、脚本アーカイブズの役割についてこれまであまり注目されなかった視点を提示したい。

2月15日、東京の国立国会図書館で開かれたシンポジウム「失われた脚本・台本を求めて——文化リサイクルの意義」の第1部で、女優の藤村志保さんは「テレビは生活に欠かせない文化ですから、その歴史を次の世代に伝える必要がありますが、1960年代の番組はほとんど残っていません。私が出演したNHKの大河ドラマ『太閤記』や『三姉妹』にしてもそうです。だからこそ、台本の保存が大切になります」と発言した。

言うまでもなく、テレビの草創期は生放送が主流だった。60年代から70年代にかけてVTRが普及したが、ビデオテープが高価だったため、放送が終わると次々に消去され、再利用された。NHKの看板番組である大河ドラマですら、ごくわずかしかなかった。すべての回と総集編を保存するシステムが確立されたのは、78年に放送された第16作目の『黄金の日』以降になる。草創期から成長期にかけてテレビ史の大きな空白を埋めるのは、脚本アーカイブズに期待される重要な役割の一つである。この点について、日本放送作家協会をはじめ関係各方面の認識は一致しているはずだが、私はさらに一步踏み込みたい。

テレビの受像機が爆発的に普及した成長期は、自民党政権からの政治的圧力やスポンサーからのクレームが強まり、放送中止事件などが続発した時代でもあった。メディア総合研究所編の『放送中止事件50年——テレビは何を伝えることを拒んだか』（2005年、花伝社）は、番組作りに携わった当事者たちの証言を基にして、闇に葬り去られた番組の内容とその経緯を掘り下げた労作である。

中でも、62年に起きたRKB毎日（福岡市）の『ひとりっ子』放送中止事件は大きな社会問題になった。芸術祭参加作品として作られたこの単発ドラマは、防衛大学校への進学を望む父親と、「戦死した長男と同じ道を歩ませたくはない」と考える母親との間で悩

む次男を主人公にして、最終的には、次男が働きながら本来の志望校に進む決意をするまでを描いた。TBS系の『東芝日曜劇場』で全国ネットされる予定だったが、1社提供スポンサーの東芝が「提供中止」を通告し、RKB毎日放送は放送を中止せざるをえなかった。『放送中止事件50年』は右翼から自民党、防衛庁、経団連まで絡んだ水面下の動きを追うとともに、放送の実現を求めるRKB毎日の労働組合や民放労連の取り組みに言及している。

NET（現テレビ朝日）が62年から始めた裁判ドラマ『判決』も、テレビ成長期の受難劇の主役になった。社会の矛盾や問題点を鋭く突き、「テレビの良心の灯」と評される一方、現実を直視する制作姿勢が局内外から度重なるクレームをつけられ、放送中止や脚本の書き直し・カットが相次いだ。税制を批判した深沢一夫作の「老骨」、文部省の教科書検定制度を真っ向から問う本田英郎作の「佐紀子の庭」は制作や放送を見送られ、脱脂粉乳が嫌いな子供を取り上げた西沢裕子作の「赤い実」の脚本が改変されたのは、ほんの一例にすぎない。

局内外のさまざまな風圧は、ドキュメンタリーやティーチ・イン（討論）番組などにも及んだ。65年、日本テレビの牛山純一プロデューサーらがベトナム戦争の戦場取材した『ベトナム海兵大隊戦記』は、佐藤栄作内閣の橋本登美三郎官房長官から「第1部には残酷シーンがある」と文句をつけられた。第2部と第3部の放送は中止され、大きな論議を呼んだ。

これらの番組は、放送法に基づくわが国唯一の公的な放送アーカイブズである横浜市の放送ライブラリーに保存されていない。それぞれの局に保存されているかどうかはわからず、たとえ保存されていたとしても、局外の間には絶対に見ることができない。公共の電波を託された放送局の番組はいったい誰のものなのか、という根源的な疑問は残る。`門外不出。は、2007年に捏造問題が発覚した関西テレビの『発掘！あるある大事典Ⅱ』や日本テレビの『真相報道バンキシャ！』誤報問題（2009年）などのように、トップが引責辞任するという事態を引き起こした近年の番組にも当てはまる。

当該局にとって、放送中止事件や放送倫理違反などの不祥事を招いた番組は`負の遺産、にはかならない。「二度と表に出したくない」という気持ちや、関係者のプライバシーを保護するといった事情はわからなくもない。しかし、その番組がいつまでも局内で厳重に封印されたままでは、後世の人たちはどうやって検証すればいいのだろうか。

ビデオテープの使い回しという物理的な理由による「空白」ではなく、政治的・社会的な理由から生じた「闇」に光を当てるためには少なくとも、問題になった番組の脚本や構成台本の収集・保存が欠かせない。そうした苦い歴史から学ばなければ、同じ過ちはこれから何度も繰り返されるのではないか。逆に言えば、過去から謙虚に学ぶ者だけが先輩たちの失敗や汚点を乗り越え、新たな未来を切り開くことができると確信している。

日本脚本アーカイブズ特別委員会 7年の歩み

平成23年度(2011年4月～2012年3月)			
日時	活動内容	アーカイブズ関連取材施設	脚本・台本収集数
平成24(2012)年 3月	■平成23年度 日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書【Ⅶ】 新しいステージへ ～7年間の総まとめ～	■世田谷文学館 ■向田邦子文庫(実践女子大) ■市川市文学プラザ	年度収集数 約5,000冊 (延べ約5万点 ※脚本・台本・関連資料含む)
【寄贈内容】			
平成24(2012)年 2月15日	■脚本アーカイブズ・シンポジウム 『失われた脚本・台本を求めて ——文化リサイクルの意義』 : 国立国会図書館新館講堂(国立国会図書館共催) ホワイエにて貴重脚本展示	■女優・藤村志保氏より576冊 ■俳優・久保明氏より79冊 ■俳優・故鎌倉俊明氏より308冊の脚本と資料など ■元テレビディレクター・山口志郎氏より52冊 ■プロデューサー・菅野高至氏より7箱 ■ディレクター&プロデューサー・嶋田親一氏より9冊 ■脚本家・故水沢草田夫氏ご親戚より6冊 ■脚本家・故須藤出穂氏ご遺族より341冊 ■放送作家・深沢一夫氏より194冊 ■放送作家・故・塚田茂氏ご遺族より432冊 ■脚本家・鈴木良武氏より脚本1箱と絵コンテなど ■放送作家・故神吉拓郎氏ご遺族より脚本1袋 ■舞台衣装デザイナー・五十嵐和代氏より台本を54冊 ■そのほか、多くの関係者の皆様よりご寄贈いただきました。	
平成23(2011)年 7月	任意団体「脚本アーカイブズ推進コンソーシアム」発足・参加		
平成23(2011)年 5月18日	文化庁・国立国会図書館『我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承に関する協定』発表		
平成23(2011)年 4月	■文化庁「芸術団体人材育成支援事業」		
その他活動	■オーラルヒストリー取材 放送作家 作詞家 タレント・永六輔氏		

【解説】

日本脚本アーカイブズとしての最後の活動年度、画期的な出来事があった。平成23年5月、文化庁と国立国会図書館との間で「協定」が結ばれたことである。これによって「脚本アーカイブズ推進コンソーシアム」(任意団体)が生まれた。コンソーシアムには関係諸団体から代表が参加し、脚本アーカイブズの構築にむけて新たに調査・研究をスタートさせた。

また、平成24年2月15日、国立国会図書館でシンポジウム『失われた脚本・台本を求めて——文化リサイクルの意義』第1部座談会「夢——脚本アーカイブズの、」第2部パネルディスカッション「デジタルアーカイブの潮流の中の脚本・台本」が実施され、大変好評であった。

本年度までに収集された脚本・台本・資料は約5万点。そのうち半分強は、すでに映像がなくなっている可能性の強い1980年以前に放送された番組の脚本・台本・関連資料である。戦後日本に多大な影響を与えたテレビメディア。その創成期に、どのような内容の番組が放送されたのか、わずかにこれらの脚本・台本によって知るしかない。日本文化研究にとっては「第一級資料」である。

(香取俊介)



シンポジウムは立見が出るほどの盛況



市川森一氏の生活を語る美保子夫人



全国の図書館に脚本の有無を尋ねたアンケートを集計する

平成22年度(2010年4月～2011年3月)

日時	活動内容	アーカイブズ関連取材施設	脚本・台本収集数
平成23(2011)年 3月	■平成22年度 日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書【VI】 ～文化はめぐる～	■小田原文学館 ■早稲田演劇博物館 ■アドミュージアム	年度収集数 約7,500冊 (延べ約42,500冊 ※未入力 含む) 【寄贈内容】 ■故横田弘行氏ご遺族より 昭和34年以降の脚本1685 冊 ■故津田幸於氏夫人より 1460冊 ■脚本家岸宏子氏より431 冊 ■そのほか、多くの関係者 の皆様よりご寄贈いただき ました。
平成23(2011)年 1月	■日本大学芸術学部脚本展(21～25日) :日大江古田キャンパス(練馬区)	■川崎市市民ミュージアム ■座・高円寺 ■大谷博物館	
平成22(2010)年 11月	■北海道脚本展(13～21日):北海道立文学館(札幌市)	■横浜放送ライブラリー ■印刷博物館	
平成22(2010)年 11月	■「アーカイブズ・カレッジ」(国文学研究資料館主催)参加	■アド・ミュージアム東京・広告 図書館	
平成22(2010)年 11月	■文化アーカイブズ活性化シンポジウム「文化はめぐる—脚本アーカイブズとデジタル化」(2日) :東京芸術センター天空劇場(足立区)	■かごしま近代文学館	
平成22(2010)年 11月	■城西国際大学メディア学部インターンシップ受入れ開始		
平成22(2010)年 4月	■江戸東京博物館脚本展「ザ・脚本—放送作家たちの80年」(6～18日):江戸東京博物館(墨田区)		
平成22(2010)年 4月	■「放送脚本デジタル研究会」(任意団体:東京大学大学院情報学環に本部)参加		
平成22(2010)年 4月	■日本脚本アーカイブズ倶楽部主催 「放送映画文化講座【てら】」へ講師派遣開始		
平成22(2010)年 4月	■文化庁「芸術団体人材育成支援事業」		
その他活動	■オーラルヒストリー取材 プロデューサー・嶋田親一氏、放送作家 タレント・前田武彦氏、脚本家・小山内美江子氏 ■勉強会(2回)・ 烏兎沼佳代氏(フリー編集者・向田邦子研究の第一人者)『向田脚本を全集にまとめて』 寺脇 研氏(京都造形芸術大学教授・映画評論家)『これからのアーカイブズのあるべき姿』		

【解説】

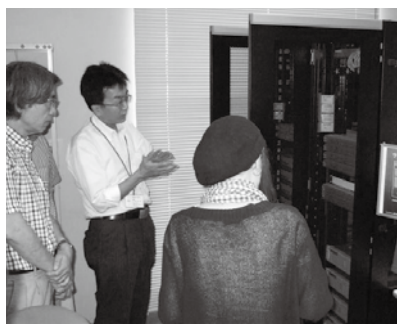
本年度の目玉事業として江戸東京博物館で脚本展「ザ・脚本—放送作家たちの80年」を実施したほか、札幌市の北海道立文学館で「日本脚本アーカイブズ脚本展 北海道展」を実施した。いずれもテレビ・新聞などマスメディアに取りあげられ盛況であった。また11月には東京都足立区内の天空劇場で、国立国会図書館の長尾真館長らをパネリストとしてお招きし、「文化アーカイブズ活性化シンポジウム」を実施した。

今年度収集した脚本・台本は約7500冊。劣化した脚本・台本の修復作業なども実施した。また小田原文学館等国内の関連施設を取材するとともに、恒例のオーラルヒストリーとして、テレビ創成期の構成作家でタレントの前田武彦氏、脚本家の小山内美江子氏、テレビ創成期の演出家・嶋田親一氏らに貴重なお話を聞いた。研究会の講師として向田邦子氏の本の編集を多く手がけている烏兎沼佳代氏、京都造形芸術大教授の寺脇研氏らをお招きした。

(香取俊介)



文化アーカイブズ活性化シンポジウム



横浜放送ライブラリーの
新システムを見る



国立国会図書館を見学
地下書庫を巡る

平成21年度(2009年4月～2010年3月)			
日時	活動内容	アーカイブズ関連取材施設	脚本・台本収集数
平成22(2010)年 3月	■平成21年度 日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書【V】 ～人類の記憶の鏡として～	■中国:中国テレビ芸術家協会・中国中央電視台資料館(CCTV)・中国映画博物館・中国映画資料館・北京電影学院	年度収集数 約4,500冊 (延べ約35,000冊 ※未入力含む) 【寄贈内容】 元映画監督、元プロデューサー、評論家のご遺族など多くの関係者よりご寄贈いただきました。
平成22(2010)年 1月	■中国取材調査	■韓国映像資料院	
平成21(2009)年 12月	■足立区脚本展(21～27日):学びピア21	■世田谷文学館	
平成21(2009)年 9月	■韓国映像資料院取材調査	■アドミュージアム東京	
平成21(2009)年 9月	■社団法人 日本放送作家協会 創立50周年記念イベント・脚本展(18～23日) :芸能花伝舎(西新宿)	■シナリオセンター	
平成21(2009)年 4月	■日本脚本アーカイブズ倶楽部主催 「放送映画文化講座【てら】」へ講師派遣開始	■大阪府立上方演芸資料館 (ワッハ上方)	
平成21(2009)年 4月	■文化庁「芸術団体人材育成支援事業」	■NHK大阪放送局資料保存室	
その他活動	■オーラルヒストリー取材 俳優・長門勇氏、声優・永井一郎氏、脚本家・布勢博一氏、音響効果・玉井和雄氏 ■一般来場者へのアンケート(放送作家協会創立50周年記念イベント・脚本展&足立区脚本展) ■勉強会(3回) 福井健策氏(弁護士・日本大学芸術学部客員教授)『脚本アーカイブズと著作権』 吉見俊哉氏(東京大学大学院情報学環教授)『デジタルアーカイブの展望』		

【解説】

社団法人日本放送作家協会創立50周年にあたるため、記念イベントの一環として新宿の芸能花伝舎で脚本展を実施するとともに、足立区の学びピア21でも脚本展を実施した。海外取材として中国北京に赴き、中国テレビ芸術家協会をはじめ中国中央電視台資料館や中国映画博物館等を訪問し、脚本・台本アーカイブの現状を取材した。

国内では世田谷文学館を取材する一方、オーラルヒストリーとして、俳優の長門勇氏、効果音の玉井和雄氏、声優の永井一郎氏、脚本家の布勢博一氏らから貴重な体験を聞いた。また、著作権問題について弁護士の福井健策氏、デジタルアーカイブの展望について東大の吉見俊哉教授を講師としてお招きし、研究会を実施した。本年度収集した脚本・台本は4500冊あまり。

(香取俊介)



取材調査で訪れた中国映画博物館



中国テレビ芸術家協会



足立区脚本展では「相棒」トークショーも脚本家・奥水泰弘氏と松本基弘プロデューサー

平成20年度(2008年4月～2009年3月)			
平成21(2009)年 3月	■平成20年度 「日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書【Ⅳ】 ～ソフトパワーの拠点化を～」	■韓国:国家記録院ナラ記録館(NARA)・放送デジタル図書館 ■フランス:SACD図書館(ドラマ作家・作曲家協会)、フランス国立図書館、シネマテーク・フランスーズフィルムライブラリー、INA国立視聴覚研究所 ■イギリス:大英図書館、英国公文書館、BBC・英国放送協会、英国映画協会 ■京都国際マンガミュージアム ■NHKアーカイブス(川口) ■協同組合日本俳優連合 ■社団法人日本映画俳優協会 ■東映株式会社 ■東宝株式会社 ■アニメ制作会社「虫プロダクション」	年度収集数 約4,200冊 (延べ約26,200冊) 【寄贈内容】 ■MBS(毎日放送)より361冊 ■声優坂本和子氏より昭和11年の構成台本など多数 ■放送作家小川乃倫子氏より昭和30～50年代放送台本260冊余 ■故岩間芳樹氏ご遺族より生原稿や電報、葉書など資料多数 ■女優三田佳子氏より出演脚本・台本 約1,000冊 ■そのほか、多くの関係の皆様よりご寄贈いただきました。
平成21(2009)年 2月	■女優 三田佳子氏 所蔵脚本寄贈式・記者会見(10日)		
平成21(2009)年 1月	■ドミニク・シェラード教授講演会 (英国シェフィールド大学副学長) 「イギリスのアーカイブとシェイクスピア」		
平成20(2008)年 11月	■韓国国家記録院ナラ記録館(NARA)・放送デジタル図書館訪問調査		
平成20(2008)年 11月	■フランス・イギリス取材調査		
平成20(2008)年 9月	■東京大学大学院情報学環「東京大学高度アーカイブ化事業5カ年計画」の一環として共同研究スタート。		
平成20(2008)年 4月	■日本脚本アーカイブズ支援組織「日本脚本アーカイブズ倶楽部」発足・放送映画文化講座【てら】へ講師派遣開始		
平成20(2008)年 4月	■文化庁「芸術団体人材育成支援事業」		
その他活動	■オーラルヒストリー取材 声 優・坂本和子氏、脚本家・鈴木良武氏 ■一般人へのアンケート(放送ライブラリー『テレビの青春! 昭和30年代番組展』にて実施) ■勉強会(4回) 秋田 孝宏氏(日本マンガ学会)『京都国際漫画ミュージアムについて』 中島康比古氏(独立行政法人国立公文書館業務課利用係長)『アーカイビングの現場』 境 真良氏(早稲田大学大学院GITS客員准教授・慶應義塾大学KMD非常勤講師)『テレビ進化論・概論』 鈴木 嘉一氏(読売新聞編集委員・埼玉大学非常勤講師)『デジタル時代とテレビの構成変化』		

【解説】

今年度収集した脚本・台本は、女優三田佳子さんからの1000冊の寄贈をふくめて4000冊強。前年度にひきつづき海外での脚本アーカイブズの現状調査を実施した。イギリスの大英図書館をはじめ英国公文書館、BBC等、さらにフランスに足をのばしフランス国立図書館、シネマテークフィルムライブラリー、INA(国立視聴覚研究所)などを訪れた。とりわけフランスのINAの充実ぶりに瞠目した。INAではフランスのラジオ・テレビ局で放送されたすべての番組を収集し、デジタル化して保存し、膨大なアーカイブを構築している。

国内ではアニメ制作会社「虫プロ」「サンライズ」「エイケン」や、映画会社の東宝、東映を訪れ脚本・台本の保存状況を調査した。また、日本映画俳優協会および俳優連合では、出演者の保持している脚本・台本について話を聞いた。さらに、声優の坂本和子氏、アニメ脚本家の鈴木良武氏について「オーラルヒストリー」を聴取するとともに、研究会を複数回実施した。

(香取俊介)



仏INAを視察し、大いに啓発される



BBC文書アーカイブ
中性紙の箱に保存された文書を見る



女優・三田佳子氏の脚本寄贈には
テレビ取材も多数詰めかけた

平成19年度(2007年4月～2008年3月)			
日時	活動内容	アーカイブズ関連取材施設	脚本・台本収集数
平成20(2008)年 3月	■平成19年度 日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書【Ⅲ】 ～脚本・台本は記憶と記録の宝庫～	■放送台本デジタル図書館(韓国放送作家協会)開館式報告 ■アメリカ実地調査	年度集数 約7,000冊 (延べ約22,000冊)
平成19(2007)年 11月	■アメリカ取材・調査	ロサンゼルス: UCLA図書館、 マーガレット・ヘリック図書館、 ラジオ・アーカイブズ、ライターズ・ギルド図書館、AFI図書館など。	【寄贈内容】 テレビ草創期に活躍した作家の方々の作品群が多く収集された。
平成19(2007)年 10月 ～12月	■脚本展 10月12日～14日: 足立区シアター1010 10月22日～18日: 足立区生涯学習センター 11月23日～12月9日: 横浜放送ライブラリー	ニューヨーク: ライターズ・ギルド・イースト、ニューヨーク市立図書館など。	
平成19(2007)年 8月	■東京大学大学院情報学環とのコラボレーションスタート	■TBSラジオ ■文化放送 ■エフエム東京 ■ラジオ日本 ■ニッポン放送 ■大宅壮一文庫 ■池田文庫	
平成19(2007)年	■日本シナリオ作家協会正式参加決定		
平成19(2007)年 4月	■文化庁「芸術団体人材育成支援事業」		
その他活動	■制作者・制作会社へのアンケート ■勉強会(2回): 講師 加藤厚子氏(映画専門大学院大学准教授) 濱中香織氏(株・パブリッシングリンク事業推進部・モバイル担当ディレクター) ■『笑いのハイスクール』第3回開催(シアター1010)		

【解説】

この年、脚本アーカイブズの先進国であるアメリカを実地調査。西海岸ではロサンゼルスUCLA図書館、マーガレット・ヘリック図書館など、東海岸ではライターズ・ギルド・イースト、ニューヨーク市立図書館などを訪ねて、脚本・台本の実態を調査。国内でもTBSラジオや文化放送などのラジオ局における脚本・台本の保管状況を調査した。

17年度から進めてきたアンケート調査では、制作者・制作会社へのアンケートを実施した。

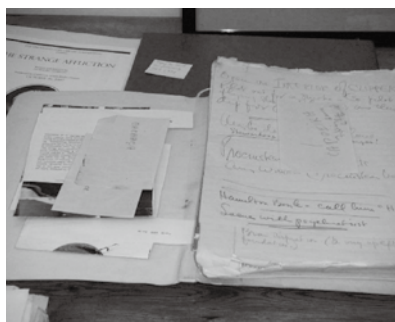
そして、この年、特筆すべき動きは東京大学情報学環とのコラボレーションがスタートし、ついで日本シナリオ作家協会が日本脚本アーカイブズ活動への正式参加を決定した。さらには脚本アーカイブズの目的と意義をより周知徹底させるために、足立区内で脚本展とPRを兼ねた「笑いのハイスクール」を開催し、横浜放送ライブラリー主催の脚本展に全面協力をした。

これらの努力によって、メディアも注目しはじめ、新聞等で特集記事が掲載されるようになった。19年度における脚本・台本の収集・保存はテレビ草創期に活躍した作家の作品が数多く収集され、この年、収集保存数は延べで22,000冊に達している。

(南川泰三)



ロサンゼルス UCLA 取材
初の海外視察で先進のアーカイブを学ぶ



ラジオドラマ「この虫十萬弗」の作家、
ノーマン・コーウィンの直筆メモ



ロスのマーガレット・ヘリック図書館で黒澤明監督
の絵コンテ「トラ・トラ・トラ」に驚く

平成18年度(2006年4月～2007年3月)		
平成19(2007)年 3月	<ul style="list-style-type: none"> ■平成18年度 ■日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書【Ⅱ】 ～脚本・台本は記憶と記録の宝庫～ 	<ul style="list-style-type: none"> ■KBI (韓国映像産業振興院) ■テレビ朝日 ■フジテレビ ■TBS ■テレビ東京 ■札幌テレビ放送・STVラジオ ■北海道文化放送 ■毎日放送 ■花登篋記念文庫 ■株式会社 三交社 ■NHK放送博物館(二次取材) ■国立公文書館 ■国際マンガミュージアム
平成18(2006)年 4月	<ul style="list-style-type: none"> ■文化庁「芸術団体人材育成支援事業」 	年度収集数 約14,000冊 (延べ約15,000冊) 【寄贈内容】 ラジオ台本『陽気な喫茶店』 (S24)、『不知火の小太郎』 (S46)、『トリローサンドイツ』 (S31)、『特番』など。
その他活動	<ul style="list-style-type: none"> ■作家&作家遺族訪問(脚本・台本の行方) 遠藤淳氏・故石浜恒夫氏・故小川英氏 ■放送作家ご遺族へのアンケート ■ラ・テ欄(ラジオ・テレビ欄)の検証 ■勉強会(3回): 講師 音好宏氏(上智大学文学部助教授) 松岡資明氏(日本経済新聞社編集局文化部) 佐藤恵太氏(中央大学法科大学院教授) ■『笑いのハイスクール』第2回開催(シアター1010) 	

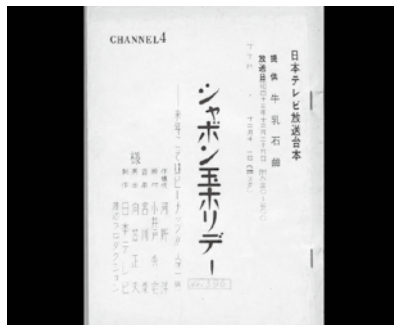
【解説】

この年、日本脚本アーカイブズ特別委員会は前年度に続き、脚本・台本のサンプル収集と保存方法を研究しながら、寄贈された脚本・台本の一冊一冊の書誌情報を記録。同時にNHKおよび民間放送連盟の理解と協力を得るとともに、テレビ朝日、フジテレビ、TBS、日本テレビ、テレビ東京の脚本・台本に関する実態調査。さらには札幌テレビ放送、STVラジオ、北海道文化放送、毎日放送などの地方局の実態も調査。その一方で国立公文書館、国際マンガミュージアムなどを取材し、文書保存の方法や設立までの過程を学んだ。

また前年度に引き続いて作家、作家のご遺族を訪問、脚本・台本の保存状況を調査。こうした動きの中から遠藤淳氏や故石浜恒夫氏のご遺族から寄贈を受け、小川英氏ご遺族からは「太陽にほえろ！」など小川氏の全作品の寄贈と寄付金を受領した。

さらに昨年度の協会員アンケートの続編として放送作家ご遺族へのアンケートも実施した。そして、この年度末「日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書Ⅱ～脚本・台本は記憶と記録の宝庫～」を発刊した。

(南川泰三)



平成17年度(2005年4月～2006年3月)			
平成18(2006)年 3月	■平成17年度 日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書【1】 ～脚本・台本の現状と管理・保管の実態～	■NHK放送博物館 ■立命館ARC(アトリサーチ センター) ■大阪府立上方演芸資料館 ■伝統芸能情報館 ■日本テレビ放送網(株) ■松竹大谷図書館 ■早稲田大学演劇博物館 ■諫早図書館	年度収集数 約1,000冊
	■文化庁「芸術団体人材育成支援事業」		
平成17(2005)年 10月	■足立区の支援で北千住「学びピア21」に 日本脚本アーカイブズ準備室オープン		
その他活動	■作家&作家遺族訪問(脚本・台本の行方) 神津友好氏、故岡本克己氏、故横光晃氏、故窪田篤人氏 ■古本屋・ネットオークション調査 ■ラ・テ欄(ラジオ・テレビ欄)の検証 ■日本放送作家協会会員へのアンケート調査 ■勉強会:講師 小川千代子氏(アーキビスト) ■『笑いのハイスクール』第1回開催(シアター1010)		
平成15年(2003年)			
平成15(2003)年 3月	■国会・総務委員会にて市川森一日本放送作家協会理事長証言。 「脚本・台本は貴重な放送文化遺産である。テレビ放送50年を迎えた今、この膨大な数にのぼる脚本や台本が散逸し、日々、失われつつある。これを管理、保存し、資料として体系化することが急がれる」旨の発言。 ■超党派の賛意を得たことから、日本放送作家協会内に「日本脚本アーカイブズ特別委員会」を発足させる。		

【解説】

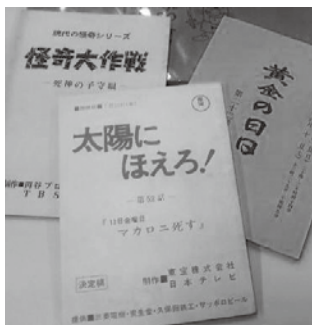
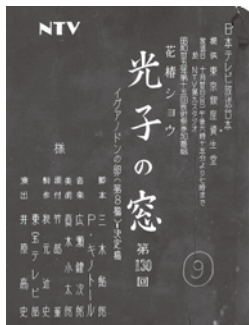
平成15年3月25日、国会総務委員会に当時、日本放送作家協会理事長だった脚本家・市川森一が評論家・田原総一郎氏、上智大学助教授・音好宏氏とともにテレビ放送50年に際し「テレビ文化とは何か」というテーマで証言。当時、日本放送作家協会の常務理事だった南川も市川に同行した。その席で市川は貴重な文化遺産と言える脚本・台本が喪失、散逸している現状を訴え、ナショナルな規模での脚本・台本の収集・保存およびシステム化の必要を提言した。

この提言に対し総務委員会に出席していた自民党・民主党をはじめ超党派の賛同を得た。その後、自民党の議員から日本脚本アーカイブズ(当初は日本脚本ライブラリー)設立のための議員連盟を作りたいという申し出があり、趣意書を作成し、国立国会図書館、日本フィルムセンター、文化庁、それぞれの担当者に趣旨説明を行った。同時に日本放送作家協会理事会で理事全員の賛成を経て、同理事会内に日本脚本アーカイブズ特別委員会が作られ、南川が初代委員長に選出された。

こうして日本脚本アーカイブズ設立への活動が開始されたが、その年の選挙において中心となって動いていた自民党議員が落選、設立の動きは一時頓挫した。平成17年、市川が足立区のシアター1010の館長をしていた繋がりから、足立区がナショナルな施設であることを条件に、建設用地や準備室、脚本・台本の保管場所などの協力をを申し出、同年10月、足立区北千住の学びピア21内で準備室をスタートさせた。そして、同年、文化庁「芸術団体人材育成支援事業」から支援補助金の交付を受け、調査研究の一環として脚本・台本の収集が始まった。

準備室ではその他、新聞のラ・テ欄からこれまでに放送された番組を検出。ラジオ・テレビ放送が始まって以来の脚本・台本の総数を割り出す作業や、日本放送作家協会会員へのアンケート、古本屋、ネットオークションなどの実態調査を行った。そして、この年「日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書」第一号が誕生した。ちなみに17年度の脚本・台本サンプル収集は約1000冊。

(南川泰三)



脚本アーカイブズ・シンポジウム

『失われた脚本・台本を求めて ——文化リサイクルの意義』

抄 録

第1部	座 談 会	50
第2部	パネルディスカッション	55

脚本アーカイブズ推進コンソーシアム

報 告

■概要報告	65
■全出席者名簿	69
■脚本データベース・プロトタイプ	70

脚本アーカイブズ・シンポジウム

「失われた脚本・台本を求めて」

—文化リサイクルの意義—

平成 23 年 5 月、文化庁と国立国会図書館との間で「我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承に関する協定」が結ばれ、この中で、当面連携・協力を推進する分野の一つとして、放送脚本・台本の所在状況や保存方法等に関する調査研究等についての検討が挙げられています。散逸の危機にある脚本・台本に対して、貴重な文化資産をめぐり保存の機運が高まる中で、日本放送作家協会と国立国会図書館は共催でシンポジウムを開催しました。

日 時 平成 24 年 2 月 15 日 (水)
場 所 国立国会図書館 東京本館 新館講堂
総司会 奥山侑伸・さらだたまこ

【開会挨拶】 長尾 真 (国立国会図書館長)

第 1 部 座談会 『夢——脚本アーカイブズの、』

司 会 堀川 とんこう (演出家)
参加者 藤村 志保 (女優)
山田 太一 (脚本家)
中園 ミホ (脚本家)
奥山 侑伸 (放送作家)

【挨拶】 近藤 誠一 (文化庁長官)

第 2 部 パネルディスカッション 『デジタルアーカイブの潮流の中の脚本・台本』

司 会 吉見 俊哉 (東京大学副学長)
パネリスト 長尾 真 (国立国会図書館長)
木田 幸紀 (日本放送協会理事)
岡島 尚志 (東京国立近代美術館フィルムセンター主幹)

【閉会挨拶】 秋元 康 (日本放送作家協会理事長)

開 会 挨拶

長 尾 真 (国立国会図書館長)

脚本アーカイブズ・シンポジウムにお出でいただきまして、どうもありがとうございます。今回のシンポジウムは、脚本家の故・市川森一さんが強力に進めて来られました脚本アーカイブズ活動の内容をより一層明確にして、強力に推進するために開かれたものでございます。

第1部は市川さんの回想座談会。第2部はシンポジウムです。今回登壇いただきますのは豪華メンバーでございます。

国立国会図書館におきましては、図書資料のデジタル化を強力に推進してまいりました。現在、明治から1968年までのほとんどの出版物をデジタル化いたしました。雑誌につきましても、1万2000タイトルの雑誌の創刊号から2000年までのものについてはデジタル化して、記事単位で検索して利用できるというところまでできてきたわけでございます。トータルで粗く見まして210万冊くらいの資料がデジタル化されています。

図書・雑誌だけでなく、音声・音楽といった音に関する資料についても最近強力にデジタル化を進めており、戦前のSP盤につきましては2万7000枚をデジタルでどなたも聞いていただけるようになってきました。あと1、2年でトータルで5万枚のSP盤のデジタル化が進み、それらを聞いていただける予定です。有名人の演説、邦楽、洋楽、落語、漫才など各種の音の資料を楽しんでいただけます。

また、これから映像資料のデジタル化を進め、提供していきたいと思っております。その手始めとして、昨年3月11日の東日本大震災のあらゆる記録を集めてアーカイブして後世に残すということをやりはじめております。これは国会図書館だけでできるものではないので、政府の各省庁と協力して進めつつあります。例えば、津波に関するいろいろな映像が膨大に撮られている。これはNHKもずいぶん集めておられて、公開するやに聞いております。そういうものを誰もが利用できるような環境を作りたい。これがアーカイブの1つの事業となって進んでいくのではないかと考えています。

今日のテーマになっている脚本につきましては、国立国会図書館も今まで集めておりませんでした。しかし、市川さんに刺激されたこともございますし、いろいろなことから脚本・台本についてもちゃんとしたことをやっていかなければならないと考えておりました。昨年の5月には文化庁と国会図書館が協定を結びました。脚本・台本を国としてきちっと

集めてアーカイブしていくこと、楽譜などの音楽資料もきちっと集めて、公共に提供していくこと、そしてマンガ、アニメ、あるいはゲームソフトも日本の貴重な文化遺産でございますので、これを集めて整理し、提供していくこと、こういうことについて文化庁と協力してやっていこうという方向性を打ち出し、現在進行中でございます。この脚本アーカイブズもその一環として頑張っていきたい。

このシンポジウムのタイトルにもありますように、アーカイブズ、これは何のためにするかを、われわれとしてもよく考えながらやっていく必要がある。それは、アーカイブされたものを誰でもが見られるだけではなく、それをヒントにして、またそれから刺激を受けて、日本文化をよく認識しつつ、新しい仕事に結びつけていって、日本全体の方々に創造的な仕事をやっていただく環境作りをするという意味において、文化的なりサイクルが一番大事だと思っています。そういったことについての、いっそうの発展のために貢献できれば大変ありがたいと思います。どうかよろしくお願い申し上げます。

■第1部

「夢——脚本アーカイブズの、」(抄録)



登壇者

藤村 志保 (女優)

山田 太一 (脚本家)

中園 ミホ (脚本家)

奥山 侑伸 (放送作家)

堀川 とんこう (演出家・司会)

ゲスト：市川美保子 (故・市川森一氏夫人)

脚本とは？

堀川とんこう それでは藤村さんから「今の自分にとって脚本とは一体何か」というところからお話をお願いします。

藤村志保 脚本をいただいて、その1ページをめくるときのときめきと申しますか、知らない世界を覗くその興奮は、正直申しまして、読みたい小説の1ページ目をめくるよりも、興奮いたします。そのくらい何かわくわくしてくるような、ときめきを感じます。女優としては、脚本をいただいて、それをどう私たちなりに膨らましていくかというところが仕事ですから、やはりとても楽しいです。

堀川 実は藤村さんは今回アーカイブズに大量の脚本を寄贈なさってらっしゃいますね。

藤村 大体400冊くらいだったようですが、まだ

手元に残しているものもあります。このアーカイブズのことを知りましたのは、3年前くらいだったでしょうか。日本映画俳優協会の会報で、市川さんが「台本をどうぞ寄贈してください」とみなさんに呼びかける記事が出ました。三田佳子さんが私の倍の台本を寄贈なさったという記事が出ましてね。たしかに手元に置いといても年を重ねますとね、身の整理をしなければいけなくなってまいります(笑)。

堀川 実は、藤村さんが寄贈なさった脚本が3冊、ここに預かっておりますが、驚くことにそれぞれが大変きれいに装幀されている。

藤村 表紙が破れたり傷ついたりするのが嫌でね、それで千代紙とか手持ちの包装紙とか、このドラマにはこの千代紙で表装しようかなと、少女趣味みたいなんですけど(笑)。

堀川 こんなきれいに表装していただけるなんて、脚本冥利に尽きるというか、脚本家もうれしいですよけど、台本もうれしいですね。

山田さん、脚本とは何であって、今後こうありたいというお話を含めて伺います。

山田太一 ライターになってそれほど経っていないころに、パディ・チャエフスキーというアメリカの初期のテレビライターが書いたテレビドラマ(編集部注：『独身送別会-テレビドラマ集-』社会思想研究会出版部、昭和32年刊行)を江上照彦さんという作家が翻訳された。それを読んで、チャエフスキーに会いたいと思ったけど、アメリカははるか遠く、代わりに江上さんに連絡して会っていただくことになりました。

江上さんも初期のテレビドラマを書いていたのですが、私と会ったころは脚本家をおやめになって、大学の先生になっていらっしゃった。「なぜ先生は脚本家をやめたのですか？」と聞いたら、お酒を飲んでいたせいもありますけど、「きみ、

空しさだよ、空しさ」と、ぼくの背中を何度も叩くのです（会場笑）。とにかく、「何ヶ月もかけて書いたものが1日でなくなっちゃうんだ。この空しさに耐えて、ずっとやっていくことはできないよ、きみ」と言われてね。それがオレの未来かとこたえました。

初期はワラ半紙のガリ版二つ折りの印刷台本。1回分が厚いんですよ。それで1年間だと、普通の家だと保管できません。しばらくは、捨てちゃうのはあんまりだと思って保管してましたけど、結局捨ててしまいました。自宅の狭さを考えると取ってられないんですね。ですから、アーカイブズで取ってしてくれるのはとてもありがたい。

堀川 山田さんの脚本は出版されていますから、私たちとしては読むことが可能ですけど。中園さんは自分が脚本を書きはじめから、もちろん全部保存されていますよね？

中園ミホ うちの狭いこともあって、脚本で本棚が埋まっていて、マンションのゴミ集積場に捨てたことがありました。そうしたら、その夜眠れなくて。いつも時間に追われてひどい本を書いているからそれを誰かに読まれるんじゃないかと、自意識過剰ですが、夜中の3時頃に取りに行ったことがあります（会場笑）。そこから戻して、それ以来捨てていません。

以前、山田太一先生がどこかで、脚本をお書きになるときはとても恐ろしい、震えるとおっしゃっていて、「山田太一でも震えるのか」と思って、私とてもうれしかったんです。私なんか毎回、半べそかきながら書き出すんですよ。さっき藤村さんが、1ページ目を開く時与时めくとおっしゃってくださいましたけど、ときめかせられるかどうかという恐怖でホントに物が食べられなくなったり、震えたりしながら。しかも、書き出さただけじゃなくて、のたうちまわって書いている。

堀川 脚本家の方がそれほど苦しんで書かれた脚本なのに、放送が終わると放送局でどういう扱いを受けてきたかということについては、私たちも自慢できないなあと。もちろん私たちくらいの世代になりますと、放送が終わると一応は製本にし

ます。連続物ですと5部、5回分を1冊にまとめます。製本して、担当プロデューサーが自分のロッカーに、もう1部を会社側に保存する。会社が保存する場合、そういうスペースがあるわけではなくて、廊下や壁際のガラスドアに納められる。やがてどんどんあふれちゃう。中に入っていたものがロッカーの上に置かれ、ついには床に置かれる。ホントにひどい状態で。今はどうかわかりませんが、10年くらい前のテレビ局というのは、どこも似たようなものでした。そういう意味でアーカイブズが脚本を保存するというのは、私どもにとってもほっとするものがございます。

奥山さんにお話を伺います。奥山さんは主に構成の仕事をなさってきて、昔の構成台本というのは保存されているんですか？

奥山侑伸 個人で持っているというのが圧倒的に多いですね。組織の場合は、そのプロデューサーの采配で保存をしたり。そのプロデューサーがやっている番組が当たった場合は予算を捻り出し易い。具体的に言うと「全員集合」のプロデューサーはビシッと製本しておりました。他にも番組を持ってまして、「お笑い頭の体操」も当たっていたから、お金が潤沢なんですね。そうじゃない人はやってなかったような気がします（笑）。

笑いのバラエティーの場合は、台本の字を読んでも、活字になったものを読んでもピンと来なかったりするんですね。「谷啓さん、ムヒョーと言って、走り抜ける」と字で読んでもおかしくないですけど、画面を見るととてつもなくおかしいんですね。そういうちょっとフシギな台本なんですね。でも、引っ越すたびに、なくなっていきました。

脚本アーカイブズの役割

堀川 脚本アーカイブズにドラマの脚本が保存されることの意義については、今まで日本放送作家協会が催したいろいろなイベントでそれなりの議論が深まっているところもありますが、私が今回感じたのは「アーカイブズの役割」です。

1つには後進の育成、人材の育成において役に

立つ。それは、脚本を書きたいと思う人たちが、脚本を自由に閲覧することができるという意味ですが。そういう教材になるということでしょうか。

もう1つは、放送についての批評の質が向上するということです。今まで、放送に対する批評というのは、最近ではビデオで繰り返し見ることもありますが、普通は放送を見て、それについての批評を書こうとするんですけど、細かなデテールまではなかなか記憶しきれなかったりして、あいまいになります。脚本に立ち返るとそれがハッキリし、そういう批評の質が向上することによって、放送に役に立つのではないかと。

そのほかにアーカイブズは、私たちにとってどういう役に立つのかということについて、みなさんに語っていただきたい。

藤村 初期のテレビドラマが「電気紙芝居」と言われた時代がありましたね。今は、私たちの生活の中になくはならない大事なひとつの文化として成立している。やはりテレビの歴史というものを次の世代に残していく必要があると、私は思います。1960年代の映像が残っていない。番組の脚本・台本がとても大切だとわかりました。実は1960年代の台本で手元に残しているものがあります。「太閤記」とか「三姉妹」といった大河ドラマは映像もありません。

亡くなられた映画監督の市川崑先生が毎日放送で、そのころ画期的なテレビドラマとして「源氏物語」をお作りになりました。伊丹十三さんが光源氏で、白黒で、セットは日本間の障子のマス目だけ。どのシーンもセットはそこだけ。リアルなセットは一切ないんですね。その「源氏物語」は国際エミー賞をいただいたんですけど、映像としては残っていない時代のものです。

きのう、残しておいた台本を見ておりましたら、その「源氏物語」の脚本が出てきました。これは貴重なものだなあと思いました。ましてきょうのお話を伺って、アーカイブズに寄贈しておくべきだなと思っております。

山田 先輩の作家のものって、実はあんまり見てもいないんですね。脚本家の高橋玄洋さんがライ

ターをおやめになってから、ご自分の脚本を製本なさって。それを写真に撮ったのを送っていただいたのですが、それは住んでいらっしゃる所沢市に寄贈されたそうですが。

先輩の作品はもちろん映像が見られればそれが一番。俳優さんの演技もなつかしいですし。脚本を読むというのは、手軽ではありますね。“ああ、こういうのか。じゃあ映像を探そう”と、映像がある場合にはなります。そういう目次みたいな本としての機能するところがありますね。ある特定の作家のものを知る場合など。

堀川 実は私、今回のシンポジウムに備えて、市川さんの脚本集を2冊読んだのですが、だいぶ前に出版された「メランコリックドラマ集」、もうひとつが「ノスタルジックドラマ集」です。そんなに面白くはないだろうと読み始めたのですが、思いのほか面白い。それぞれ10本くらいずつ入っているのですが、全部読んじゃいました。そのとき思ったのですが、ドラマにしたらこんなに面白くはないだろうなあということでした。というのは、私たちが脚本を読むときは、理想的な俳優の演技、理想的な舞台装置をイメージしながら読むわけですよ。現実には舞台装置も想っていたより貧弱になったり、俳優さんの演技もいつも100点とは限らないわけですよ。ごめんなさい藤村さん（会場笑）。

藤村 はずかしい（笑）。

「真実なんて大嫌い」

山田 このあいだ、諫早へ行って、市川さんが名誉図書館長をなさっている図書館を訪ねました。そこには“市川ルーム”というのがありまして、市川さんの脚本がかなり集められていて、怪獣ブースカのフィギュアやポスターも置いてありました。なおかつ、図書館の棚には市川さんの作品がびっしりと納めてある。市川さんについては例外的にOKでした（笑）。

テネシー・ウィリアムズの「欲望という名の電車」という戯曲に、ランチの「あたしは真実なんて大嫌い」というセリフがある。ランチを通

して真実を書くなんで嫌、真実であらねばならぬものを書きたいと、テネシー・ウィリアムズが言っているんですね。ちょっとそういうところが市川さんにあったんじゃないか。事実を書きたくない、事実であってほしいものを書く。そんなことを言ったらドラマはみんなそうかもわからないけれども。その傾向がとてもきちんとあって、姿勢があって、自選ドラマ集のタイトルに「センチメンタル」と「ノスタルジイ」と「メランコリー」という、マイナスのイメージがつきまとう言葉を、敢えて付けた。センチメンタルは偽の感情、一時の感情、偽善なんて思われがちじゃないですか。ノスタルジーも過去のいいとこ取りですから、実際的な人たちから見ればマイナスじゃないですか。メランコリーも、19世紀から20世紀に流行った気分で、動くべき時に動かないで、もの思いに沈んでいるのをカッコイイという風潮がヨーロッパにあった。そういういわばマイナスがつきまとう言葉でご自分のドラマ集を飾った。それはかなりの勇気と覚悟だと、ぼくは思います。なかなかそういうふうに分身の作家としての姿勢をシンボルに使う限定する人は少ないのではないのでしょうか。根性があったんだなあと思います。(編集部註:市川森一、最後の自選シナリオ作品集『市川森一メモ・モリドラマ集』映人社 2012年2月25日に刊行された)。

中園 お亡くなりになってから、何かで「ウルトラマンエース」最終回のセリフというのを見つけたんですよ。市川先生のセリフです。ちょっと読んでみます。

「優しさを失わないでくれ。弱い者をいたわり、たがいに助け合い、どこの国の人たちとも友だちになろうとする気持ちを失わないでくれ。たとえ、その気持ちが何百回裏切られようとも。それが私の最後の願いだ」。

これを読んだときに、これが市川先生の神髄だったんだなと思いました。

堀川 ここで突然ではございますけれども、客席に市川さんの奥様の美保子さんがいらっしゃいます。せっかくですからちょっとお話を伺いたい

と思います。

市川美保子 こんなに市川の話をしてくださると思ってませんでしたので、感激しております。急に去年の12月に亡くなりましたもので、みなさまには大変ご迷惑をおかけして、特にこの脚本アーカイブズにおきましても途中降板というんですか、旗振り役が急にいなくなってしまってほんとに申し訳ございませんでした。でも四十九日も過ぎまして、きょうは多分市川もこの会場に来て、ニコニコしながら聞いていたと思います。

堀川 せっかく奥様がいらっしゃったので、さっきの続きなんですけども、「市川さんって、どういう作家だったんだろう」と考えるときに、市川さんとキリスト教との関係について伺ったことがないので、そこをちょっとお伺いしたいのですが。

市川 聖書は必ず本棚に置いておりましたし、結婚式も婚約式も教会で挙げました。それから時々教会へ行っております。去年あたりからは、うちの近くに麻布南部坂教会というところがありまして、そこへ月に1回くらいは通っております。

堀川 私は、市川さんが聖書をそばに置いて生活なさったことが、市川脚本のある種のニヒリズムですけれども、われわれが考える程度のこととはもう聖書に書かれているとどこかで思っているような感じが、私はするんですよ。ひょっとしたら、そのことは脚本を書く上で市川さんを苦しめていたんじゃないか。というのは、私が社会ネタというんでしょうか、そういう題材を市川さんに差し出して、この社会ネタで本を書いてほしいとお願いすると途中から、先ほど山田さんがおっしゃったのですが、現実ではないところに物語を運ぼうとするんですね。つまり、現実の問題についての解答なんか出したってしょうがないよと。それは大した意味のあることじゃないとの思いを、どこかで持っていたんじゃないかというふうに考えているところがございました。

それでは時間になりましたので、このへんで終わりたいと思います。どうもありがとうございます。(構成・津川泉、南條廣介)

挨拶

近藤 誠 一 文化庁長官

我が国には様々な出版物、美術品、民俗芸能、様々な文化的・芸術的・知的・学術的な資料がふんだんにございます。我が国はこれまで中国やヨーロッパと違って異民族に征服されたことがないだけに、貴重な資料が多く残っております。

しかし、それらをいかに保護し、後世に伝えるかという点については、必ずしも万全の体制にあるとは申せません。いわゆる文化財については、文化財保護法という法律が1950年、戦後僅か数年でできまして、文化庁はその保護法のもとでその保全に努めて参りました。他方、国立国会図書館の方では様々な出版物、DVDに至るまで出版物をアーカイブして参りました。しかし両方の狭間に落ちるようなものもございます。これから情報がますます増える中で、後世にいい物を伝え残していくということに更なる努力を払うことが重要だと考え、文化庁と国立国会図書館の方で協定を結びまして、三つの分野について今後、長きにわたって保存していくということを決めました。

第一の分野がテレビ・ラジオ番組の脚本・台本、第二が音楽・楽譜といったもの、第三がマンガ・アニメーションといったメディア芸術でございます。

これらについては必ずしも既存のアーカイブズの枠に入らず、いざという時に体系だった保存ができないために散逸の恐れがあるということから、取りあえず国会図書館との協定の対象にした訳です。

本日のシンポジウムにおいて皆様から様々なご意見をいただいて、よりしっかりとした体制をつくり、次世代に様々なものを残していきたいと思っております。これらは単に芸術上・文化上の価値があるということだけではなく、そこにはそれをどうやって作ったのかという知恵、あるいは人類への警告といったようなものもあるかと思っております。この21世紀を生きていく上で、どうしたら先人の様々な夢や人類の知恵というものをしっかり子孫に残していくかということが我々の務めであると思っております。情報の波に吞まれることなく、掬いあげて行く上で是非、皆様の貴重なご意見を承りたいと思っております。

■第2部

パネルディスカッション（抄録） 「デジタルアーカイブの潮流の中の脚本・台本」



登壇者

- 木田 幸紀（NHK理事）
岡島 尚志（東京国立近代美術館フィルムセンター主幹）
長尾 真（国立国会図書館長）
吉見 俊哉（東京大学副学長・司会）

吉見俊哉 ここから第2部のシンポジウムに入ります。近藤文化庁長官がおっしゃったように、わが国には非常に多くの文化的な遺産が残されています。とりわけ20世紀を通じて、メディアに関わる文化、映画、テレビ、音楽、そういう多くのメディア文化が遺産として残されている。

これを今、どういうふうを活用していくか、どういうふうに残していくかというのが極めて大きな問いとしてあります。このシンポジウムのテーマである脚本・台本の保存というのも、その大きな流れの一環であります。

2000年代——記憶の時代

吉見 脚本・シナリオ・台本は映像文化、テレビ番組や映画の設計図だと思います。作品と設計図は

ともに保存する必要があります。そのことによって、作品がどのようにできていたのかが見えてくる、というのが基本的な認識だと思います。

戦後の日本の歴史を私見で言ってしまうと、1950年代60年代は「理想の時代」「夢の時代」であった。社会は変わる、変えていくことができる、こんなふうになれると思えた時代だった。しかし70年代80年代以降、だんだん社会がフィクション、「虚構の時代」になっていきます。そして2000年代になって、日本の社会が「記憶の時代」になってきている。

このようなシンポジウムが行われる非常に重要なモメントは、最初に長尾館長のお話にもありました、2011年5月18日、文化庁と国立国会図書館が協定を結んだ。次の3つの分野（①放送脚本・台本、②音楽・楽譜、③マンガ・アニメ）で共同で資料の収集保存にあたるという協定です。

そのことをまず頭に入れておいていただきたいと思います。それでは、この脚本アーカイブズ、一体誰がどのような形で進めようとしているのか、構想しているのか？

脚本アーカイブズの構想は、段階的にというか、だんだん輪が広がってここまできた。市川森一さんをはじめとする日本放送作家協会が中心的な役割を果たしたことは言うまでもありませんが、日本脚本家連盟、シナリオ作家協会、放送人の会、民間放送連盟、NHK、国立国会図書館など、いろんな組織がゆるやかにつながって脚本のアーカイブ化を進めようとしています。

では、これまで放送された番組はどのくらいの数になるのか。脚本アーカイブズの方々の試算では、1953年のテレビ放送開始から2003年までで多分234万5000だと言います。こんなに多いのかと思いますけど、要するに数百万冊のレベルで台本

があるんじゃないか。その中で残されているものが数万冊。脚本アーカイブズで約4万冊。NHKの放送博物館に残っているのが数万冊。それらはほんとに氷山の一角で、なくなっているものの方が圧倒的に多いというのが現実だと思います。

4つの基本的認識

吉見 何を議論しなくてはいけないか？ 3つのことが重要です。「何を保存するのか」「何のために保存するのか」、そして「どこでどう保存するのか」。この3つです。

「何を保存するのか」は、脚本アーカイブズの方々で議論する中で出てきたことなのですが、年代を分けて考える必要がある。1980年以前と1980年代から2000年、それから2001年以降。80年以前は映像があまり残っていない。だから脚本が、映像を復元するという意味で非常に重要な資料です。80年代以降は映像がそこそこ残っている。あるものとなないものが混在している。

テレビの歴史を考えてみると、高度成長の50年代60年代から80年代くらいまで、まさにテレビの黄金時代なんですね。それをどう読みこなすかということは非常に重要な課題です。

今は記憶の時代になりつつあると申しましたが、社会が大量消費の社会からリサイクル、循環していく社会に変わってきている。これは牛乳パックやレアメタルと同じ話ですが、それだけではなくて、知識とか文化のリサイクルということが非常に重要なモーメントになってくる社会に変化しつつあるというのが、基本的な認識でございます。だから蓄積し、再生し、再利用するという仕組みを作ることが重要なんです。

これは脚本アーカイブズに限りませんが、そのときに考えることは4つです。

1つは「循環・プロセス」。蓄積して保存したら終わりということではありません。保存して検索システムを作って、再活用して、再創造していくというプロセス全体を設計しなくてはいけない。

2つは「人材」です。アーカイブは専門家が必要です。図書館に司書がいて、博物館に学芸員の

方がいるように、もっと高度な形で実現するように、アーカイブの専門家たちをきちんと社会が養成することが必要です。

3つは「法的処理」。著作権や、映画だったら原盤所有権というようなものがあります。これらの法務システムが往々にして未整備です。ですから、オーファン（みなしご）フィルムとかオーファン著作物と言いますが、誰が最終的な所有者なのかわからない作品が大量にあります。これをどうするかは法整備が極めて重要で、国家的になんとかしないとイケません。喫緊の課題です。

4つは「何らかのナショナルな拠点」を作って置いた方がよいということです。

最後に、提案したいことがあります。脚本アーカイブズを市川さんがこれだけやってきたことを示すために、「市川森一アーカイブ」を創る必要があるのではないかと。脚本家・市川森一、その人が創った世界がリサイクルされていくことによって、生き続ける。脚本アーカイブで一体何ができるのか？ 市川さんを例に明示していくことができるのではないかと。

脚本は土台・設計図

吉見 ここからは、3人のパネリストの方たちにそれぞれのお立場から、つまり映画のアーカイブ化、テレビのアーカイブ化、そして国立国会図書館の3つの立場からお話をいただきます。まず木田さんの方から、NHKでの取り組みを含めて、放送台本・脚本のアーカイブ化をどう考えるか、お話をいただきます。

木田幸紀 NHKの木田です。2つのことをお話しようと思っています。

1つは、テレビドラマのプロデューサー、ディレクターから見て、脚本アーカイブズはどんな意義があるのかというのが一点。

もう1つはNHKアーカイブズの今後の取り組み、その最新情報をちょっとお話ししたい。

テレビドラマを作るという仕事は、例えば、なるべく背の高い円錐を作るのが良いことだとすると、脚本が7割くらい土台を占めます。この脚本

の底面積が大きければ大きいほど、その上に積んでいって高くなる。2割くらいが土台に乗る出演者。最後の1割が演出、ディレクターになる。上に行くほど全体に占める影響力が大きくなる、重くなる感じです。いくら脚本が良くても、出演者がすばらしくても、演出がよくわかってないと全部を壊してしまう。

そういう意味で脚本は土台なので、設計図と言えらると思います。設計図というは設計図どおりに作ることが前提ですよね。その設計図はあるのですが、作り方が一通りではない。ストーリーの大きな流れは変えられないのですが、心理表現とか表情とかは、何通りにも解釈ができます。それをさらに俳優さんが表現するときに、俳優さんの表現も何通りもあります。演出家の考え方も何通りもあります。

演出家にとっては必然の選択を重ねるのかもしれませんが、客観的に見るとかなり恣意的な、偶然の選択によって土台からてっぺんまで積み上がっていく。すばらしい作品が出来たというときは、そのどれ1つが欠けてもうまくはいかなかったと言えます。その意味では大変デリケートな作業であります。

脚本アーカイブズの意義というは、台本の形、言葉で表現されている形、そこへ行くまでの書き手の中での選択があったわけで、そういった最初の形での台本というのを、設計図という意味ではなくて、ひとつの表現としてそこに置いておくべきでしょう。それと出来上がった作品との関係を調べることはそれなりに意味のあることですが、必ずしも同じものではない。だからアーカイブズの意味は大きいのではないか。

脚本と出来上がった作品は、ぼくにとってはかなり別なものです。ですから、昔の脚本を今まったく違った目で時代が経ってから読むと、見えてなかったものがけっこう見える。そういうこともあるので、ぜひ脚本アーカイブズがより充実していった多くの方に使ってもらえるといいなあと思っております。

NHK 「放送文化アーカイブス」

木田 もう1つは、NHKアーカイブスについての今後の展望です。NHKアーカイブスは平成15年からできております。主として番組を保存する、ニュースを保存することが第一義的な目的です。番組数は現在74万、ニュース項目は518万です。台本はドラマだけじゃなくて、ドキュメンタリー、ラジオ番組に至るまでさまざまな台本を保存していますが、これが3万8000冊ですね。ほかにも番組の素材であるとか写真・楽譜等も保存しております。

全国の放送局で番組公開ライブラリーというのをやっており、およそ7700本の番組を公開しております。これはインターネット等でダウンロードして見ていただくという形です。

NHKには放送文化研究所と放送技術研究所、2つの研究所があります。その両方の研究所が共同で研究しているのが、「放送文化アーカイブス」(仮)です。これは、NHKアーカイブスはどうしても番組やニュースなどの映像が主体であります。脚本や原稿やそういった情報もありますけれども、放送文化研究所では放送文化そのものについての論文であるとか、レポート、調査、データですね。そういったものを今まで研究を重ねております。その他にもNHKが持っている番組の評価であるとか、視聴者のみなさんからの反響であるとか、そういったデータも数多い。

今までは、そういったものはバラバラでしか見ることができませんでした。そこで、こういったジャンルの違う、タイプの異なるデータをリンクして検索できるような「リンクデータ」——リンクする技術を技術研究所で開発して、単に番組・ニュース映像だけでなく、それにまつわる調査データが、何かキーワードを入れると出てくる形にならないかという研究をしています。一応、来年の2月のテレビ放送60年から、ないしは5月の技術研究所の公開に合わせて「放送文化アーカイブス」のデモ用のサイトを作って、それ以降、数年かけて本格運用に持って行こうという考えでおります。

物を安心して捨てられるように

吉見 続きましたは、フィルムセンターの岡島さんからお話をいただきたいと思います。「フィルムアーカイブの現状とシナリオ」というテーマで、フィルムアーカイブ、映画のアーカイブの中のシナリオの問題について、お話をいただけるのではないかと思います。

岡島尚志 フィルムセンターの岡島でございます。フィルムセンターは組織的には東京国立近代美術館の映画部門です。わが国唯一の国立の映画機関ですが、国立美術館の一組織でもあります。フィルムセンターは昨年40周年を迎えました。その40年の歴史の中で、自分たちがどんな仕事をすべきか、どんな仕事をするのが世の中のためになるのかを考えながら仕事をしてきました。

限られた予算、人員の中で、まず私たちがやらなければならないのは保存であると考えております。われわれは2種類の人々のために奉仕をしています。それは「今生きている人たち」そして「将来の人たち」です。とりわけ将来の人たちのために保存が大切です。

映画フィルムと関連資料を集め、情報化し、保管し、修復し、上映し、公開し、映画以外のメディアで利用できる素材を提供し、映画の次世代のファンを育て、つまり教育をし、映画に関してさまざまな研究をする。

そのフィルムセンターは京橋にビルがあって、相模原に保管庫を持っている。3年前の予算ですばらしい保存棟が増築されましたので、当分の間、映画フィルムの保存について場所を確保できているという大変ありがたい状況にあります。

一体、フィルムセンターにはどのくらいの映画があるのか？ これは今年の1月末の資料ですけど、本数で6万4000本を超えました。実は、これの他に寄託されている所有権のないフィルムもありますので、それを含めると完全に7万本を超えました。これは本数であり、映画のタイトル数ではありません。つまり、1つの映画があると、画ネガ、音ネガ、マスターポジ、その他さまざまなフィルムプリントができますので、重複して数

えた本数でこのくらいあるということです。

ナショナルフィルムアーカイブですから当然、日本映画の保存に責任を持っています。日本映画は本数にして5万5000本くらいあります。劇映画でいうと、1万本を超えました。これをタイトル数に直すと、大体5000タイトルを超えています。つまり、日本映画の劇映画に関してだけ申しますと、5000本くらいはフィルムセンターの倉庫にあって、安全保護されているということです。

今日のテーマのシナリオなんですけど、これはフィルムセンターの中での考え方ですが、映画の資料には、まず「製作資料」と「宣伝資料」があるだろうと考えています。

「宣伝資料」というのは、どうぞ見てくださいというものです。もともと公開するために作られたものです。「製作資料」は、もともと見せるために作られていません。作る人たちだけのものです。例えば回し読みしたりするという性格のものです。ですから、非公開を旨とする「製作資料」と、公開を旨とする「宣伝資料」を保存しながら、それをどう公開していくのかということ、われわれは日頃考えています。ですから、シナリオの公開原則もそこを考えながら行う。

一方で、映画業界の自主審査機関である映画倫理委員会、いわゆる映倫での審査に出されたシナリオというのがあって、これはそこに網羅的に蓄積されていくわけです。それが数年に一度、フィルムセンターにまとめて寄贈されるということがずっと続いています。こんなことでフィルムセンターにはシナリオが集まってくる。現在、4万冊に達しています。

最後に、申し上げたいことがひとつ。物すなわち文化を保管するためには法が必要で、人が必要で、お金が必要で、技術が必要です。そしてもう一つ大切なのは、保存しようという意思だろうと思います。

その意思を国家の意思として持っている代表的な国がフランスです。フランスというのは面白い国で、国民全体でいうと、物を、文化を保存することがほぼ無意識化されているように思わ

れます。つまり、そこに巨大な図書館、巨大な保存庫があるということは当然だと考えられています。これはおそらく伝統だと思います。

この効用はほんとに大きい。なぜかという、みんな捨てることができるからです。例えば今、日本のテレビを見ると、“物をどう片づけ、捨てますか”という番組が視聴率を稼いでいます。きれいに整理して捨てる人は尊敬されるのです。これはすばらしいことなのですが、安心して捨てられない人たちもきっとたくさんいるのです。私もそうです。とても捨てられないのです。

自分が捨てたら、これが世の中から消えると思うと、捨てられないんです。しかし公的な機関がそれを代理していれば、物を安心して捨てられるようになります。物を保存する者が捨てることを勧めているというのは奇妙な構図ですが、実は保存機関には捨てるための効用もあると申し上げたいと思います。

デジタルアーカイブの可能性

吉見 ありがとうございます。特に最後におっしゃったことはまことに至言で、人々が安心して物を捨てられるようになるためには何が必要なんだろう。これは非常に重要な問いだと思います。

長尾館長からお話をいただきたいと思います。今回のシンポジウムの立役者であり、一連のさまざまな動きの中心には長尾先生がいらっしゃいます。国立国会図書館は、脚本のアーカイブズ化、そして文化庁との協定に基づくさまざまな取り組みの中で何を目指しているのか。「デジタルアーカイブの可能性」ということで、お話をいただきたいと思います。

長尾真 一般的に何故デジタルアーカイブが必要なのかということからお話したいと思います。まず、オリジナルな資料は国会図書館も3700万点くらいを持っていますが、これは1つしかない。ですから火事などの災害に遭うとなくなってしまいます。ヨーロッパで、古い図書館の古い書物が火災でなくなってしまったという例が過去からずっとございます。フィレンツェの図書館が洪水

でほとんどやられてしまったということが30年か40年前にございました。そういう危険もある。それを全部デジタル化しておくで助かる。

現物はなくなる危険性があるけれども、デジタル化しますと、コピーがいつでも作れますからコピーをあちこちに置いておくことができます。今、図書館界では外国にデジタルコピーを預けておいたらどうだろうという議論もなされている。

例えば、ワールドデジタルライブラリーというのをユネスコがやっております、国会図書館も参画しております。これはアメリカのワシントンと、エジプトのアレキサンドリアにミラーサイトがあって、2か所で保存されています。どちらかが災害にあっても残ります。だからデジタル化して保存することはそういう危険を回避するという意味があります。

もう1つは、当然のことですが、どこにいても見ることができる。著作権の問題もあって、簡単ではないのですが、技術的、原則的にはどこにいても見られるわけです。それから、貴重な資料の場合はなかなか見せてもらえません。京都のお寺などには貴重な古文書などがたくさんあるのですが、これもデジタル化しますと、誰でもが見られる。学生でも教育のために貴重な資料も見ることができます。たしかに、紙の質などは現物を見ないとわからないのですが、書物や美術品の外から見た状況はデジタルコピーで十分に見られます。

最近ではデジタル技術が上がってまいりましたし、微細なところまで見ることができます。むしろデジタルで見た方が細部が良く分析できる面があります。それから、いろいろな再利用が自由にできる。いろんな資料のいろんな部分を取り出して、デフォルメさせたり、消去したり、自分の好きなように再利用ができます。デジタルの世界でこそ可能になる魅力的な技術だと言えます。

世界的に、図書館のデジタル化は非常に進んでいます。美術館、博物館も同じことをやっています。その中で、フランスは文化国家ですから、INA（フランス国立視聴覚研究所）では、これまでに180万時間のTVプログラムを保存していま

す。今日では法律が作られておりまして、国立の放送局だけでなく、プライベートな放送会社のプログラムまできちっとデジタルで集めています。

それからEUにおきまして、TVプログラムの大切さということを認識されまして、EUに属している17ヵ国、1万4000点のTVプログラムがデジタルで保存されています。今年中にはそれを3万点にまで増やすことになっています。これが誰でもが利用できる環境になりつつあります。これは「EUスクリーン」という名前を付けたプログラムです。

脚本は映像とペアで集める

長尾 そういった中で、脚本は映像とペアで集めることが最も大切であります。映像を集める場合、フィルムならフィルムセンターで集められるので、国会図書館としてはデジタルの映像を集め、そして脚本を文字データとして集める。文字化されて検索に対応する。これからの問題ですが、そういう形だと思っております。

そして、脚本のある部分が映像のどの部分に対応しているか、リンクを付ける。脚本のこの部分は映像のこの部分だよとシーンごとにリンクを付けておく。検索をするときには脚本の方で検索をします。どういう俳優がどんなセリフを言っているだとか、どういう場面を取り出したいとか、脚本の方で検索をして映像を取り出す。

映画の場合は長い時間ですから、途中のこのところを再利用したいと考えても、最初から探していくのは大変です。脚本で検索して、映画の必要のところだけがデジタルで取り出せる。そういうふうな技術を創っていく必要があろうかと思えます。

こういう考え方はまだ世界で、フランスといえどもやっていません。絶対日本でリーダーシップを取ってやるべきだと思っています。できれば国会図書館もそういう形で頑張っていきたい。

ですから脚本は文字化して、コンピュータで扱えるようにしないとイケません。私はコンピュータを使った言語処理の研究をライフワークとして

きたので、その観点から脚本のデジタルアーカイブを眺めますと、非常に面白いことがある。例えば、会話の言葉の変遷をみていくと面白いのです。

映像の世界との関係でいいますと、脚本に書いてある言葉だけでなく、舞台上で演じられる、あるいは映像の世界で発話されるということになると、アクセントとかイントネーションとかそういったことがどういうふうに変ってきているのか、そういうこともわかるので非常に面白い。学問的にも役立つデータになっています。

その他に、敬語がどういうふうに使われているか、台詞の分析がこれからコンピュータでも非常に大事になってきます。そういった意味で、脚本とかそれに対応する映像のデジタルデータが自由に使えるということは研究のための宝庫であると考えられます。そういう面からもこの脚本アーカイブはぜひ推進したい。

アーカイブポリシーとミュージアムポリシー

吉見 今の長尾先生のお話と岡島さんのお話は、良い意味で若干対立する部分を含んでいます。岡島さんのお話の中では、フィルムとか現物を保存するということが極めて重要だということに力点がありました。長尾先生のお話は、デジタル化して活用することが大切だということに力点がありました。対立というより相互的な関係と言った方が良いかもしれませんが。

岡島 フィルムセンターは映画だけを対象にしている機関です。そうは言いながら、実はテレビ映画もあるのです。フィルムで作られたテレビ映画は、寄贈があれば受けています。テレビと映画の境界にはあいまいなところがあるのですが、ナショナルフィルムアーカイブとしてのフィルムセンターが持っているポリシーはアーカイブポリシーです。対象を規定して、網羅的に集めるということなのです。

その一方でフィルムセンターは、東京国立近代美術館という美術館の一部でもあります。美術館とはミュージアムですから、ミュージアムポリシーで動いています。どういうことかという

と、多くの絵の中から優れた絵を選ぶことをポリシーにしている。そうするとフィルムセンターというのは、アーカイブポリシーで動いていながらミュージアムポリシーもある意味では考慮しているということになります。

ニューヨークの近代美術館（MOMA）の映画部はまさにわれわれと同じで、映画を集めるときにアーカイブポリシーとミュージアムポリシーを両方使っている。例えば、映画もテレビも製作した映画監督やプロデューサーが、自分のものを寄贈しますと言ってきたときに、その作家のものを「うちは映画部だから、フィルムだけいただきます」ということになるか。そこはなかなか微妙なんですね。MOMAの場合は幸いなことに映画部とメディア部の2つの部があるものですから、映画とテレビを作ってきた作家が持ち込んできても、映画は映画部で扱います、テレビ作品はメディア部で扱いますよということもできます。

現物保存とデジタル化

岡島 保存と利活用の問題ですけど、今ある人たちは今あるものをすぐに見たい、アクセスしたいとおっしゃる。しかし限られたリソース、限られたスタッフ数の中で、私たちが何ができて、何を考えなければならない。例えば6万本のフィルムがあると言いました。その半分は過去8年で集まったものなんです。どういうことかという、デジタル時代になって人々が物を捨てるはじめたんです。

もう使わなくなったフィルムは昔なら完全にこの世から消えていたんです。みんな、捨てていましたから。しかし今は、フィルムセンターというところがあって、あそこに寄贈すれば作ったものが後世まで残るよと思ってくださる方が、映画の世界に非常に増えた。そこで1年間に4000本とか8000本とかいう量のフィルムがフィルムセンターに集まるようになった。そのことに私たちは自分たちの人材もリソースも使わざるを得ません。そのことによって、この数万本の映画がこの世から消えないで残った。そのところが大事なんで

す。そのことによって、アクセス事業が未だみなさんの期待に応えられていないというのはたしかです。

脚本についてもデジタル化は完全に今後の課題になっています。公開はしていますが、いろいろな制限があります。そういう意味ではこれをほんとに早く手を着けて解決しなければならない。もしかしたら外のナショナルデジタルアーカイブセンターのようなところが、われわれが保存したものをアクセスできるようなものに変えていただくことがあってもいいのではないかと。

木田 オリジナルな「もの」としての脚本は、今のものがどれくらい価値があるかわかりませんが、大正時代のラジオの台本がNHKの放送博物館に保存されている一番古いものです。そのときの台本というのはかなりいろいろな文化的な価値を自動的に持っていますよね。

デジタルデータが中身そのものだとすると、いろいろな付加価値が付いた現物の本は、それこそミュージアムポリシーになるのかもしれませんが、美術館的なアプローチで保管保存していく。それぞれの価値の扱い方かなあと思いますけど。

デジタルがオリジナルになる時代

長尾 私は「もの」の保存に対しては非常に価値が高いというか、絶対にやらなければいけないと思っております。私どもの図書館に於きましても、古文書など非常にたくさん大切に保存しているわけですが、利用という観点からすると、やっぱりデジタルでない、ということがあつたわけですね。

もう1つは、将来のことを考えると、例えばみなさんがデジカメで写真を撮っている。その写真は「もの」としては無いわけですね。デジタルとしてはあるのだけど、写真としてはない。だから、デジタルがオリジナルになる。そういう時代になる可能性がある。

映画でもデジタル映画はどんどん出てくるでしょうけど、フィルムではなしにデジタルの世界で映画が配給されるようになる。そういう時代の

ことも考えないといけない。

それから、図書館の大きさ・規模ですけれど、アメリカの連邦議会図書館が一番大きくて、大体1億4000万点くらいの資料を持っています。次いで英国国立図書館、フランスの国立図書館、その次が中国国家図書館か日本の国立国会図書館。われわれは3700～3800万点くらい持っていますが、そのうちの210万点がようやくデジタル化できたという段階です。

デジタル化といっても画像の形でデジタル化されているだけで、文字化はされていない。これを文字化するのは大変困難な問題がございます。きれいな活字の場合は90数%、OCR装置で機械的に読み取れますけど、脚本のように手書きが多いもの、手書きで修正されたもの、印刷が汚れているものは機械が読むのは難しく、これは大きな問題で、解決するにはお金が必要です。

それでもコンピュータに入力することによって、日本中の人々が利用できるようになるので、相当なお金をかけても十分な価値があることではないのかと、私個人は思っております。

垣根を越えて文化的基盤を

吉見 今日ですと、図書館には図書館司書の資格があり、美術館・博物館には学芸員の資格があります。しかし大学でこれらの資格を取っても、必ずしもそういうポスト・就職があるかというところはいかない場合が多い。

世界的に言えば、新しいデジタル技術の中で図書館、美術館、博物館がアーカイブをこなしていける技術が大変必要とされています。ということは何が必要か？ これらをつなぐような形で新しいデジタルキュレーター、デジタルライブラリアンだったり、新しい職能が必要です。

日本の大学は、大学院重点化以降、大学院が大変膨らんで、博士課程を取ってもなかなか就職できない人が増えています。高学歴の潜在的失業者層が膨らんでいる中で、まさに新しい職を創る必要がある。

同時に著作権者不明、所有者不明の著作物を

どう公表化するかという問題があります。これは国有化してもいいと思いますが、きちんと公共的な管理をしていく権利処理の仕組みを作っていくことがとても重要です。

もう1つ、保存再利用の話についてですが、私も岡島さんのご意見に賛成です。再利用していくプロセスの中で国会図書館が担うということも十分あると思いますが、保存することから再利用につながるようデジタル化し、再利用し、それを高度化していくというプロセスの仕組み作りが必要です。

デジタル化して再利用していくプロセスにおいては、映画であれテレビであれ、いろいろな違うジャンルが一種ボーダーレス化というか、垣根を越えて文化的な基盤を作っていくということが不可能ではない。

今回のこのようなシンポジウムもひとつのきっかけとして、今取りあえずテレビの脚本から始まっていますが、映画のシナリオ、あるいは演劇の台本、つまり文化の設計図がつながる形で社会的に、公共的な基盤を作っていく。こういうシンポジウムがきっかけになっていけば、市川森一さんが提唱されたことを多少なりとも継いでいくことにもなるのではないかと。

このプロセスはまだ始まったばかりです。脚本アーカイブズはできていると思ったら大間違いです。できていないのです（笑）。作ろうとしていて、まず国会図書館と文化庁の協定ができたことによって、第一歩が築かれた。歩み始めたのであって、完成しているわけではございません。

完成・公開に至るまでにはまだまだ多くの課題があって、多くの方々のご協力を必要としています。まだ発展途上のものであり、多くの方のお力添えが必要だということをどうかご理解いただきたいと思っております。

(構成・津川泉、南條廣介)

閉 会 挨拶

秋 元 康 (社団法人 日本放送作家協会 理事長)

本日は、平日の午後という時間帯にもかかわらず、多くの方にこのシンポジウムにお集まりいただき、ありがとうございました。日本放送作家協会理事長の秋元康です。

私もパネラーの方々と一緒に話し合いをしたかったのですが、スケジュールの都合により、このビデオでご挨拶する失礼をお許してください。

今まで私たち放送作家は、放送に向けて一生懸命、命を削るようにして台本を書いても、それが放送された瞬間にその台本も消滅するという環境にありました。しかし、それではちょっともったいないのではないのでしょうか。確かに、今の放送、テレビやラジオを知る人たちからは、私たちが書いてきた台本や脚本が、ひとつの道筋だということは理解されています。しかしどういうふうにか、こういう作品ができてきたのか。あるいは、その作品の次には何があるのか。それを知るために、今までの多くの先輩が書いた台本や脚本、あるいは今の人たちが書いたもの、すべてを記録として残していった方が良いのではないのでしょうか。

これが、日本放送作家協会が進めてきた脚本・台本のアーカイブ活動の根本的な考え方です。この活動は故・市川森一会長が提唱されて始まりましたが、おかげさまで今では多くのみなさまのご理解やご協力を得てここまで広がってまいりました。これからも国会図書館や文化庁の方々とこの事業を進めていきたいと思っております。是非、みなさまのご協力をいただきたいと思います。

第1部のシンポジウムで作家、演出家、そして出演者の方々に、現場から見た台本や脚本の価値について、第2部では専門家にデジタル時代のアーカイブについて、いろいろなこととお話しいただきました。

今大切なことは、みんなに関わることです。いったん放送されると消えてしまうという宿命を持つ放送というメディアの中で、台本や脚本を残すためにどうしたらいいか。先輩たちの足跡を大切にしながら、われわれの足跡も人の心にきちんと残るように、これからも脚本アーカイブズを進めていきたいと思っております。是非、みなさまのご理解とご協力をいただきたいと思います。

本日はありがとうございました。

総合司会そして座談会参加者として —— 暖かい春の予感 ——

奥山 侑伸 (日本脚本アーカイブズ特別委員会副委員長)

今年は例年より寒さが厳しい日本列島、2月と言えば一番寒い時期だ。15日に脚本アーカイブズ・シンポジウムが国立国会図書館で開催された。「失われた脚本・台本を求めて」サブタイトルは～文化リサイクルの意義～である。

一般の方々にはピンとこないタイトルだと思うが、テレビ・ラジオの仕事に携わっている人は当然、台本・脚本に興味、関心がある人達には「一体なにをやるんだ？」と気になるシンポジウムである。

テレビが始まって50年ラジオ80年余の歴史の中で台本・脚本を組織的に統一した保存は一切なかった。やはり台本・脚本は文化遺産ではないか！と平成15年脚本家の市川森一さんの提唱で散逸している台本・脚本を集めようと日本放送作家協会の有志が集まって「日本脚本アーカイブズ準備室」が立ち上がった。以来7年、民放各局とNHK、文化庁等のバックアップを頂き、収集、管理、保存にはズブの素人集団の脚本アーカイブズが関係資料も含め、約5万点を収集した。そして此处へ来て一部が公的機関へ移動する運びになった。やっと筋道がついた集大成の報告を兼ねての開催だった。

第1部の座談会は演出家の堀川とんこうさんの司会で女優の藤村志保さん、脚本家の山田太一さん、脚本家の中園ミホさんと私奥山コーシン。みんな「現場」の人たちだ。特筆は藤村志保さんから寄贈された400冊の台本。ご自分の好きな千代紙でカバーを掛け、保存の綺麗さに驚いた。それだけで仕事に対する姿勢が溢れている。書いた作家は嬉しい筈だ（脚本家はその事を知らないが）。山田太一さんにはアーカイブズに納得して頂き、力強い流れの座談会になった。

第2部では東大副学長の吉見俊哉さんの司会で「デジタルアーカイブの潮流の中の脚本・台本」がテーマでパネルディスカッション。国立国会図書館の長尾真館長、木田幸紀NHK理事、東京国立近代美術館フィルムセンター主幹の岡島尚志さん、それぞれその道の専門家。現場の第一部より、台本・脚本が文化遺産であるとの見方、考え方の角度が違う。現場の我々は思い込みが強い分、視野が狭いような気がする。テレビの初期には電気紙芝居と揶揄されたテレビが気がつけば世の中をリードしていた。そして今インターネットが普及し、まさか小説や脚本をデジタルで読む事が出来るとは……である。

もしかしたら今年は脚本アーカイブズにとって例年より暖かい春になりそうである。

『脚本アーカイブズ推進 コンソーシアム』報告

はじめに

文化庁と国立国会図書館の間で平成23年(2011年)5月18日に結ばれた『我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承に関する協定』の中で、脚本・台本について「連携・協力して所在状況や保存等に関する調査研究を行うとともに、過去の重要な資料の保存について検討する」と記された。これを受け、関係者で構成された任意団体「脚本アーカイブズ推進コンソーシアム」が同7月に設置され、収集・保存を推進するための検討を行ってきた。以下、その概要を報告する。

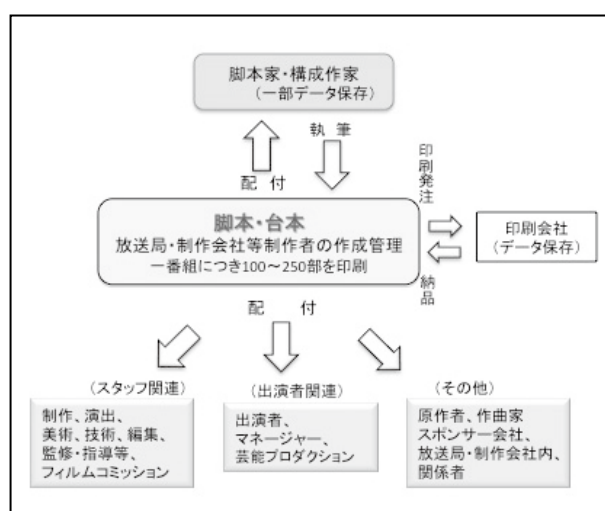
脚本・台本アーカイブズ推進の考え方

日本の放送業界では長い間脚本・台本を体系的に保存する体制がないまま、過去の脚本・台本が、散逸・消失の大きな危機にさらされている。特に昭和55(1980)年以前は、保存されている映像が少なく、脚本・台本によってしか内容を知ることができない。極めて貴重な「文化資産」といえるが、この時期の脚本・台本は紙やインクの劣化も激しことから、最優先して緊急にアーカイブ化(デジタル化)を行うべきである。

脚本アーカイブズ構築のための作業を具体化し、問題点等を解決するには、従来のように作家団体だけでなく、関係する諸団体・関係者等を結集していくほか、公的機関をはじめ大学等の研究機関の協力や提携が必須である。脚本・台本の受け入れ施設や調査・研究の施設等もふくめ、官民が一体となって活動していくことが望ましい。

著作物である脚本・台本の保存、公開・活用に関しては、著作権の保護等慎重な検討の段階を踏まえる必要がある。しかし、上記のように緊急保存を要するものもあることから、アーカイブ活動の試行的な「実践」とシステム構築の「検討」を併行して行うべきではないかと考える。脚本・台

本アーカイブの構築にあたっては、膨大に存在するはずの脚本・台本のうち、なにをどの程度保存・管理していくか、保存スペースの関係を考慮することが大事だが、今後の公開・活用のあり方、さらに著作権問題まで含めると、関係諸団体、関係者の間に様々な考え方があり、今後検討し、意見統一をはかる必要がある。一方、貴重な脚本・台本は日々失われており、このまま放置できず、段階的かつ部分的にでも、試行錯誤を積み重ねて行くことが非常に大切である。



I 脚本・台本の残存・所蔵状況

1) 前提としての脚本・台本

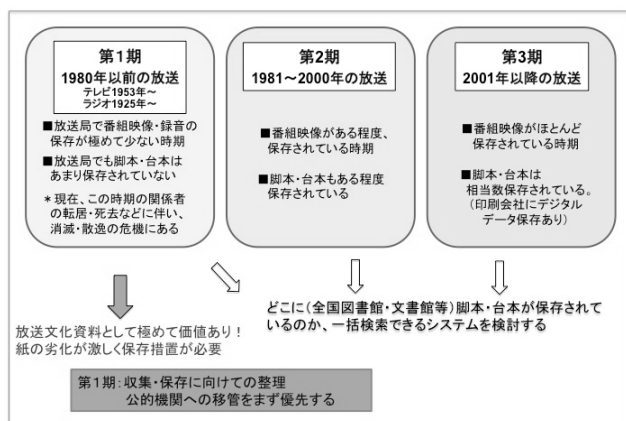
① 脚本・台本がどこに残されているか？

(上の図は主にテレビ番組制作時の場合)

テレビ制作の場合、まず脚本家・構成作家によって脚本・台本が執筆され、完成段階で「決定稿」が印刷製本される。そして、制作側(放送局・制作会社)から図のように番組スタッフや出演者関連、その他の関係者に配付(貸与)され、番組制作の過程で使用される。制作が終了しても、制作側が脚本・台本を回収することは基本的になく、廃棄や保管は各自にまかされている。ただ、他への譲渡や販売は禁止されている。従って、放送局や番組制作会社以外に番組関係者が個人的に保管しているケースが考えられる。一方、脚本家や俳優等(やその遺族)が一括して図書館や文学館、大学図書館等に寄贈したケースもある。

② 放送脚本・台本の年代分け

放送脚本・台本の場合、放送された年代で切り分けることが、アーカイブ化の優先順位や収集・保存の方法を考えるにあたって大きな意味を持つ。来年はテレビ放送開始60周年にあたるが、下の図のように、テレビ60年の歴史の前半30年あまりを便宜的に「第1期」、その後の20年を「第2期」、それ以降現在までの10年あまりを「第3期」として分けてみると、第1期の放送に関する資料が、文化を後世に継承するという意味で大変貴重な「文化遺産」「文化資産」であることが分かる。



2) 脚本・台本の残存・所蔵について

① 実態把握調査の実施結果

前述した脚本・台本を保管している可能性がある個人・会社が所属している団体等を通じて、昨年7月以降、脚本・台本の保管状況に関しての調査を実施し、全体状況の把握を行った。その結果は8万9千冊であり、既に日本脚本アーカイブズや、放送ライブラリーに保管されている分と合わせると、計12万9千冊がアーカイブ化に向け寄贈の可能性があることが分かった。(作家団体等、未集計部分あり)

また全国の所蔵の可能性のある施設に対しても同様の調査を実施したが、各地の図書館や文学館等に総計8万冊以上の脚本・台本が所蔵されているという実態が、今回判明した(同報告書・研究調査部の項目を参照)。

3) 日本脚本アーカイブズの脚本・台本

① 全体の内訳状況

寄贈の6割ほどが著作権者自身である脚本家・構成作家からであり、4割ほどがその他の俳優や番組制作者等関係者からの寄贈となっている。放送作家以外の人からの脚本・台本には、多くに「書き込み」がなされている。俳優や制作スタッフ等、職種に応じて「書き込み」内容に違いが見られる。(2011年8月までの集計)

Ⅱ アーカイブ推進の具体的方法と課題

1) アーカイブ活動の母体となる新組織

① 「収集」と「保存」の準備の主体

脚本・台本を収集・保存・管理するにあたっては、きめ細かな作業が必要となり、今後規模が大きくなると受け入れ先機関の作業キャパシティを超えることは十分に想定される。また、この工程は、脚本・台本をめぐる状況を把握している「実務チーム」が具体的に推進させるべきであると思われる。

これまで脚本アーカイブズ活動は日本放送作家協会が専ら行ってきたが、今後は放送作家だけでなく広く関係者の協力のもとにステップアップをさせた活動を実施しつつ、受け入れ先との十分な連携を保っていくことが望ましい。そのため、新組織を設立し、今後はその新組織がリードする形で体系的に脚本アーカイブズを推進していくことが、現コンソーシアムメンバーの中で承認を得た。

② 新組織の概要について

<名称>

一般社団法人

日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム

<目的>

貴重な文化資産である脚本・台本を確実に後世に継承していくために、そのアーカイブズ構築に關しての活動全般を推進することにより、文化および芸術の振興に寄与する。

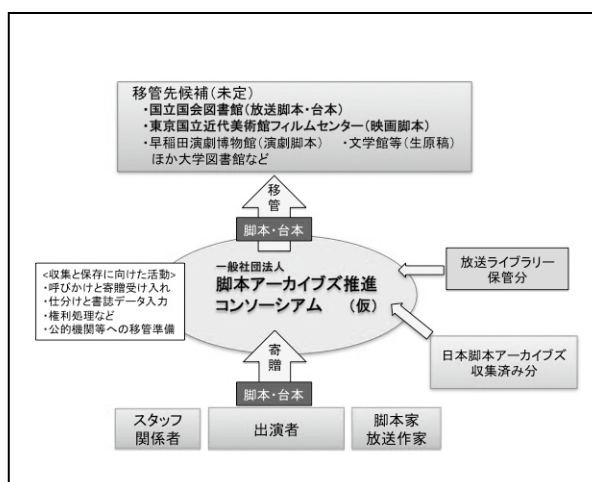
<設立時期>

平成24年6月初旬予定

2) 今後の収集・保存の基本ルート

脚本・台本のアーカイブ化の基本のルートは、以下の図のように、日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム（以下、「新コンソーシアム」と表記）が総合的な窓口となり、一旦寄贈分の脚本・台本を引き取り、整理・管理の上、受け入れ機関に移管を行う形を想定している。

受け入れ先移管までに新コンソーシアムが行う具体的作業（システムの構築を中心に踏まえた場合）の手順は、将来的に下図のような形になると思われる。



3) 根本的な課題の整理

今後のアーカイブ推進は、以下の根本的な課題を新コンソーシアムで検討し、少しずつ固めながら前進をしていくことになる。

①保存先はどこなのか

専門的で確実な公的機関が最適と思えるが、そこが、いつ、何を、どれくらい、どのような形で受け入れるのか？

②何をどこまで収集・保存するのか

*これまでの経緯も含め、文化庁と国会図書館の協定において「放送（テレビ・ラジオ）」を調査研究の対象と位置づけているため、それ以外の媒体の脚本・台本処理をどうすべきか、別途枠組みのトータルな検討が必要となる。放送作家が映画も舞台も執筆している場合等、寄贈の中に放送以外のジャンルの脚本・台本が相当混在しているのが現状である。

*また、脚本家・構成作家が仕上げで印刷・製本された「決定稿」と呼ばれるものが保存に向けた基本ではあるが、「準備稿」（第1稿・第2稿等）や「撮影台本」「コンテ台本」「進行表」、また企画書等の周辺資料のどこまで保存するのか、大きな論点である。

*収集後、同じ脚本・台本が重複して存在する場合の扱いはどうするか？（書き込みの有無による優先等）

*放送年、出演者名等が不明な場合。

*受け入れ側の想定をかなり超える数の脚本・台本が寄贈されてきた場合、「選別」を含めてどう対応するのか？

③現物とデジタル化の関係とその扱い

脚本・台本の保存はデジタル化が基本だが、いつどこでそのデジタル化を行うのか。その後、脚本・台本の「現物」の扱い。およびデジタルデータのみの資料の移管について。

④今後のデジタル保存のあり方。

日々増えていく今後の放送脚本・台本のデジタル保存体制をどう考えるか。

⑤個人情報への対処

元々印刷されている個人情報（電話番号等）の消去方法等の扱いについて。

⑥権利処理の方法は

関係者が納得できる権利処理の合理的なフォーマットの策定が必要となる。

4) 権利処理に関する基本

権利者に対して、権利処理のパターンごとに合理的なフォーマット策定に向けた検討を新コンソーシアムで行う（以下基本的な事項のみ）。

①脚本家・構成作家に対して

脚本・台本に関する脚本家・構成作家の「公表権」は、番組の放送をもって「公表」とは言えないので、公開にあたっては脚本家・構成作家の許諾を得る方法を検討する。（著作権管理団体への一括権利処理も考慮）

デジタル化にあたって「複製権」の許諾を得るのか検討する。

②原作者に対して（脚色ドラマ等の場合）

デジタル化および公開にあたって、複製・公表に関する許諾を得る方法を検討する。

③放送局・制作会社に対して

脚本・台本は放送局・制作会社の所有物（現在は、配布先には「貸与」とされている）であるため、寄贈受入れ・移管・公開等にあたり放送局・制作会社から現物としての脚本・台本の所有権に関して合意を得る方法を検討する。

④書き込みをした人（多くは寄贈者）に対して

脚本・台本に書き込みがある場合、公開にあたっては書き込みをした人に「了承」を得る方法を検討する。ただし、書き込んだ本人からの寄贈の場合は、公表について同意したものと推定される（著作権法18条）。

5) 公開・活用の想定

公開・活用のあり方・可能性に関しては、今後、新コンソーシアムにおいても十分な議論と検討が必要である。それは脚本・台本アーカイブズの意義を補強し、あるいはそれがこのアーカイブ推進の「価値」と重なっても見える可能性もある。

一方、著作権と大きく関係してくる部分であり、その利活用法が利用者にとって「無料」かどうかという議論にも展開されることを鑑みると、公開・活用について幅広く捉えて議論を深めていくことのすべてが収集・保存の活動の「推進」に繋がる訳ではない。

公開・活用の基本型は、【1】教育・研究利用

【2】広範な一般向け公開・活用【3】制作関係者によるプロ仕様の活用の3つが考えられる。ここまでの経緯を踏まえて考えると、脚本アーカイブズの公開・活用の基本は、保存受け入れ先となる公的機関の館内での一般向け閲覧（無料）をどう現実化するかを基本としつつ、「研究・教育利用」の可能性の検討にまずは力点を置くべきであろう。

Ⅲ 今後の活動工程について

今後の推進母体となる新コンソーシアムでは、あらためて「脚本・台本アーカイブ活動の具体的な到達目標」に関し検討・設定することになる。そこにおいて、収集済み・収集予定の脚本・台本の受け入れ施設への移管による保存。および施設内での館内閲覧（デジタル端末での「公開」）が基本になると考えられる。

脚本・台本アーカイブ活動の今後は、現時点において見通しをつけることは難しいが、このプロセスがある程度形作られるには、「最低3年～5年」のスパンを要するものと推測される。

新コンソーシアムにおいて、その活動の出口も見通した想定中期プランを策定しつつ、来年度以降、段階に応じてプランの修正を図っていく必要がある。

まとめ——今後に向けて

以上、全4回の会議の中で検討された項目、および、来年度以降の「新コンソーシアム」にて議論・解決すべき点を事務局として列記した。

ステップアップした新組織「新コンソーシアム」を母体として、著作権専門家等の有識者・関係者に多く活動にご参加頂く事で、課題を一義的に検討・処理する。それと並行し、散逸の危機に瀕している「第1期」の脚本・台本を救出する作業を実施し、劣化が進む資料についての保護・保全も行っていく予定である。

■コンソーシアム会議実施（於・東京大学）

第1回 平成23年7月4日

第2回 平成23年9月21日

第3回 平成23年12月1日

第4回 平成24年2月23日

（コンソーシアム事務局・石橋映里）

【コンソーシアムの全出席者名簿】

所属	氏名	役職
東京大学	吉見 俊哉	副学長 教育企画室長
国立国会図書館	大塚 奈奈絵	収集書誌部 主任司書
協同組合 日本脚本家連盟	金子 成人	理事 著作権部長
	柳井 克朗	事務局長 著作権部
協同組合 日本シナリオ作家協会	伴 一彦	常務理事 著作権部長
	佐伯 俊道	常務理事
	藤田 伸三	理事 著作権部
	丸田 香織	事務局 著作権担当
社団法人 日本芸能実演家団体協議会	大林 丈史	専務理事
日本放送協会 (NHK)	若泉 久朗	制作局 ドラマ番組部長
	浅野 加寿子	放送博物館館長
	磯崎 咲美	放送博物館 チーフプロデューサー 学芸員
	阿部 康彦	ライツ・アーカイブスセンター エグゼクティブ・ディレクター
社団法人 日本民間放送連盟	竹内 淳	ライツ・コンテンツ部長
放送人の会	北村 充史	事務局長
財団法人 放送番組センター	鈴木 豊	事務局長
	笈 昌一	業務部長
社団法人 日本放送作家協会	市川 森一	会長
	田中 格	理事長代理・常務理事
	香取 俊介	常務理事・脚本アーカイブズ特別委員会委員長
	三原 治	理事・脚本アーカイブズ特別委員会委員長代行
	石橋 映里	脚本アーカイブズ特別委員会副委員長
一般社団法人 日本動画協会 (オブザーバー)	植野 淳子	プロデューサー
	山脇 壯介	デジタルアーカイブズ事業 アシスタントコーディネーター
総務省 (オブザーバー)	喜多 桂	情報流通行政局 情報通信作品振興課 (コンテンツ振興課) 企画係長
	白石 牧子	情報流通行政局 情報流通振興課 制度係長
文化庁 (オブザーバー)	片桐 由紀子	文化部芸術文化課支援推進室メディア芸術交流係長
	澤浦 侑喜	文化部芸術文化課企画調査係
	三浦牧人	文化部芸術文化課メディア芸術交流係
三交社 (オブザーバー)	松本和正	常務取締役
	松澤大資	企画開発室長
東京大学大学院情報学環	玉井健也	特任研究員
	滝浪佑紀	特任講師
	中路武士	特任研究員

脚本データベース・プロトタイプ

将来的に脚本・台本の収集・保存がより広範に行われること、同時に全国の脚本データベースとの連携などを想定して、脚本検索システムのプロトタイプを作製。日本脚本アーカイブズデータベースの検索システムでも実績のある株式会社キューズ・クリエイティブに作製を依頼した。

1. トップページ



以下の項目をトップページに設置

- ①検索窓（任意文字による検索、あいまい検索機能）、詳細検索&検索ヘルプへのリンク
- ②主題歌&ロケ地情報へのリンクバナー
- ③検索絞り込み項目（サイドバー）
 - ・管理団体で絞り込み：日本脚本アーカイブズをはじめ、脚本所蔵図書館・団体など
 - ・メディアで絞り込み：ラジオ、テレビ、映画、舞台など
 - ・年代で絞り込み：1930年以後10年単位で表示
 - ・ジャンルで絞り込み：ホームドラマ、時代劇、アニメ、ドキュメンタリーなど
- ④アクセスランキング
- ⑤中身が読める脚本案内
- ⑥ランダムピックアップ脚本
- ⑦SNS表示：twitterタイムライン

2. 一覧表示

検索でヒットした作品の一覧を表示。

3. 詳細表示

花の嵐	
メディア	テレビ
ジャンル	時代劇 歴史ドラマ
シリーズ	連続
シリーズ名	大河ドラマ
サブタイトル	花の嵐
脚本	池田 義一
放送開始日	1994年/2月
放送終了日	2000
放送回	20/45
放送時間	第22話
制作局	NHK
制作会社	NHK
出演	三田 佳子、森川 薫、佐野 周二、平 泉、野村 浩成、杉山 昌久、山崎 豊子、山崎 豊子、山崎 豊子、山崎 豊子、山崎 豊子
脚本	池田 義一
プロデューサー	木田 幸治
音楽	三枝 成徳
美術	山崎 豊子
衣裳	山崎 豊子
ヘアメイク	山崎 豊子

- ①表示項目：メディア・ジャンル・シリーズ（名）・サブタイトル・脚本家・放送日・放送開始&終了時間・放送回・制作局・制作会社・出演者・プロデューサー・スタッフ・主な舞台設定 他
- ②「脚本を読む」（下記内容閲覧）へのリンクバナー
- ③「テレビドラマデータベース」へのリンクバナー
- ④管理団体表示

4. 脚本内容閲覧



デジタル化した画像をドラッグしてページをめくり、脚本を読むことができる。

今後の課題

国内の脚本データベース一括横断検索機能の強化、書き込みを含む内容閲覧（脚本・台本のデジタル化）における著作権等の権利処理、タイトルなどのテキストデータ一覧表示機能の必要性、ジャンル分類などを含むデータ入力ルールの策定等々、また、アクセシビリティ、ユーザビリティ、データ管理などについていくつかの問題点が浮上。今後、それらを研究、修正していくことによって、より充実した脚本データベースの実現を目指したい。
(清水喜美子)

研究調査部

■総論	「眠る脚本・台本たち」……………	73
■取材	世田谷文学館……………	74
	実践女子大学図書館 向田邦子文庫……………	75
	市川市文学プラザ……………	76
■オーラルヒストリー	永 六輔さん……………	78

「眠る脚本・台本たち」

■全国の放送脚本・台本の残存数

脚本・台本の残存状況を把握することをねらいに、アンケート調査と電話問合せ、現地取材等を今年度行った。

全アンケート件数はおよそ1万件。うち回答率は平均1割と少ないが、回答がない分の多くは目立った脚本・台本の所持がないものと推定できる。公的機関等に脚本・台本が保存される場合には、ほとんどの回答者がそこに「寄贈してもかまわない」と答えていることが一番印象的であった。

また全国の公共図書館(FAX 不達除く 1900 館)へのアンケート結果では、102 館が脚本・台本を所蔵し、その数が 10000 冊もあるという状況が判明し驚かされた。回答が半数あったことを特記するとともに、ご協力に深く感謝したい。

今回把握できた脚本・台本数は、図書館や放送局所蔵も含め 30 万冊以上。そのうちおよそ 12 万 9 千冊(日本脚本アーカイブズ、放送ライブラリー保管分含む)がアーカイブ化にあたり寄贈可能(収集可能)と想定できるものであり、この数が今後の最低ベースになると考えられる。

これ以外に、歌手・タレント等の所蔵についての追加の調査や、日本脚本家連盟への著作権信託者(遺族も含む)の継続調査も必要である。また団体に所属していない作家、プロデューサー、ディレクターへの調査は難しい状況にある。何らか個別の呼びかけを行う等、今後のアーカイブ活動に期待したい。

図書館・文学館には目録やデータベースが充実しており、利用者が検索する上で有効である。脚本・台本が、図書館と博物館の中間的な資料であることから、通常は一般の図書とは別分類で整理している場合が多く、分類方法や記載項目も各館で工夫されていることがわかった。大学図書館にもゆかりの作家から寄贈されている場合があり、

それも何らか参考になると思える。

今回の調査では、今所持している人が脚本・台本を「寄贈をしたい」という意思が明確に現れており、アーカイブ活動の重要性を改めて実感した。

(石橋映里)

【放送局・全国の施設所蔵(寄贈の可能性無し)】

	所蔵数	書誌データ	備考	
放送局	NHK アーカイブス	38000	完備	
	NHK 放送博物館	7900	完備	「1タイトル1つ」とカウント。実総数は数倍
	日本テレビ	各制作部に保管あり		映像のライブラリー部での保管は無し
	テレビ朝日	2800	完備	1959年~の古い脚本のPDF3500件
	TBS	27000		局制作のみ局内の保管
	フジテレビ	60000		アーカイブ運用部担当
	テレビ東京	—		脚本・台本保管なし
	毎日放送	2600		一部脚本アーカイブズに寄贈
	各ラジオ局	—		脚本・台本保管なし
図書館・文学館	全国公共図書館	10000	ほぼ完備	102館が所蔵
	その他文学館等	39200	一部	
	大学図書館等	50000		早稲田大学等

【番組関係者等(寄贈の可能性のあるもの)】

	回答数	所蔵数	寄贈の可能性	
放送作家	日本放送作家協会	120	43000	○
	日本脚本家連盟	—	来年度	—
	日本シナリオ作家協会	67	4100 (映画除外)	○(一部×)
スタッフ・出演者等	放送人の会	30	3600	○
	日本映画テレビプロデューサー協会	30	17400	○
	日本映画監督協会	23	1650	○
	日本映画撮影監督協会	10	500	○
	日本映画テレビ技術協会	40	5000	○
	日本映画テレビ照明協会	7	400	○
	日本映画・テレビ美術監督協会	30	370	○
	音楽事業者協会	16	1750	○(一部×)
	日本歌手協会	28	200	○
	日本映画俳優協会	4	400	○
	全日本テレビ番組製作社連盟	18	650	○(一部×)
日本映画テレビ録音協会	3	70		
放送ライブラリー		10000	○	

合計 およそ 8万 9000 冊

世田谷文学館 (公益財団法人せたがや文化財団)



世田谷文学館への取材は平成 21 年度以来、2 度目。以前は企画展ほか館内施設や運営についてお話を伺ったが、今回はライブラリーの蔵書やその管理について、重点的に取材させて頂いた。

世田谷ゆかりの作家たちなどからの寄贈資料を所蔵しているのが特徴である。所蔵資料は約 9 万点。ライブラリー内で閲覧することができる。館外貸出しは行っていない。

そのうち台本所蔵数は約 5500 点（加えて未登録・未整理が 300～400 点）。岩間芳樹、上條逸雄、須川栄三、小林正樹、成瀬巳喜男ら世田谷区ゆかりの監督、脚本家の映画や TV ドラマの台本である。資料はデータベースに登録され、その分類項目は以下の通り。「資料番号」「資料名＝タイトル」「分類名＝台本・シナリオ」「副題（サブタイトルや決定稿など）」「資料作者名＝脚本家」「種別＝台本」「発行所＝放送局・制作社」「発行日＝台本の制作日」「付記＝放送日や書き込みの有無など」「点数」等。

データベースの入力については、細かくマニュアルが作成され、システム化されている。

現物はオリジナルの透明カバーを付け、その上にラベルを貼付して資料番号を表示。

特記すべき点は、文学館ならではのコレクションである。横溝正史の直筆メモや、江戸川乱歩の

書簡など、思わず感嘆の声をあげてしまう資料を次々披露して頂いた。自筆資料などの特別閲覧は状態などにより、予約制で条件付き閲覧が可能である。

資料は厳重に耐火式の収蔵庫に保管され、湿度・温度調節が完備されている。

また一部の貴重な資料をデジタル化して館内のパソコンにより閲覧できるシステムがあり、学習用資料としても有効である。

世田谷という土地柄を思わせる、ゆったりとした空間と展示スペースの充実は、まさに文学館の王道といえる。一日滞在しても飽きる事のない場所である。

(石橋映里、清水喜美子)



書庫



ラベル

実践女子大学図書館 向田邦子文庫



住所 〒 191-8510 東京都日野市大坂上 4-1-1
TEL:042-585-8829
H P <http://www.jissen.ac.jp/library/>

実践女子大学図書館概要

実践女子大学図書館は、大学教育の支援機関として、学術・研究に必要な資料を収集・管理し、利用者に提供しています。約40万冊の図書と約4000タイトルの雑誌を所蔵。コレクションとして、「黒川文庫」、「常磐松文庫」、「山岸文庫」などの国文学関係の古典籍、オスカー・ワイルド関係資料コレクションの「本間文庫」、学園創立者の資料を中心とした「下田歌子関係資料」や、卒業生であり直木賞作家の「向田邦子文庫」などがあります。

向田邦子文庫とは

ご家族のご厚意と、関係者の尽力により昭和62(1987)年に、実践女子大学図書館の一隅に開設されました。南青山のマンションに残された旧蔵書を基に著作(図書の初版、初出掲載雑誌)、シナリオ類、参考文献(関連記事、図書)を収蔵しています。

〔向田邦子文庫のアーカイブ情報〕

卒業生で直木賞作家の向田邦子の旧蔵書(図

書1269冊、雑誌143冊)を中心に約4300点からなるコレクションです。旧蔵書のほか、自筆原稿、シナリオ(ラジオ・テレビの台本)などが中心です。図書館HPに「向田邦子文庫」として公開しており、向田邦子に関するニュースやリンク、資料の検索も可能です。

脚本・台本資料は森繁久彌氏から寄贈された『森繁の重役読本』の台本の第1～2448回までを所蔵しています。因みに、番組の音源はTBSに9本残っているそうです。

その他には、『ダイヤル110番』『七人の孫』『寺内貫太郎一家』『あ・うん』『父の詫び状』『男どき女どき』『鮎』『色はにおえど』『顎十郎捕物帳』など。

向田邦子プロフィール

昭和4(1929)年東京府荏原郡世田ヶ谷町若林(東京都世田谷区)に生まれる。父親の仕事の関係で宇都宮・鹿児島・高松・仙台などに転居を重ね、転校6回。この間、高松高等女学校から目黒高等女学校に編入学し、昭和22(1947)年実践女子専門学校(実践女子大学)国語科に入学し母方の祖父母の家に下宿しました。

卒業後、50年財政文化社の社長秘書として入社し、父の勤務する東邦生命の社宅から通勤。52年雄鶏社「映画ストーリー」編集部に入り記者として従事する傍ら、市川三郎氏のもとで脚本を学びました。59年頃からアルバイトでラジオドラマの台本を書き始め、途中からテレビドラマの脚本に転向しました。60年シナリオライターへ本格的に歩むため、雄鶏社を退社し、フリーライターとして独立。62年TBSラジオ『森繁の重役読本』の台本執筆。

75年乳癌手術。78年初のエッセイ集を刊行。80年小説新潮に連載した『想い出トランプ』の短編小説「花の名前」「かわうそ」「犬小屋」で第83回直木賞を受賞。81年8月に台湾で飛行機事故。享年51歳。没後、『向田邦子全集』全3巻、『向田邦子TV作品集』全11巻が刊行。また、83年優れた脚本に与えられる「向田邦子賞」が創設。

(三原 治、清水喜美子、石橋映里)

市川市文学プラザ

脚本・台本調査

公立文学館が主体となり、固有の作家のコレクションを作成している例として、取材に伺った。所蔵している資料類は主に二種。①脚本家・水木洋子氏の作品ほか、②相撲や映画評論でも有名な放送作家・小島貞二氏の所蔵資料。



水木洋子コレクションについて

水木洋子氏（1910～2003年）は「ひめゆりの塔」「裸の大將」「純愛物語」などヒット映画で知られる脚本家。ラジオ・テレビドラマ、舞台の脚本・台本など数多く手がけた。1947年から市川市に邸宅を構え、亡くなるまでこの地で過ごした。自宅や自筆原稿など一切の財産は、市川市に寄贈。「市川市水木洋子文化基金」を設け、邸宅の公開や企画展、映画鑑賞会などが行われている。邸宅にあった膨大な資料の初期段階での整理に尽力したのが、市民から募った会員制の組織「水木洋子市民サポーター」であることも興味深い。

■所蔵資料

水木氏の脚本・台本その他、自筆原稿や創作メモ等の周辺資料や、水木氏に関わる新聞記事も保管されている。企画展の図録「生誕100年 脚本家水木洋子」の中に図書・雑誌記事など、出版さ

れた著作物の目録を掲載、撮影台本や自筆原稿などの貴重資料は整理中のものもあるが、館内利用の資料目録にリスト化されている。

■分類保管・管理について

*目録は作品ごとに仕分けて、ファイルは作品の五十音順に保管。

映像・録音資料も保存している。生活資料や写真等、作品に関わるか不明なものまで一括寄贈を受けているので、目録化に時間がかかり、現在は映画とテレビの整理が終了した状況。水木の資料については、映画とテレビ資料を2人で約2年間かけて分担入力。

*データ管理については、データベースを「Access」ソフトで作成。職員自ら製作・管理しているため、使い勝手もよく、参考にするべき事例といえる。データベースの一般公開については、将来的展望として考えるが現在は未定。所蔵の中で一番古いものは、昭和13年のラジオ台本。作家から直接寄贈を受けているため、印刷台本にたどり着くまでの構想メモ、生原稿などの成立途中の資料が多く残されているのが特色である。

*保管状況については既成の中性紙の箱を購入し作品ごとに一括保管している。区分は「甘い汗」＝「エ64」だと、映画の制作年64年という表記。タイトルは「あ」で引ける。台本はポリプロピレンの袋に中性紙の紙を入れて、シールを貼って情報を記載。

台本などの整理で注意している点は、中身を時系列で管理している点。早い方からA版、B版、C版と注記を付して識別している。

作品ごとに保管することで、他館から特定作品に関する資料の問い合わせがあった場合、スムーズに対応できる。以前は、封筒に直接入れていたが「資料のへり」から傷んでくるため現在の袋を使用。

*データは、1冊の本の情報が1データ。テレビだと映画と違って、「第何回」「サブタイトル」という項目があるため、1資料1データの方法で分類。俳優のデータもこの中に含めると膨大なものになるため、印刷物としては必要最低限の簡易版を作成、館内利用目録として公開している。



資料の保存箱

*日時の記載について

放映された年月日、資料が作成された年月日など多様な日時情報がある場合もあり、現在は「成立・発行日」「放映日」「(再版の場合のみ)版刷日」の三種類が記載されている。

*タイトル

番組のタイトルと1回ごとのサブタイトルを記載。その他、台本ならではの準備稿、決定稿という順番の表記も入力している。タイトル、サブタイトルが仮題など表記も様々。台本の形をしていても「企画書」であるとか、表紙ではわからないものは備考に詳細情報を記載している。

小島貞二氏の資料について

小島貞二氏(1919～2003)は1947年より市川市に居を構え、没するまで55年余を市川市で過ごした。寄席と相撲資料のコレクターとしても有名で、コレクションの中には幕末の寄席資料など貴重な物もある。放送作家として漫才など同世代

の演芸の台本を執筆。所蔵もバラエティー系統の台本が多い。監修に携わった五代目古今亭志ん生のドキュメンタリーや解説者として出演した番組の台本も多数ある。所蔵原稿類は現在整理中だが、2009年に開催された企画展「寄席と相撲が好き 小島貞二の世界」の図録には、貴重資料などが掲載されている。

■デジタル化の可能性

将来的には検討したいが、肖像権や権利関係が問題なので館内での閲覧にとどまるのではないかとのこと。

■地域密着型のアーカイブ施設として

市川市ゆかりの文人は他に井上ひさし氏や永井荷風氏が挙げられる。市川市文学プラザでは「文学館」という枠にとらわれず、映像メディアをフルに活用した展示や企画展を開催している点が新鮮であり、活気のある施設の印象を受けた。脚本・台本のアーカイブと映像や作品にまつわる資料が共に保管・公開されることが利用者にとって一番望ましいことである。また地域の住民サポーターが文化事業に関わる「地域密着型のアーカイブ」の側面は参考にすべきものであり、非常に有意義な取材であった。

(石橋映里、南條廣介)



企画展「水木洋子と詩歌」市川の詩歌びとたち

放送作家は3つの流れから始まった。 永 六輔さん



撮影：中井征勝

■プロフィール

1933年東京浅草生まれ。放送タレント、作詞家、作家。中学時代にNHKラジオ「日曜娯楽版」にコントを投稿して以来、放送の仕事に関わり60年以上。現在は、TBSラジオの「土曜ワイドラジオTOKYO永六輔その新世界」「誰かとどこかで」のパーソナリティとして出演。

■トリロー、ムーラン、満洲

——放送作家の源流とは？

初期の放送台本のグループというのは、全部で三つあって、ひとつは、三木鶏郎さんのトリローグループ。そして、新宿ムーランルージュの文芸部の中江良夫さん、小沢不二夫さんたち。もうひとつは、満洲の存在。戦前、戦中、満洲に放送局があって、森繁（久彌）さんはそこにいたんです。そして帰ってきてムーランルージュに入ったんです。

ムーランルージュに若い頃、学生の頃にいた人

で、放送作家協会にいる人はいると思うよ。ムーランに関わった人、放送台本を書いた人。阿木翁助さんがムーランルージュですね。阿木さんはその後、日本テレビの常務取締役を務めました。窪田篤人さんもムーラン。その三つの源流を掘り起こすと面白いですよ。

僕も鶏郎さんのところにはいたけれども、学生で一番の若手だったからね。

——野坂昭如さんや五木寛之さんも、トリローグループ？

野坂さんはトリローグループです。鶏郎さんのところは、三芸プロ、三つの芸のプロ、ラジオとテレビと舞台に生きていました。鶏郎さんのところが潰れて、作り直したのが三芸プロでして、そこに五木寛之さんがいました。

前田武彦さんは鎌倉アカデミアでしたね。鎌倉アカデミア出身も何人かいますね。

戦前、中国東北部にあった満洲国には、満鉄調査部というのがありましたが、そこにもラジオ番組があったんです。

大陸進出した日本企業のスポンサーが付いて。日本ではなく満洲でやっていたわけ。森繁さんは、満洲の頃は満洲電電（NHK）ですね。満映という映画会社もありました。森繁さんたちのボスが、自殺した甘粕正彦陸軍憲兵大尉。関東大震災のときに何人も革新系の人を殺した人。短期の服役後、日本を離れて満洲に渡り、関東軍の特務工作を行い、満洲国建設に一役買った。満洲映画協会理事長を務め、終戦直後、服毒自殺した。山口淑子（李香蘭）さんもこの頃の話は詳しいですね。

楠トシエさんも、よくご存知のはずですよ。楠トシエさんというのは、昭和26（1951）年のムーラン解散前後から、以前より付き合いのあった三木鶏郎さんの誘いでNHKのラジオ番組「日曜娯楽版」に出演して、一躍全国区の歌手になりました。昭和28（1953）年、25歳のとき、「NHK専属タレント第1号」。その後も、トリローグループの一員として、テレビ・ラジオ出演をこなし、「お笑い三人組」（NHKラジオ1955年11月 - 1960年3月、同テレビ1957年—1966年3月）、「ひょっ

こりひょうたん島」(同、1964年—1969年)、「おはよう!子どもショー」(日本テレビ、1965年—1970年代)など、多数の番組に出演しました。黒柳徹子さんらとともに「テレビ女優第1号」とも呼ばれていました。とにかく、ムーランから鶏郎さんのところへきて、CMソングを片っ端から歌っていましたね。

——日本放送作家協会が出来るきっかけは？

ムーラン、トリローグループ、満洲と、言ってみればバラバラで派閥のようなものなんですね。あの人はムーラン系だとか、あの人は鶏郎グループだとかね。そんな中でみんなで遊ぼうというのが、東京ライターズに繋がるわけです。東京ライターズには前武さんもいるし、ムーランも来てるし、満映もいるし、鶏郎グループも来ている。そして放送のスタッフが、ゴロゴロいるわけですよ。その集団が組織にしましょうと。その当時、三木鶏郎さんの弟さんの鮎郎さんが、組合関係に詳しく、「だったらこうすればいい」ということで、その流れが放送作家協会へ繋がるわけなんですよ。

——最初は、「みんなで遊ぼうよ」だったわけですね？

情報交換もあったのね。ムーランのギャラはいくらもらっているか。トリローグループはいくらとかね。遊ぶ方は、鮎郎さん中心で熱心でしたね。キノトールさんやドクトルチエコさんは、野球選手として参加していました。

——ムーランの阿木翁助さんたちは、野球には参加しなかったんですか？

野球が出来る人で、とりあえず集まりましたからね。作家の安部譲治さんなんかもいましたよ。その後、JALへ行って、その後塀の中へ行くわけですね。東京ライターズで野球をやっている頃は、新派、文学座、俳優座、民芸とみんな野球チームがありましたよ。

■永さんの放送の源流とは？

——永さん自身の放送や芸能の道へ進むルーツは？

6歳から落語や講談を聞くようになりましたか

ら、その頃から、そちらの世界への要素はありましたね。それで当時は、ラジオしかなかったんですよ。そして浅草生まれの浅草育ちですから、長屋に落語家はざらにいたの。今でも自宅で若手の落語会をやっていますが、当時からやっていたからね。親父が本堂を開放して、落語会を開いていました。

子供時代に戦争が激しくなるわけですが、ラジオは聴けますから。といっても軍艦マーチとニュースばかり。落語はダメですからね戦争中は。クラシックか能狂言と言ったその手のものしかないですからね。クラシックもドイツやイタリアは敵性でなければ大丈夫でした。

——初めて映画を観たのは？

最初の映画は、疎開先の上田中学で終戦後にアメリカ映画を観ています。13歳の頃。

——その頃は、疎開先の上田ですね。

昭和22(1947)年に東京の方に戻ってきて、早稲田中学。その頃は自分で鉱石ラジオを作って聴いていました。鉱石ラジオを作って初めて聴いたのが、リチャード・ロジャース作曲のミュージカル「南太平洋」の中の「魅惑の宵」。アメリカの音楽って何て楽しいんだろうって思いました。当時、鉱石ラジオから流れてくるのは、進駐軍放送で電波が強いから入るのね。NHKも勿論やってますが、進駐軍の放送は日本だけではなく東アジア全体に飛んでいるわけですから。北朝鮮の平壤放送が聴こえてくるようなものですよ。

——テレビとの出会いは？

ラジオ放送に関わっているうちに、下のスタジオで何か変なことをやっているってことになって、それがテレビの実験放送だったわけです。それで覗きに行きました。でもそのときにラジオに画が付くなんて想像もできなかった。説明されても、まるで分からなかったですね。テレビという言い方はしないで「テレビジョン」でした。それが高校3年です。その頃、民放ラジオ局も開局されていきます。その前にNHKの「日曜娯楽版」が潰されて、当時は作家がいないから、「日曜娯楽版」のメンバーがTBS、文化放送、ニッポン

放送、三局ともカバーしたんです。

——「日曜娯楽版」にはどれくらいのメンバーがいらしたんですか？

プロの作家とコントを投書するアマチュアメンバーの2グループあって、アマチュアの方は、大変な人数でしたが、コントを選んだりするプロの作家が10人ぐらいでしょうか。フランク馬場という人が、これは直せとか、放送するとか、その消されている台本が愛宕山の放送博物館にあるはずですよ。

——「日曜娯楽版」の音声テープ（番組）は、愛宕山に残っているのでしょうか？

残ってないですね。聞いたことがない。
（編集部注：正確には何本か残されています）

——永六輔と名乗り始めたのは、どの番組からなのでしょう？

私は名乗っていない。前のスタジオで、古賀さと子さんというとても人気のある童謡の歌手がいて、番組をやっていて、その番組の中でガヤというのがあって、その中に「六輔」という役がありまして、「六輔は永ちゃん」ということになりました。それがいつのまにか六輔になってしまったんです。面倒くさいからそのまま今日にいたるわけです。19歳ぐらいの「日曜娯楽版」の頃に、ニックネームみたいに六輔、六輔と呼ばれはじめたんです。ラジオの頃は、名前なんて気にしてませんでしたから。当時、番組の最後に名前をインフォメーションするのは「三木鶏郎」さんだけでしたね。

その後、いろんな番組をやるようになって、放送台本を毎日2本ずつ書いていました。日本テレビだけで1週間に10本の番組を書きとばし、寝るのはいつもスタジオの片隅や、リハーサルルームでした。21歳の頃、その年の末、同時刻にNHK、TBS、LF、QRと、どこの局をまわしても私の台本を放送しているというイタズラもやりましたね。

——深夜放送は「バックインミュージック」でしたね。

TBSの「バックインミュージック」をやっているときに「土曜ワイドラジオTOKYO」が始

まるんですよ。あの頃は朝から夜までずっとTBSのスタジオにいましたね。土曜日は朝から深夜までTBSから声が聞こえない時間が少ないと言われていました。

——永さんは、弟子というか一派を築かなかったのは、何か理由があるんですか？

場所の提供だけです。事務所で蕎麦屋のものは出前をとっても払うからっていうと、いつのまにか溜まり場になって、大変なことになったんだよね。師匠・弟子という関係はないです。

——永さんに影響を受けている人は一杯いますよね。放送作家の高田文夫さんや喰始さんがそうですが、逆に永さんに師匠はいなかったんですか？

一杯いますよ。三木鶏郎さんでしょ。宮本常一さん、安藤鶴夫さん、武智鉄二さん、渋谷天外さん、秋田実さん、そうした先輩はみな師匠ですね。古典芸能の先生が多いんです。安藤鶴夫にしても武智鉄二にしてもね。

——「昨日のつづき」は最初から、台本がなかったんですか？

1959年、「昨日のつづき」ラジオ関東の開局前夜祭で放送しました。そのときから台本がありませんでした。この番組もすぐ辞めましたけどね。私が最終回までやったのは「夢であいましょう」だけなの。あとはみんな喧嘩して途中で辞めています。奇跡的に続いているのが「誰かとどこかで」（TBS）。遠藤泰子さんと50年になります。

——番組を降りるのでも有名です！

「番組とデモと、どっちを取るんだ？」って言われて「デモへ行きます！」て調子で、すぐ辞めちゃいます。ということで、本日もここまで。

——ありがとうございました。

（奥山侑伸、三原 治）

収集管理部

■ 総 論	脚本アーカイブズの礎となる脚本・台本 ……………	8 3
■ 報 告	寄贈脚本・台本の移管準備作業経緯 ……………	8 7
	脚本展の歩み ……………	8 9
	寄贈脚本・台本 集計報告 ……………	9 0

脚本アーカイブズの礎となる脚本・台本

今年度は二十数人の方から脚本・台本・資料を約5,000冊ご寄贈いただいた（平成24年2月10日現在）。その結果、脚本アーカイブズが活動した約7年間で50,000点余の脚本・台本・資料を所蔵することになった。

今年の特徴としては、あらゆる分野の人たちが声をかけて下さり、ご寄贈下さったので、今となっては本当にもう目に触れることも難しいと思われる脚本・台本等が集まって来たことだ。

それらの寄贈本は、例年通り書誌情報を入力して箱詰めをした。一方で、今年は昭和55年（1980年）までの脚本・台本を抜き出し、別箱に詰め直した。昭和55年までというのは一つの目安としてである。それ以前はVTRのコストも高く、局でも映像保存があまり行われていなかったもので、脚本・台本を保存することが殊更に重要だと考えたからである。保存をして来た梅田図書館の倉庫（閉架書庫）から、約2万冊を取りだした。この移管作業については、「寄贈脚本・台本の移管準備作業経緯」の項で詳しく報告する。

この他に、戦前～昭和27年までの脚本を中性紙の袋に入れ直し、中性紙の平箱に。昭和28年～33年までの脚本も中性紙の袋に入れ直し、中性紙の夫婦箱に。計1,500冊詰め直し、足立区の生涯学習センターの5階アーカイブズ準備室に保存。昭和34年～39年までの脚本6800冊は被せ蓋付き段ボール箱に入れて、中央図書館1階の閉架書庫に保存。こうして年代別に種々の箱詰めされたものを、現在3ヶ所に保存してある。これによって、今後、他の保存庫や他の機関に移管することがあった場合、作業がスムーズに行われることになるだろう。

【演じる人たちから】

女優 藤村志保氏の美しい脚本

デビュー作は島崎藤村原作の「破戒」の志保役。そこから芸名がつけられたという藤村志保氏。背筋がきれいに伸びて、たおやかに美しい藤村氏から576冊の脚本を寄贈していただいた。

大映映画のスター女優として、特に時代劇で活躍後、テレビの世界にも進出。



昭和40年のNHK大河ドラマ「太閤記」で、ねね役を好演し、お茶の間でも人気者になる。以降、大河ドラマには、「三姉妹」「天と地と」「黄金の日日」「太平記」「風林火山」等々。他には「華麗なる一族」「花へんろ」「家族物語」「ひまわり」「だんだん」等、数えればきりが無い。

「自分が持っていて、逝ってしまえば捨てられてしまうかもしれない。それより、自分がしっかりしている内に台本の整理をしようと思って……」とおっしゃって、今回ご寄贈下さった。脚本には全て色とりどりの美しい包装紙のカバーが掛けられていて、本をととても大事に扱いながら仕事をして来たことに感銘を覚えた。これから先も、これらの脚本が大事に扱われていくことを願う。

青春スター 久保明氏

16歳で東宝映画の「思春期」で映画デビュー。以後、「潮騒」「あんみつ姫」「あすなろ物語」「青い山脈」そして、「大学の侍たち」等大学シリーズに多数出演し、青春スターとして活躍してきた久保明氏。また、黒澤明監督の「蜘蛛巣城」や、「椿三十郎」等にも出演。舞台では、「がしんたれ」等、長年、名作の主演や助演をして来られた氏からこれらの懐かしい脚本を79冊ご寄贈いただいた。

「ある時期に一度整理してしまっただけけれど、この度の引っ越しを機に、少し残しておいた脚本を寄贈しようと思って」と送って下さった。

時代劇俳優 故・鎌倉俊明氏

「19歳から俳優 大川橋蔵さんの付き人をして、役者をしていた主人の本を……」と、引っ越しを機に308冊の脚本とパンフレットやポスターを鎌

倉氏の奥様からご寄贈いただいた。

大川橋蔵さんといえば、銭形平次の役が目には浮かぶほど、茶の間に親しまれていたが、銭形平次の脚本や舞台台本が多数寄贈された。鎌倉さんはいつも共演されていた橋蔵さん亡き後は、杉良太郎さん、里見浩太朗さんの舞台に出演することが多かったそうで、こちらの舞台台本やパンフレットも多く送られて来た。ポスターは傷まないように広げて保存する方が望ましいが、現段階では保管場所の都合で、丸めて保管してある。

【制作現場に携わった人たちから】 華麗なる宝塚 山口志郎氏

珍しい脚本が芦屋から送られて来た。元関西テレビディレクターだった山口志郎氏からの52冊である。菊田一夫作ミュージカル・ロマン「霧深きエルベのほとり17場」他、宝塚歌劇団出演の放送台本と、楽譜やプログラム、そして舞台台本と舞台写真等をご寄贈いただいた。脚本アーカイブズでは、宝塚歌劇団の台本は、放送用も舞台用も初めての寄贈であった。

季節はずれのブルース 菅野高至氏

「退職したので本を整理しようと思って……」と、長年携わって来たドラマ脚本を、みかん箱7箱にきちんと整理されたりすと共にご寄贈いただいた。元NHKドラマプロデューサーの菅野高至氏。初期の脚本の中には、氏自らが岩瀬成子氏とともに構成したドキュメンタリードラマ「季節はずれのブルース」があった。ラジオドラマの部で、昭和53年度文化庁芸術祭参加作品だ。平成4年と5年には、2年連続で文化庁芸術祭作品賞をドラマで受賞している。氏が携わって来た放送作家には岩間芳樹、山田太一、早坂暁、中島文博、竹山洋、金子成人、平岩弓枝、富川元文氏等、枚挙にいとまがない。

ドラマと共に 嶋田親一氏

昭和29年(1954年)、ニッポン放送の開局に参加。フジテレビ放送開始(昭和34年)と共に異動となり、長年テレビディレクターとプロデューサーを務める。後にフジテレビ制作分離で、「新制作」社長になる。本社復帰後、調査役となり、昭和57年フジテレビを退社。以後はフリーの演出家やプロデューサーとなった嶋田親一氏。

映画界の花形女優だった佐久間良子氏をテレビ界に招き、「北野踊り」を制作、又、「にあんちゃん」や「三太物語」等、今も記憶に残る名作を手がけて来た。思い入れのある9冊の脚本を寄贈していただいた。



【脚本・台本の執筆者たちから】 故・水沢草田夫氏の脚本

昭和24年(1949年)放送のラジオドラマ脚本「隧道(トンネル)」他、6冊を水沢草田夫氏のご親戚の方からご寄贈いただいた。

「隧道」は和紙の厚紙に墨字でタイトルを書いて表紙にしてある。他には「笛吹川」「ゆびぶえ」「谷の音」等、昭和25年頃の貴重なラジオドラマ台本である。

水沢氏は、菊田一夫氏のお弟子さんで、「悲劇喜劇戯曲研究会」のメンバー。その水沢氏に私淑していたのが劇作家の小幡欣治氏と言われている。

「バス通り裏」の故・須藤出穂氏

昭和33年(1958年)から5年間にわたってお茶の間の人気番組だった「バス通り裏」の脚本を書かれた須藤出穂氏のご遺族から341冊ご寄贈いただいた。

須藤氏は昭和20年8月、中野学校富岡で終戦を迎えると神田に戻り、東京大学に入学し、東大演劇研究会に入る。在学中からNHK専属ライターとなり、ラジオの脚本や構成番組を書いていた。名作劇場の「次郎物語」「坊っちゃん」「野菊の墓」を始めとした文芸物、又、時には「都会の谷間」のような世に訴えるドキュメンタリードラマも数多く手掛け、その作風は幅広いものがある。「仲よしホール・むさしの風雲録」は、昭和40年4月から41年3月まで97冊あるが、脚本の縁周りが赤黒く酸化してボロボロである。特に、天口やホチキスで綴じた側がひどく、手当てが必要だ。

又、元々はガリ版印刷の脚本で、激しく劣化したものをコピーに取り、数回分を合本にして、製本にした脚本もあった。「海の涯てに」（昭和32年）や「走れ源太」（昭和38年）等である。

最も保存に耐えるのは紙資料で、普通のコピー紙でも30年はもつと、東京文化財研究所保存修復科学センターの佐野千絵室長に昨年学んだことが想起される。個人ではマイクロフィルム保存が難しいだけに、こうして保存しておいてくれたことは有難い。

その他、たくさんの作品の中にはイタリア賞グランプリ受賞作「火の山～小磐梯より～」や民放祭優秀賞の「四季筑豊——山野炭住の女たち」「RKBテレビドキュメント」等がある。

優しさと気骨 深沢一夫氏

放送作家 深沢一夫氏から、206冊ご寄贈いただいた。子供達の涙を誘ったいじらしい少年の物語「母をたずねて三千里」。これは、昭和51年(1976年)の1月から12月までの週1回の1年間分のアニメ脚本で、96冊あった。ほとんどの回が2冊ずつあり、52回分、欠番なしで完全にそろっていて貴重なものだ。

そして、人間とは法とは一体何なのだろうと、常に見る者に問うた弁護士達のドラマ「判決」（昭和37年から4年の間に書かれた44冊）、その他にも有吉佐和子原作の「新・おんな大学」や、「とぼけた奴ら」「ある勇気の記録」、そして「われら弁護士」等。又、東映映画「太陽の王子」の脚本もあった。

多才な人 故・塚田茂氏

演出家、放送作家、作詞家、そしてタレントの塚田茂氏と言えば、「夜のヒットスタジオ」「シャボン玉ホリデー」「8時だヨ！ 全員集合」「お笑いオンステージ」等、テレビ番組史上に残る各局の名番組を立ち上げた人。

長野県の弟さんの家に保存されていた放送台本をご遺族の方から432冊ご寄贈いただいた。人となりについては87ページで奥山悦伸が書いているので、ここでは割愛させていただく。

直木賞作家 故・神吉拓郎氏の脚本

小説家であり、俳人、随筆家、そして放送作家の神吉拓郎氏の奥様から、脚本を1袋ご寄贈いた

だいた。奥様との間に入られて、労を取って下さったのは、元・毎日放送でドラマを担当していた丸谷嘉彦氏。

神吉氏が書かれた脚本に、毎日放送制作の「鳥よ……」（文化庁芸術祭参加作品）があった。その他には、原作が神吉氏で、田井洋子氏や宮川一郎氏が脚本を書いている作品もあった。

昭和58年、第90回直木賞受賞作「私生活」は、NHKで5回の短編ドラマシリーズとして放送された。脚本は香取俊介。

舞台衣裳デザイナー 五十嵐和代氏

劇団の舞台衣裳のデザインと制作を長年手がけてきた五十嵐和代氏から、台本を54冊ご寄贈いただいた。

氏は、劇団民藝に1970年代半ばに4年ほどいて衣裳を担当。それからイタリアに2年留学し、帰国後は青年劇場に13年間在籍。その後フリーになって、およそ20年間、現在も衣裳のデザインと制作をしている。

台本は、氏が民藝の青山の稽古場の倉庫を掃除していた時に出て来たもので、「芝居の勉強をなさい」と言われて、もらったものだそう。民藝の上演台本がほとんどだが、脚本家は秋元松代、久板栄二郎、飯沢匡諸氏がいる。チェーホフの「櫻の園」や「三人姉妹」は、宇野重吉氏が台本にしている。その他、翻訳物では、アーサー・ミラーの「セールスマンの死」や、ゴーリキの「どん底」、又、シェークスピアの「十二夜」等。芝居を勉強したい人にとってはたまらない台本の数々。ラジオ・テレビの放送台本ではないが、後世の人が脚本とは何かを考える上で貴重な台本だと思い、ありがたくお受けした。

【脚本・台本の周辺から】

脚本アーカイブズに送られてくる段ボール箱の中には、脚本・台本、それも表紙のないもの、中身が抜けているもの、そして、企画書、メモらしき紙片、領収書、私信等も入っている。そうしたものが紙の色も焼け、ほこりがついた状態で、脚本・台本の箱とは別箱に入れて送られて来る時がある。これは何十年も前に書かれた作品の周りに紛れてあった紙の断片であり、資料であったりする。ご遺族や遠い親戚の方たちが長年、小屋や倉庫、納戸、屋根裏部屋にあったものを整理する時

に、思案に余って一緒に送られて来たものだ。実際、そんな相談の電話も何度か受けている。私たちは、「捨てないで何でも送ってみて下さい」と言って来た。相手方もほとんどの方は、「いらぬものは捨てて下さい」と言って送って下さった。しかし、いざ箱を開けてみると、どうしたら良いか迷うような場面が多々あった。

協議した結果、ほとんどのものを、例え半端なものであっても、捨てないで保存して来た。今この時、決めるものではないと思ったからだ。日本の脚本・台本のアーカイブズの定義を決める時が来たら、その辺も自ずと決まってくるだろう。

これらのものは未整理のようであって未整理ではないのだ。アーカイブズを引き継いでいく者たちが思案して、脚本・台本の周辺整理の保存、保管の定義を決めていけば良いのではないか。昨年3月11日、収集保存部は、東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学の稲葉政満教授を講師に招いて、勉強会を開いていた。教授はこの時、「あなたたちは何年先を見据えて保存しようとしていますか。100年先ですか。300年に1度は関東大震災並みの地震が来るかもしれないと言われている。その300年ですか。それとも1,000年後を見据えていますか……」というようなことをおっしゃった。その直後、大きな揺れが来て、全員机の下に潜り、間もなく館内は完全閉鎖となり、全員退室となった。勉強会は中止となり、その後東日本の大惨事を知るにつけても、あまりにもそのタイミングは合い過ぎて、大自然界は私達に何を言っているのだろうか。アーカイブズとは何なんだろう。この一年特に考えさせられた。

【亡き田中・小山・菊田氏の生原稿】

生原稿の数々。これは実際に放送された原稿で、「BK放送（現NHK大阪）昭和25年3月14日」の日付がある。劇作家で新劇界の重鎮、田中千禾夫氏が書かれた「競馬」である。氏は岸田国士の新劇研究所に入り、文学座創設に参加。戦後数年して俳優座に加わる。劇作家でもある三島由紀夫が書評の中で、「岸田国士の最も本当の意味での継承者」と述べている。

放送用の生原稿「母の笛」が見つかる。劇作家、脚本家、小説家の小山祐士氏による。慶應義塾大学在学中は小山内薫に私淑。卒業後は岸田国士に

師事。昭和9年（1934年）に「瀬戸内海の子供ら」を発表。第2回芥川賞に決定と新聞に発表されながら、戯曲は対象外として取り消される。今ならどうなのだろう。昭和17年、NHK囑託となり、放送劇も書いた。戦後は、「泰山木の木の下で」等を発表。原爆や公害問題を織り込んだものを描写し続けた。



「競馬」「母の笛」
「姿なき犯罪」の生原稿

菊田一夫氏の生原稿「姿なき犯罪」。NHKラジオ実験室。昭和22年（1947年）4月30日PM9:30放送とある。ラジオ、映画、舞台の脚本・台本、そして小説、作詞と何でもこなし、数々の名作を世に送り出した氏の「鐘の鳴る丘」と同時期に書かれたもの。400字詰めライトブルーの罫線で、菊田一夫用箋と印された原稿用紙に52枚。最終ページには、「姿なき犯罪の作者しるす」とあって、「ラジオ実験室『姿なき犯罪』はその内容よりもラジオドラマとしての技巧の限界ぎりぎりを書いてみたいと思って執筆した作品ですからどうぞ誤解をしないでその気持でお読み下さることをお願いします。」とあり、研究者にとっては興味ある一文であろう。

ここに挙げた方々以外にもシナリオ作家協会会員の石川隆之氏からは345冊ご寄贈いただいた。その他多くの日本放送作家協会会員からご寄贈いただいた。

中には大変珍しいアニメ作品の絵コンテ 昭和36年（1961年）の田中澄江作「安寿と厨子王」、37年の手塚治虫、北杜夫作の「アラビアンナイト 素晴らしき冒険」なども含まれていた。

ここにすべての方々を列挙できなかったことをお詫び申し上げます。同時に、ご協力いただいたみなさま方には心から厚く御礼申し上げます。

（熊谷知津）

【喋る放送作家 故・塚田茂さん】

2011年の暮れに塚田茂さんの遺族の方から大量の台本（その他、資料、録音テープ、ビデオテープ etc.）が送られてきた。

塚田さんの胸を借りて勉強して来た私には懐かしくもあり嬉しくもあり恐れ多くもあり……である。段ボールを開けると、一瞬の内にタイム・スリップしてしまった。

放送作家の草分けの一人だが、勝手にバラエティーの一期生を決めると、永六輔、故・前田武彦、故・青島幸男、故・津瀬宏、野末陣平、野坂昭如、本来なら塚田茂と続く筈だが、塚田さんは日本劇場（通称ニチゲキ）の演出家だったので変り種だった。企画会議や打ち合わせの時などは、放送作家が数人いても塚田さんが大体年長なので会議のリードを取る事が多かったが、実はスタッフ全員が塚田さんの話を待っていた。口を開いたら立て板に水の如くアイデアが次から次へと出て来る。しかもその話が面白いのだ、兎に角面白

い。落語家も裸足で……と言うくらい、その話をベースにスタッフ全員で検討する。演出家の話ならではの具体的な話なので聞いている者の頭の中に映像が浮かんでくる。見事な進行だった。もう一つ、素晴らしい財産を放送作家に残してくれた。当時……否現在も日本と言う国は、アイデアや企画に対しての支払はなかなかしてくれず評価されない国である。塚田さんは例えそのアイデア企画が不採用でも、提出した分は対価の対象にする事をテレビ局に掛け合ってくれた。（あれから40年、まだスムーズな支払いとは言えないが……）それから塚田さんの放送作家としての企画会議のやり方は同時に新人作家の育て方の一つでもあった。塚田さんが喋り若者がチェックするこの方式で高田文夫、松岡孝などの有能な放送作家が育った。後半は番組に出て「ドンドンくじら」として人気もあった。バラエティー作家の一期生は何故か同じコースを辿っている。永六輔、前田武彦、青島幸男しかりである。懐かしい段ボールだった。（奥山侑伸）

寄贈脚本・台本の移管準備作業経緯

放送作家協会の脚本アーカイブズ特別委員会の活動が終了するにあたり、収集管理部の今年度の主な業務は、寄贈された脚本をいずれ他の機関に移管するための準備作業となった。以下、今年度行った作業の内容を時系列に沿ってまとめてみる。

■準備作業～保存脚本の確認

作業を始めるにあたって、現在、準備室・中央図書館閉架書庫・梅田図書館の倉庫と3か所に分けて保存している脚本の確認調査を行った。

ほとんどの脚本はリストに入力された後、箱詰めされ、封をしたまま保管されているが、中には過去6年間のうちに開催された脚本展への出品や他の研究のために箱から出されたものもある。それらの脚本が箱に戻されているかリストと照合しながら確認した。同時に封を開けていない箱も開け、リストと実物が食い違っていないのかを確認する作業を行った。5月から7月にかけて4回行い、保管されている約800箱を点検した。狭いス

ペースでの作業のため、中に入れる人数は10人が限度である。そのため、各回の作業人数は8～10名で4回という回数になった。確認作業と並行して、年



代が古いという理由で別の箱に移動した脚本・台本などは、現状に沿った形でリストを修正する作業も行った。

■古い脚本移動のための準備作業

学びピア・中央図書館・梅田図書館ともに耐震・免震構造に優れており、昨年度の3月11日の震災の際に棚から落ちた保管箱は一つもなく、地震による脚本の破損はみられなかった。しかし、昨年度の研究会で東京文化財研究所保存修復科学センター保存科学研究室長の佐野千絵氏より、足立区のアザードマップでは津波や大雨による浸水で

荒川の堤防が決壊した場合、中央図書館の1階は浸水被害を受ける可能性が高いと指摘されていた。中央図書館1階書庫には、昭和39年までの脚本が保管されている。その中でも特に古くて貴重と思われる、昭和20年代～昭和33年までのものを5階にあるアーカイブズ準備室内に移動する作業が6月から始まった。

昭和33年という年代で区切ったのは、アーカイブズで既に購入済の、貴重書を入れる中性紙の平箱・夫婦箱に入れられる冊数がおおよそ1500冊、古い年代から遡ると昭和33年でこの冊数になるという計算からである。

アーカイブズでは中性紙の平箱に保管していた戦前の脚本を除き、昭和39年までの台本は原則として被せ蓋付きの段ボールの中に中性紙の袋に入れて保管していたが、今後は、

- ・戦前～昭和27年までの脚本217冊が中性紙の平箱
- ・昭和28年～昭和33年までの脚本1291冊を中性紙の夫婦箱
- ・昭和34年～昭和39年までの脚本6830冊 が被せ蓋付き段ボール箱

という年代ごとに3種類の箱に分けて保管することになった。

6月～9月に準備室内に平箱・夫婦箱を収納するスペースを作るための整理作業を行った。並行して、梅田図書館の倉庫内で新しいものと一緒に保管されている昭和39年以前の脚本をリストアップした。

また、中性紙の袋に管理番号・タイトル・サブタイトルが記入できる枠線をゴム判で押した。タイトル確認のため袋をあける回数が増えるのを防ぐためである。

■抜き取り作業開始

具体的な移動作業は、まず、中央図書館の1階書庫内に保管されている中から昭和33年までの脚本抜き取り作業から行った。抜き取り後、準備室内にて年代別に平箱と夫婦箱に分ける。その作業中、昭和11年の放送でアーカイブズでは2番目に古い「なぜなぜ座談会」3冊を寄贈した声優・坂本和子氏寄贈本の中に同時期の放送と思われる

3冊の脚本を発見。正確な放送年月日が表紙に書かれていないため今まで見落とされていたが、「花日記」というタイトルのラジオレビュー台本内である。昭和7年のロサンゼルスオリンピックを「前回のオリンピック」と称していることから、「なぜなぜ～」と同じく昭和11年頃の脚本であると断定できる。昭和初期に新聞連載されていた漫画をラジオドラマに脚色した「スピード太郎」、「お伽歌劇」や「小鳥部屋の祝ひ歌」も坂本氏子役時代に使用した同年代のものと思われ、アーカイブズ所蔵の昭和10年代の脚本は計7冊となった。

一階書庫からの抜き出しは2回で完了。昭和20年代のもので梅田図書館に保管されていたものを抜出した後、準備室内で古い順に平箱、夫婦箱へと移していった。

準備室の棚への保管は基本、年代順に古いものから新しい物へと並べているが、一つのまとまったシリーズ物は、年代順に分けるより同じ夫婦箱にまとめて入れておくほうが分かり良い。そこで「年代順」とは別に「シリーズ物」箱を作った。現在「シリーズ物箱」があるのは、「次郎物語」「陽気な喫茶店」「白い棧橋」「えり子とともに」「あなたの胸に」「鞍馬天狗」「日本意外史」の6つである。



■昭和55年（1980年）までの抜き取り作業

昭和39年までの分類終了後は、梅田図書館倉庫内にある昭和55年までの脚本を抜き出し、別箱に移動する作業にとりかかった。昭和55年（1980年）で区切ったのは、ビデオテープなどで映像が保存されている可能性が低い年代のものが優先されるようにとの配慮からである。

梅田図書館倉庫の段ボール箱に入っている昭和40～55年までの16年分の脚本・台本の抜き



取り作業が11月末より、週1回のペースで始まった。

まずリストを出力し、昭和39年までと昭和55年までの脚本・台本をそれぞれ色分けした。これが思ったより

手間のかかる作業であった。この時代の脚本は、表紙に放送年代の記されていないものが多く、初期に入力したものの中には、年代が空欄のままになっているものが散見するからだ。ドラマ脚本であれば、インターネット上に年代を調べる情報がたくさんあるが、昭和40年代のテレビやラジオのバラエティ番組となると情報が得られない。正確な年代が特定できない場合は、直接脚本を見て、中に名前が見られる出演者の顔触れや、書かれて

いる内容で昭和55年以前とそれ以降を判別した。それでも判別しきれなかったものもある。

いわゆる「長寿番組」の中には昭和30年代に始まり、55年以降も続くものが数多くある。昭和20～30年代のものは区切りの年代をまたいで「シリーズ物箱」を作ったが、この年代のシリーズ物は冊数が多いため、原則昭和55年12月31日で区切ることにした。しかし、半年の連続ドラマで開始が昭和55年10月で、終了が56年3月という場合には、「55年まで」とみなして抜き出すことにした。

12月から2月にかけて梅田図書館書庫内で6回にわたって昭和55年までの抜き取り作業を実施。残り3回の作業で全ての箱から昭和55年までの抜き取りが完了する予定である。

(入山さと子)

■脚本展の歩み

脚本アーカイブズは脚本展を開催し、脚本・台本の重要性を広くアピールしてきた。以下にその歩みをまとめる。(グラビア4ページ参照)

① ああ、懐かしの秘蔵TV・ラジオ脚本展

2007年10/12～14 シアター1010アトリエ
主催・シアター1010、放送番組センター、
日本脚本アーカイブズ

② ああ、懐かしの秘蔵TV・ラジオ脚本展

脚本・台本を通してあの懐かしい時代が見えてくる
2007年10/22～28 足立区生涯学習センター講堂ホワイエ
主催・足立区生涯学習振興公社、日本脚本アーカイブズ

③ ああ、懐かしの秘蔵TV・ラジオ脚本展

脚本・台本を通してあの懐かしい時代が見えてくる
2007年11/23～12/9
放送ライブラリーイベントホール、映像ホール
主催・放送番組センター、日本脚本アーカイブズ
後援・NHK、社団法人日本民間放送連合

④ 脚本展 脚本・台本の半世紀

日本放送作家協会創立50周年記念
2009年9/18～23 芸能花伝舎
主催・社団法人日本放送作家協会
協賛・社団法人日本芸能実演家団体協議会
協力・協同組合日本俳優連合、財団法人JK A
社団法人日本映画俳優協会、日本映画テレビ照明協会
後援・社団法人日本民間放送連合

⑤ 脚本展 脚本・台本の半世紀

日本放送作家協会創立50周年記念
2009年12/21～27
足立区生涯学習センター講堂ホワイエ
主催・足立区生涯学習センター、社団法人日本放送作家協会
共催・足立区教育委員会生涯学習課

⑥ ザ・脚本 放送作家たちの80年

2010年4/6～4/18 江戸東京博物館第2企画展示室
主催・東京都江戸東京博物館、
社団法人日本放送作家協会

⑦ 脚本展 北海道展 脚本・台本の半世紀

今、札幌に蘇えるシナリオ達
2010年11/13～21 北海道立文学館
主催・社団法人放送作家協会、同北海道支部

⑧脚本展 日本大学藝術学部

江古田キャンパスリニューアル記念

2011年1/21～25 日本大学藝術学部放送学科スタジオ

主催・日本大学藝術学部放送学科

共催・日本脚本アーカイブズ

⑨脚本展 シンポジウム「失われた脚本・台本を求めて」 関連展示

2012年2/15 国立国会図書館2階ロビー

主催・国立国会図書館、社団法人日本放送作家協会
シンポジウムの開催に合わせて、1980年放送までの貴重な脚本を以下の6つのテーマに分けて、キャプションとともに展示した。

- ・初期のラジオ脚本
- ・詩人・作家の手掛けた脚本（ラジオ初期に人気小

説家を起用したことに始まり、数多くの詩人・小説家が脚本を書いている）

- ・テレビドラマ
- ・パネリストゆかりの台本 シンポジウム登壇の山田太一氏・堀川とんこう氏・藤村志保氏、そして故・市川森一氏にゆかりの脚本（1980年以前限定）を展示
- ・アニメ・特撮
- ・バラエティ

※このほかに、2010年10月及び2011年10月に、足立区生涯学習センター主催の「足立サークルフェア」に参加。ミニ脚本展と台本修復実演を行った。

（鷺山、入山、西沢、熊谷）

寄贈脚本・台本 集計報告

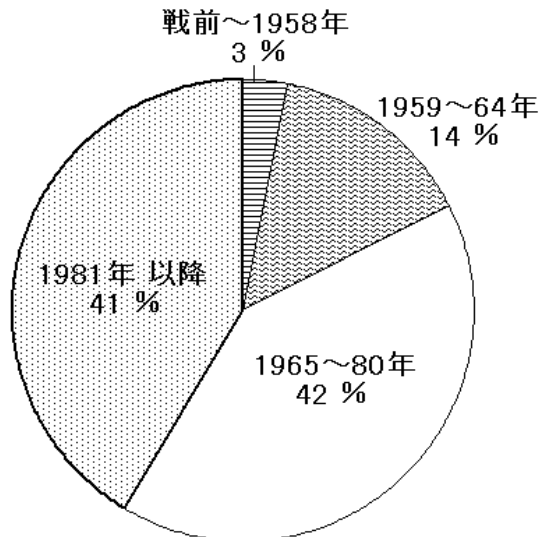
■寄贈冊数

これまでに脚本アーカイブズに寄贈され、分類入力の上保存してきた脚本台本の冊数は、以下のようにになっている。

<年代別内訳> (単位：冊数)

寄贈総数	①戦前～1958年	②1959～64年	③1965～80年	④1981年以降
47413	1508	6830	19471	19604

(平成24年2月10日現在)



【保存状況】

いずれも管理番号をつけ、一冊ずつ封筒に入れた上で、箱に収めている。

- ①戦前～1958年まで：中性紙封筒に入れ、中性紙の平箱または夫婦箱に保管
- ②1959～64年まで：原則として中性紙の封筒に入れ、被せ蓋の保存箱に保管
- ③1965～80年まで：OPP袋に入れ、段ボール箱に保管
- ④1981年以降： 同上

上記総数4万7413冊のうち、4万262冊（平成23年9月15日現在）について、内訳を集計した。

〈メディア別内訳〉（単位：冊数）

放送	映画	舞台	その他
38786	967	483	26

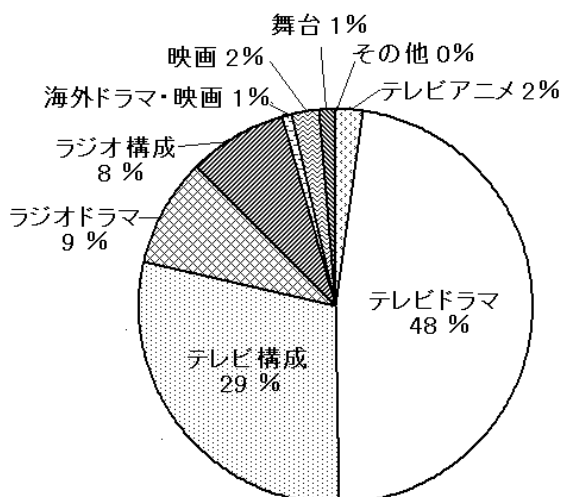
ラジオ、テレビを合わせた放送台本が97%をしめていることがわかる。

〈ジャンル別内訳〉

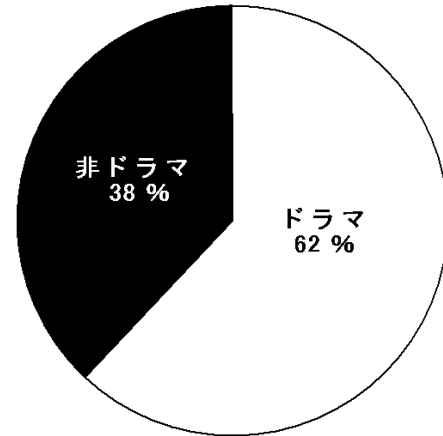
脚本アーカイブズは全く前例がないところから手探りで分類管理を行ってきた。また台本によっては、どこに分類すればよいのか判断に迷うものも少なからずある。

後日修正が必要になる可能性が考えられる。

ジャンル	冊数
テレビドラマ	19168
テレビ構成(バラエティ、音楽番組、教養、ドキュメンタリー等)	11597
ラジオドラマ	3644
ラジオ構成(バラエティ、音楽番組、教養、ドキュメンタリー等)	3198
海外ドラマ、映画(吹き替え用台本等)	306
映画	951
アニメ映画	16
舞台(演劇、バレエ等)	277
舞台構成(バラエティ、音楽、イベント台本等、中継用台本含む)	206
テレビアニメ	873
その他	26
総計	40262



放送脚本・台本のうち、ドラマとそれ以外（構成台本等）の割合を出すと、以下のようになる。



【資料について】

脚本アーカイブズでは、脚本・台本に関わる資料が同時に寄贈された場合、それらも受け入れ保存してきた。内容は、作家の手書き生原稿から執筆用のメモや書籍、また作品のポスター、パンフレットに至るまで、多種多様に渡っている。

以下に主なもの、特徴的なものを上げる。

①手書き生原稿

作家名	タイトル等	冊数
茂本草介	『横堀川』『夫婦善哉』など	45
内村直也	『えり子とともに』など	22
菊田一夫	『姿なき犯罪』	1
田中千禾夫	『競馬』	1
小山祐士	『母の笛』	1
横田弘行	『次郎物語』など	274
岩間芳樹	『勇氣堂々』など	29
津田幸於	『しのぶの明日』など	20
水原明人	『鞍馬天狗』など	9
遠藤淳	ゴールデン洋画劇場高島忠夫用ナレーション	12

表紙欠損、未完成台本等も含む

このほかに、手書き企画書、シノプシス、執筆用メモなどが多数ある。（津田幸於氏メモについては後述）

②ポスター、パンフレット、チラシ

寄贈者	内容	数
布勢博一	『戦争と人間』など映画、『藤十郎とお梶』など公演パンフレット等	89
小河藤子	『初夏の演劇祭』など公演、映画パンフレット等	13
鎌倉英利子	『大川橋蔵公演』など鎌倉俊明氏出演演劇パンフレット、ポスター、チラシ等	136
津田幸於	津田幸於氏執筆テレビドラマ、ポスター、チラシ等	32
山口志郎	宝塚パンフレット、楽符等	66

ほかに、横浜コンベンションビューローから、横浜でロケをしたテレビと映画のポスターが多数寄贈されている。

③企画書

台本以外でもっとも点数が多いのは、番組企画書である。印刷製本されたものの他に、手書き原稿もある。ここでは詳述しないが、企画書は作品と切り離せない性質のものである。本来は脚本と併せて保存するのが望ましいと考える。しかし、寄贈された脚本・台本と企画書が必ずしも一致していない。

④その他

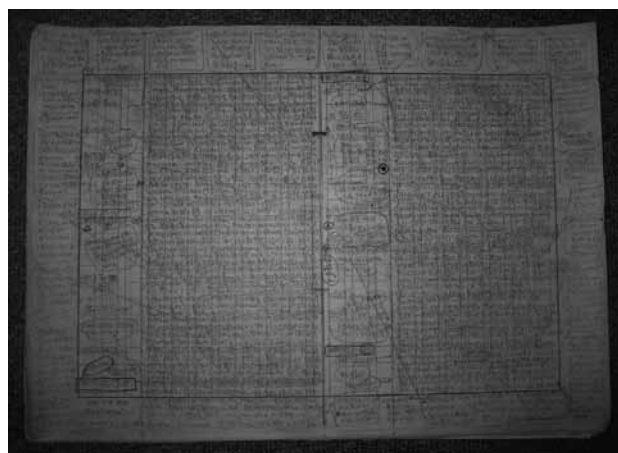
- ・昭和37年度芸術祭奨励賞受賞作品『金魚』録音テープ

岩間芳樹氏の資料の中には、昭和30年代の番組録音テープが数点含まれていた。今回、試験的に専門機関に依頼し、CDに起こしてもらった。その結果、今ならまだ、聴けるレベルにあるとわかった。

当時の録音は、ほとんど残っていないと思われ、非常に貴重な資料である。今後、保存の可能性を探ってゆくことが急務である。 (鷺山京子)

【創作の裏側】

平成24年3月末をもって日本放送作家協会のアーカイブズ活動も終わりを告げる。最後の整理作業中の収集管理部は、故津田幸於氏の寄贈脚本の中から目を凝らすような資料が同封されていたのを見つけた。『水戸黄門』『大岡越前』『銭形平次』等々の人気ドラマの脚本家であった同氏の創作の秘密を垣間見ることが出来るかもしれない。



小さな文字で隙間なく重要事項が書き込まれている

写真にすると見にくいですが四百字原稿用紙に目一杯、外枠の余白まで鉛筆書きの小さな文字で埋め尽くされている。用紙の真中から左右にベッタリと見えるのが隙間なく書き込まれた文字でシナリオさながらに物語りの展開を一行一行細かく書き込んでいる。そして行頭からあるいは文中から外枠へ向かって伸びる直線の先には、科白・衣裳・場所名・問題点等が記入されている。物語展開部の左側、縦の余白が見える所にはシーンが書き込まれ、さらには記号・符号が記入されている。それらは、別原稿に何を意味するのか索引として書き込まれていた。そしてこのような物語の展開を書き込んだ原稿が全部で3頁あり、第三者が読みこなすにはルーペと根気が必需品となる。他にはドラマの舞台となる土地と街道宿場と登場人物の相関図原稿が用意されている。

ちなみにこの物語原稿に八州廻りの藤堂平八郎や清水の次郎長などの名前やタイトルとして「八州隠密廻り大江戸犯科帳」「八州あばれ旅」等々があった。その後の調べではどうやら「あばれ八

州御用旅」(テレビ東京)の第3シリーズ(平成4年)の最終話のスペシャル版のための原稿と判った。アーカイブズ活動の最終を締めくくりに相応しい腹ごたえのある資料に巡りあったという感じだった。

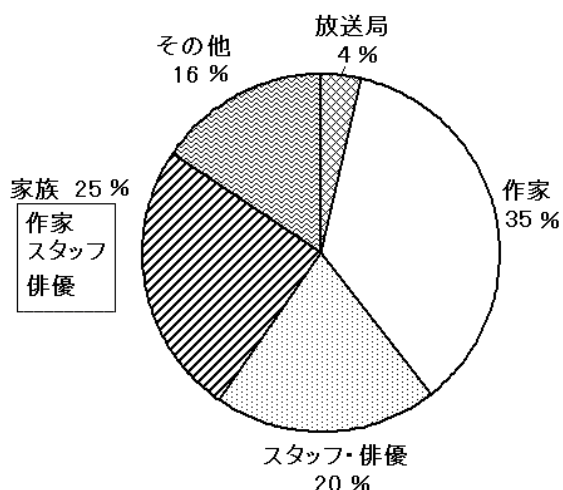
(鈴木良武)



■全寄贈者内訳

これまで脚本アーカイブズでは、111の個人、団体より脚本・台本の寄贈を受けてきた。その内訳は、以下のようになっている。

ご寄贈くださった皆さまには、この場を借りて、深い感謝の意を捧げたい。



■脚本・台本の形態について

- ①手書き製本： 1936年(昭和11年)放送の『雲雀』(脚本・堀江林之助)は、原稿用紙に手書きの生原稿だが、表紙をつけて台本の形にしてある。再放送の日付や配役も書かれているので、このまま放送台本として使われたものなのかもしれない。

- ②ガリ版刷り製本： 1950年代初めまでは、表紙も本文もガリ版刷りで作成されることが多かった。1960年代ごろから、表紙にカラー紙を使い、デザインにも凝るようになってゆくが、本文はかなり長い間ガリ版刷りのままであった。

- ③タイプ印刷製本： 数は多くないが、本文をタイプ印刷した台本もある。

- ④印刷製本： 現行の脚本・台本の多くが、この形態をとっている。表紙もカラー化され、豪華な感じに仕上げたものも次第にふえてきた。

- ⑤コピー原稿： 現在、バラエティや報道などの構成台本は、作家がワープロで打ったものをコピーし、そのまま現場で使うことも多い。なお現状では、デジタルデータで寄贈された脚本・台本はない。

■修復について

ホチキスなどの金属の留め具が錆びて、そこから傷んでくる。脚本アーカイブズでは、研究の一環として、修復の実習を行った。これまでに、1950年代のものを中心に、49冊を修復している。

そのうち31冊は金属をはずし、和紙で補強した上で板目紙で表紙をつけている。18冊は、金属をはずして紐で綴じただけの簡易修復である。

湿度の高い日本では、さびの進行も早い。また、特に紙質の悪い1950年代までの脚本・台本は、劣化が激しい。デジタルでデータを保存するとともに、本格的な手当てをすることが望ましい。

(鷺山京子)

学びピア 21

(足立区・千住)



荒川側から見た建物全景



入口風景。脚本アーカイブズ準備室は5階にあった

■アーカイブズ概論	脚本アーカイブズ設立のメリット・ 活用等について	95
■報告	脚本アーカイブズと足立区の歩み	97
	広報部	98
	ラジオ「カフェ・ラ・テ」	99
■編集後記	脚本アーカイブズへの想い	100

アーカイブズ概論

脚本アーカイブズ設立のメリット・活用等について

香取俊介（日本脚本アーカイブズ委員長）

脚本アーカイブズの意義や重要性について「具体的にどのようなメリットがあるのですかと」とよく聞かれる。①テレビ業界関係者にとってのメリットばかりでなく、②研究者や③一般国民、さらに④これから映像の仕事を目指そうとする若い人にとって、どのようなメリットがあるのか、紙幅の関係で個別に詳しく語ることは別の機会に譲るとして、①から④に共通するメリットについて、現時点での考察を以下に箇条書きで記す。

単に収集保存するだけではメリットは限定されており、一般公開が前提である。公開の前提条件として著作権のクリアとデジタル化が必須である。

【デジタル化がなぜ必要か】

★脚本・台本は今のところ番組制作のための資料という位置づけであり、長期保存を考えてこなかったため、紙質もインク類も良質とはいえない（当初は手書き、さらにガリ版刷りなど）。冊数も100部から200部程度しか作られていないため、現存する脚本・台本の数は少なく、原本を一般公開すると破損等でいずれ判読不能になる。

★デジタル化することで同質の脚本・台本を、複数箇所のサーバーに分散しておくことが可能になり、大災害などで一挙に失われる危険を回避できる。

★脚本・台本は活字のみによって構築されている特性上、デジタル化によるキーワード検索によく馴染む。

★現在の技術では膨大な映像を検索するには時間

もかかる。そのため、映像検索の補助手段としても映像アーカイブと同時に脚本アーカイブズを構築することは大事であり、これは夙に長尾真国会図書館長が提唱されていることである。

★デジタル化してネットワークで結ばば、脚本・台本を一カ所に集積する必要もなく、すでに地方の文学館、大学の図書館などに保存されている脚本・台本を、都内の公共図書館等で読むことも可能となる。

★デジタル化して一般公開する場合、著作権処理等が必須となるが、ここで触れる「メリット」は、著作権をクリアしたうえ、デジタル情報として公開できる脚本・台本に限る。

★ITの急速な進歩を考慮すると、現時点でわれわれが考えている「利活用」をはるかに超えた画期的な方策が生まれる可能性も強い。

【脚本アーカイブズをなぜ作る必要があるのか】

★文化とは「過去（伝統）」の積み重ねの上に成り立ってきた。つまり先人たちが創った成果を土台・土壌にして、その上に何か新しいものを附加して作品等を構築する。俗に「これはオリジナルだ」といっても、作り手は無意識的にせよ過去の成果、先人たちの業績をもとにしている。当人が読んだ小説や戯曲、脚本、他の書物、雑誌、新聞等、それに見た映画、テレビ、聞いたラジオ、音楽等々、作り手が生きてきたプロセスで吸収し脳に記録した「記憶」を元にして、素材、発想法、台詞まわし等々を紡ぎ出しているのである。

★豊かな文化を築くためには過去の成果、業績等
をできるだけ多く、自由に触れる環境を構築
することが大事である。過去の業績を組織的
に集積し多くの人が自由に利用できる環境を
構築する——これがつまり「アーカイブ」の
真髄である。

【具体的メリットとは？】

★江戸時代に流行った洒落本等と脚本・台本は形
式的に類似点がある。洒落本はそれ自体、庶
民の読み物として読まれたもので、典型例と
して『東海道中膝栗毛』がある。『膝栗毛』
は会話を主として、これを大文字で記し、地
の文は割注ふうに小文字としている。まさに
「ト書き」「台詞」で構成する脚本の形式で
ある。洒落本も、人物の身振り、服装、風俗、
言語などをリアルに描いており、シナリオに
近い。江戸時代、これらが庶民の娯楽として
読まれた。今後すぐれて面白い脚本・台本は
それ自体が独立した「読み物」として一般に
読まれる時がこないとも限らない。シェーク
スピアやモリエール、チャーホフなどの戯曲
が一般に読まれるように。

★現に一部著名作家のドラマ脚本（向田邦子、山
田太一、市川森一、倉本聰、早坂暁氏ら）は
単行本、文庫本となって広く一般に読まれて
いる。倉本聰氏らはかつて「シナリオ文学」
を唱え、戯曲と同様にシナリオも「文学」
のひとつのジャンルとして定着させようとし
た。昭和初期の「モダニズム」の潮流のなか、
ナンセンス文学のひとつとして人気のあった中
村正常の作品は、レビューなどで上演される
「戯曲」形式をとっている。これはテレビ創
生期の「生放送」のドラマ脚本に近い。初期
の『文藝春秋』や『新潮』等の文芸雑誌にも
毎号のように戯曲が小説などと並んで掲載さ
れ、読者はこれを「文学作品」として読んだ
のである。

★テレビは善し悪しは別にして、大衆（マス）
がもっとも関心をもつテーマ、素材を常に取
り上げてきた。必然的に脚本・台本は時代の
流行、空気、言葉遣いなどを直接的に反映し
ており、時代の空気、ファッション、庶民の
暮らし、嗜好などを知る上で大変貴重である。
CM台本なども含めれば、戦後日本の風俗・
流行・ファッションなどを知る上で大変役立
つ「一級資料」といえる。

★一定数の脚本・台本がテキストデータ化され
検索システムが整えば、新しい番組企画を考
えるための「宝庫」となりうる。過去にどの
ような素材、題材がとりあげられたか、また、
なぜその番組がうけたのか、キーワード検索
で瞬時に情報を呼び出し、その中身を知ると
共に、なぜ「うけた」のか、なぜ「流行った
のか」、なぜ高視聴率を叩き出したのか等を
浮かびあがらせることも可能となる。

★ドラマについていえば、キーワード検索で例
えば「別れのシーン」を瞬時に数十から数百
例ひきだすこともでき、新しく「創作」する
上で大きなヒントになる。また、時代によっ
て家庭内で会話の実相がどう変化していった
かなどが一目瞭然となる。人間の好みや感覚
等は時代によって変わっていくが、基層部分、
本質的なところは100年200年で変わるもの
ではない。脚本アーカイブズのシステム構築が
すすめば、昭和以後の「日本文化」を研究す
る上でも、大きな威力を発揮する一方、日本
が世界に先駆けて構築する「知のリサイクル」
のモデルになる可能性をはらんでいる。
良き作品は必ずといってよいほど良き脚本の上
に成り立つものである以上、脚本アーカイブ
ズは映像産業の発展のための豊かな「土壌」
になり得る他、人材育成にも大いに役立つ
はずである。

脚本アーカイブズと足立区の歩み

足立区との協働

日本脚本アーカイブズ構想は2003年3月に国会の総務委員会で、昨年急逝した当時の日本放送作家協会理事長、市川森一が「ラジオ放送が始まって80年、テレビ放送が始まって50年にもかかわらず、貴重な文化遺産とも言える脚本・台本が散逸、消失するがままになっている。この機に脚本・台本を保管し、システム化する施設が必要ではないか」という趣旨の提言を行い、この日、総務委員会に出席した自民党から民主党、共産党など全党の賛同を得たことから始まりました。

そこで日本放送作家協会では脚本アーカイブズ特別委員会を設立。市川が足立区のシアター1010の館長をしていた関係で、足立区が協働を申し出、2004年9月、同区千住に「日本脚本アーカイブズ準備室」をオープンさせました。と言っても、主に会費収入で運営する文化団体である協会では準備室設立資金も充分ではなく、足立区から机、椅子、会議用テーブル、中古のパソコンなどを貸与して頂き、その他の備品はソファセット、テレビ受像器、冷蔵庫、ホワイトボードから文具、茶器セットにいたるまでリサイクルショップや、100円ショップなどを回って、何とか準備室としての体裁を整えました。

足立区は今でこそ芸術大学や電機大学などの誘致に成功していますが、当時は大学も映画館もなかったため、日本脚本アーカイブズ会館を足立区に創りたいと望んでいました。そこで足立区はナショナルな施設であることを条件に、建築費用は国または公共機関が負担し、足立区内は廃校となった小中学校の跡地を用意するというプランを立てました。そのため日本放送作家協会と足立区政策経営部は協働で「日本脚本アーカイブズ設立趣意書」を作成し、同時に確認書を交わしました。それは上記のような趣旨と日本脚本アーカイブズ会館を3年以内に建設するという目標を定

め、3年経過後は双方の話し合いで問題を解決していくという内容でした。

そして、この確認書に基づいて、千住の足立区立中央図書館の一部と、梅島にある梅田図書館の一部を収集・保存した脚本・台本の保管場所として使用出来ることになりました。

さらには、脚本アーカイブズ特別委員会と足立区は国会議員をはじめ、都議会議員、足立区議会議員などに陳情と協力を依頼して回りました。委員会では独自にNHKや民間放送連盟、文化庁などを回って支援を依頼しました。いずれも非常に好意的で、民放連会長をはじめ東京放送、フジテレビ、日本テレビなど各局の首脳のご理解とご協力も取り付けることが出来ました。

こうして脚本アーカイブズ構想は順風満帆に進むかに見えましたが、不安定な国政や経済の低迷によって、趣旨には賛同しても具体化となると足踏み状態が続きました。その一方、足立区民の理解を得るために、足立区内で脚本展を開催したり、脚本講座を開くなど、足立区との二人三脚は順調に続きました。

確認書に書かれた3年以降は脚本アーカイブズ特別委員会執行部と足立区政策経営部長と毎年、協議し、足立区は情勢の変化から「ナショナルな機関でやってくれれば足立区でなくとも構わない」という姿勢に変わっていきました。その背景にはナショナルな脚本アーカイブズ実現には時間を要すること、建設用地として考えていた小中学校の跡地を利用する可能性がなくなったことにも起因すると思われます。

そして、ようやく日本脚本アーカイブズの事業がナショナルな国立国会図書館に移行する方向で動き出し、脚本アーカイブズ委員会が発展的解消となる今年、足立区との協働関係も新たなステージに入ろうとしています。今、足立区におけるシナリオ教育など新たな協働作業も検討されています。永い間、ともに歩み様々な御協力を頂いた足立区に感謝すると同時にこれからも足立区と日本放送作家協会の信頼関係が継続されていくと確信しております。

(南川泰三)

広報部報告

先進国の中でも遅れを取っている日本の脚本アーカイブ。文化資産・文化資源でもある脚本・台本の収集・保存の重要性について、下記の方法を中心に広報活動を行ってきた。

- ①公式ホームページ
- ②メールマガジン
- ③ラジオ番組「カフェ・ラ・テ」

そして、平成23年5月、文化庁と国立国会図書館によって結ばれた「協定」により、脚本のアーカイブは民間一団体の活動から、さらにステップアップすることになった。これまで広報活動を通じて、日本脚本アーカイブズに関心を寄せていただいた多くの皆様に、心より感謝したい。

ホームページによる情報発信

公式HP <http://www.nk-archives.com/>

■内容

- 日本脚本アーカイブズの主旨、活動内容、メールマガジンの紹介・「奥山コーシンちゃんねる」のリンクバナーの設置。
- 「～我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承～」国立国会図書館と文化庁との協定についての報道発表全文へのリンク。
- 故・市川森一氏追悼 シンポジウム企画
『失われた脚本・台本を求めて——文化リサイクルの意義』開催案内

■ホームページ利用統計

前年度に比べて、年間の訪問者数は増加しているが、ヒット数は減少している。(右表参照)

月毎に見ると、月訪問者数の最多は8月3,485人、次に7月3,484人。月ヒット数の最多は平成24年2月26,395回、次に5月26,013回。

年間訪問者数の増加は、脚本アーカイブズにつ

いて関心を持つ人々が増えていることを示していると思われる。年間ヒット数の減少については、文化庁と国立国会図書館の「協定」により、今年度の活動は公的機関への移管のための準備期間と位置付けられ、脚本展などのイベントは行われなかった。そのためコンテンツが減少したことがそのままヒット数に反映したと思われる。

	全ヒット数	全訪問者数	ヒット数/1日	訪問者数/1日
2011 (平成 23) 年度				
4月～2月	282063	38105	9241	1242
月平均	23505	3175	770	104
月平均前年比	76%	103%	76%	102%
2010 (平成 22) 年度				
4月～2月	340210	33963	11205	1113
月平均	30929	3088	1019	102
月平均前年比	131%	164%	132%	168%
2009 (平成 21) 年度				
4月～1月	237304	18842	7745	610
月平均	23730	1884	775	61
月平均前年比	167%	199%	161%	197%
2008 (平成 20) 年度				
10月～3月	85169	5671	2880	187
月平均	14195	945	480	31

平成20年10月に公式ホームページ公開以来、平成24年2月末日までの総訪問者数は96,581人。今年度3月末までを加えると約10万人の訪問者数とみなされる。

日本放送作家協会の特別委員会によるこれまでの活動を助走期間とすると、日本の脚本アーカイブは今まさにステップアップの時期にさしかかった。当委員会による公式ホームページは、委員会解散に伴い3月31日をもって更新を終えるが、新たな体制のもとで、脚本アーカイブへの関心が10倍、100倍と広がっていくことを確信している。

メールマガジン 動画と連動

平成 21 年 4 月に配信開始以来、ホームページでは伝えきれない脚本アーカイブズの活動をメルマガで情報発信してきたが、今年度は、オーラルヒストリーの一環として動画の配信も実施した。

■発行概要

平成 23 年度 発行回数 9 回
平成 22 年 4 月～ 24 年 2 月
メルマガ 読者数 計 202 名
総発行回数 31 回
総発行部数 4356 部
(※平成 24 年 2 月末日現在)

■内 容

今年度前半は従来とおり寄贈脚本・台本の紹介や委員によるコーナーが中心だったが、後半ではバラエティ番組の黄金期を知る放送作家・奥山コーシン氏にその時代を語っていただき、YouTube 動画での配信をメインとした。

○奥山コーシンちゃんねる【台本にない台本】

<http://www.youtube.com/user/nkarchives39>
(平成 24 年 2 月末日現在)

	アクセス(視聴)数
第 1 回	495
第 2 回	273
第 3 回	198
第 4 回	262
第 5 回	192
第 6 回	90
第 7 回	137
総アクセス(視聴)数	1647

ホームページ、メルマガ、動画サイト……それらに記録された日本脚本アーカイブズの道のりは Web 上に残っていく。それらが、今後の脚本アーカイブ発展の一助となれば幸いである。

(清水喜美子)

ラジオ「カフェ・ラ・テ」で広報

「脚本アーカイブズの活動」と言われて、どんな活動をしているのか？ 具体的に答えられる人は少ないと思う。そんな状況を少しでも打破するため R F ラジオ日本の番組「カフェ・ラ・テ」を通じて、脚本アーカイブズの活動を伝えてきた。

2007 年（平成 19 年）から週 1 回、開始当初は日曜の夜 8 時放送であったが、現在は、毎週木曜（金曜の早朝）深夜 3 時～ 4 時に放送している。すでに、放送回数は 230 回を超えようとしている。

この番組は、日本放送作家協会の製作協力で、放送作家をゲストに呼び、放送作家の仕事や、ゲストの放送作家がどんな勉強やルートを活用してこの仕事に就いたのか、また、現在のテレビ・ラジオ界が抱えている問題や、社会的な現象をどのようにとらえて番組作りに生かしているか、などを話している。

また、この番組では、オリジナル脚本を募集し、10 分程度の、オリジナル・ラジオドラマを放送している。その際に、脚本の重要さ、脚本の上に作品が成り立つことなどを伝えている。脚本は、放送が終わったら廃業するのではなく、そのまま残すことによって、その時代の文化や風俗を後世に伝えることが出来る貴重な資料であると言うことを認識させることも、この番組の重要な役割である。

この番組「カフェ・ラ・テ」の中に「日本放送作家協会からのお知らせコーナー」が設けられている。このコーナーでは、脚本アーカイブズの主旨や目的、脚本アーカイブズが主催するイベントや講演会、脚本講座などのお知らせを行っている。非常に深い時間帯ではあるが、番組ホームページ、雑誌「月刊ドラマ」など、メディアミックス戦略を実行し、脚本アーカイブズの活動を報告し続けている。

(東海林 桂)

編集後記

—— 委員たち、脚本アーカイブズへの想い ——

アーカイブズ恋愛論

石橋 映里

——なぜ、脚本アーカイブ活動にそんなに一生懸命なんですか？

と不思議そうに問いかけることが度々ある。自分でも答えはわからないが、これは恋愛に似ているのかも知れない。

思い起こせば7年前……オープンしたばかりの北千住の準備室で、初めてお年を召した台本に出会ったときから一目惚れだった。ガリ版刷りの文字にドキドキし、俳優さんたちの書き込みに魂を感じた。貴重な本に出逢う度に自慢せずにはいられない。そんな時の私の目は、ハートマークになっている。

7年の間、研究調査部の一員として台本が眠っていきそうな所蔵施設を巡り、お話を伺って来た。そして、どの施設の方たちも同じ目をしていることに気づいた。はるか海を越え、米国や英仏へ取材しても同じだった。ライブラリアン、ドキュメンタリストと呼び名は変わっても、自慢の所蔵資料を披露しながら、彼女たちは（なぜか担当者は女性が多い）目をキラキラさせていた。

恋は倦怠期を迎えることなく、今も続いている。大切な脚本・台本たちがどこに住まいを移したとしても、私の片想いは続くに違いない……。

アーカイブズで得た財産

入山 さと子

脚本アーカイブズのお手伝いをするようになって、多くの寄贈された脚本を目にする機会がありました。寄贈者は、脚本家に限らず、俳優・女優・監督・放送局など多種多彩。寄贈された脚本も、日焼けして変色したものから、手紙や写真を挟みこんだもの、表紙に手製のカバーをつけて傷まないように大事にされたものなどいろいろです。

図書館所蔵の書籍であれば、書き込みがない綺麗なものに価値があるのですが、脚本の場合は違います。監督が使った脚本には、カット割の絵コンテが描き込んであります。女優の使った脚本には、言いにくかったセリフを抜き出しルビをふったり、そのシーンで着用する衣裳のメモが描かれていたりします。

汚れていればいるほど、その方が仕事と真剣に格闘していたという記録になっているのです。

いつかびっしりと書き込みをされた自分の脚本に出会いたい——そのような脚本を書かねばならないという気持ちにさせてくれた事が、私が脚本アーカイブズで得た一番の財産かもしれません。

故きを訪ねて

奥山 侑伸

台本脚本が文化資産、と言われてハッとしました。40数年台本を書きながら来た、テレビ・ラジオで放送が（録画が）おわったらその時点でスタジオの片隅にある大きな金網のゴミ箱へ直行したものだ。20秒のギャグに3日間も掛かったり、笑って貰うために泣きながら書いた台本も放送が終わったら役目は終了。台本脚本が結構貯まった頃に引っ越しすることになると、大半を捨ててしまうことになる。

7年前の「文化資産」の発言に頷けるものがあった。同じ作品でもビデオや映像とは違う台本や脚本が存在するのだ。出演者の書き込みが、演出家の演出プランや訂正削除があったり、完成するまでの葛藤がサイドストーリーとして、その時代を凍結させたまま眠っているのだ。そんな台本脚本を収集・管理・保存する事は、やはり文化資源なのだ、現在5万冊の台本脚本が徐々に国会図書館へ向けて動き出した！

ラストのコラム

香取 俊介

初代委員長の南川泰三氏のあとを受け、日本脚本アーカイブズ委員長になったとき、脚本アーカイブズをどう「着地」させるか、なかなか具体的なイメージがわかなかった。

理想についてならいくらでも語れるが、現実に脚本アーカイブズを設立し、これを恒常的に維持運営していくことは生やさしいことではない。運営方法や将来方向をめぐって会議のたびに激論というより罵倒などもあったが、それもいまは懐かしい。

一緒に運営をはかってきた20数名の日本放送作家協会会員とのやりとりは、すでに私自身の記憶の「アーカイブ」になっている。人間社会にとって「アーカイブ」がいかに大事であり、これこそ文化土壌を豊かにする大きな柱であることを、脚本アーカイブズ活動を通じて身をもって味わった。そのことだけでも意味のある時間をすごしたと思っている。それと、この事業を通してさまざまな方々と知り合えたこと。それが今や貴重な「個人資産」となっています。ありがとうございました。

ありがとう

熊谷 知津

2005年10月、日本脚本アーカイブズの準備室開室時から6年半。膨大に贈られて来た脚本・台本の箱の山の中で、収集とは保存とはと考える日々。世界の先端を行くフランスやイギリスのアーカイブズの研究機関に研修に行き、日本のアーカイブズの道の遠さに唖然とするも、国内各所の関係機関や、研究者の方々に教えを請うてきた。特に横浜放送ライブラリーの皆様、国立国会図書館資料保存課の中島尚子様、NHK放送博物館学芸員の磯崎咲美様、東京文化財研究所保存修復科学センターの室長・佐野千絵様、松竹大谷図書館の皆様。数え上げればきりが無い程、多くの人たちの御指導を受けて学んできた。それらを十分発揮できないで研究が終了することは残念だ。しかし今後はもっと本格的にナショナルな機関が専門的に研究してってくれるはずと信じている。

又、入力班の人たちの若い力も忘れてはいない。ありがとう。日本放送作家協会北海道支部の皆さんの脚本に対する熱い思いも覚えている。そして何より忘れられないのは、脚本展に来て下さった人々のあの懐かしそうな顔。今は全ての人に感謝を込めてありがとうと言いたい。

3年半を振り返って

鷺山 京子

梅田書庫に『捕鯨オリンピック』というラジオ番組の台本があります。現在では「捕鯨オリンピックなどと浮かれて鯨を乱獲した」と、負の遺産として語られがちなる事象かもしれませんが、しかし、こういう番組が作られたということは、捕鯨が単なる肉や油の確保にとどまらず、貧しい敗戦国の国民を励ます心躍る生業であったことの証ではないでしょうか。脚本台本は社会の窓となりうる。しかもそれは、放送が終わった後も長く続く。それが、脚本アーカイブズの活動から学んだことの一つです。

思えば、エクセルを開くといったところから始まり、さまざまな「生まれて初めて」の経験をさせていただきました。得がたい出会いもあれば、つらいこともありました。多少なりともお役に立てたのかどうか心もとなくはありますが、有意義な3年半を過ごさせていただき、深く感謝しています。

アカデミックな専門家の養成を！

さらだたまこ

委員の末席に名は連ねてはいますが、私は他の方々のように日々の地道な作業には参加してこなかったもので、皆さんの尽力にはただただ頭が下がる思いでいっぱいです。

さて、私個人としては、2008年のフランス・イギリス視察に参加し、アーカイブズ活動の意義を実感したことが一番の実りです。イギリス視察が縁で英国のシェフィールド大学ドミニク・シェラード教授の講演会が日本で開催でき、国際的な連携をもとに活動が広がる夢にも期待しました。

夢のまま終わらせないためには、アカデミックなアプローチができる日本の専門家の養成を急ぐべきと思った次第です。脚本を扱うのですが、脚本家とは違う視点で、脚本アーカイブ学が究められる人材です。放作協が今後できることは、そうした人材育成も含めた理解ある支援だと思えます。

終わりの始まり

清水 喜美子

1977（昭和52）年に放送された民放のある番組のことを調べていて、日本には脚本・台本のアーカイブがないと分かり唖然とした。テレビは時代を映す鏡。その貴重な資料が放置？ なぜ？ もったいない！ それが脚本アーカイブズの活動に参加する動機だった。

日本脚本アーカイブズの歩みを見るに、大学との産学共同の道を探り、自治体との協働事業への働きかけを行い等々、まさに紆余曲折の道程。

しかし、ついに着地点が見えた。国家規模のアーカイブとしてステップアップすることになったのだ！

参加して4年余だが、日本の脚本アーカイブの礎作りに携わることができたことを誇りに思う。

脚本家・放送作家にとって脚本・台本は番組への愛と情熱で産み出した我が子も同然。そんな我が子たちが国によって大切に護られていくと思うと、安堵感と同時に放送アーカイブ先進国・フランスのINA（国立視聴覚研究所）のように、大きく立派に育ってくれることを心より願ひ続ける。

終わりの始まりによせて……。

脚本・台本は、映像オーディオ文化の源

城 啓介

日本脚本アーカイブズ準備室が収集した約5万点の脚本・台本・資料。それは執筆した放送作家や脚本家本人、遺族、番組関係者の方々から寄贈されたものがほとんどです。

バラエティ、ドラマ、アニメ、ドキュメンタリー、ワイドショー、情報番組等あらゆるジャンルを網羅し、テレビ文化勃興期の息吹を伝えています。書き込まれたメモから作家達の息遣いさえ伝わって来ます。

私は、短期間ではありましたがその脚本・台本の保存管理、修復に携わってきました。脚本アーカイブズ特別委員会が役割を終える今、しかるべき施設でその貴重な脚本・台本5万点が恙なく保存、修復、保管されることを願っています。原本の公開は無理であっても、スキャンしたコピーの公開を望みます。なぜならそれは、日本の放送文化の財産であり、今後、放送・配信の形は変わったとしても、映像オーディオ文化を担っていく人達にとって創作の源となるはずですから。

脚本アーカイブズ委員会準備室

東海林 桂

何年前だろうか？ 足立区の区役所を訪れ、その後、学びピア21に、脚本アーカイブズ準備室が出来た。

その部屋で、ローマ法王パウロ2世の書いたラジオドラマの脚本があることが分かった。番組企画書にして、何とか「法王のドラマ」というドキュメンタリーを作りたいかったが、夢途中で消えてしまった。

ロッカーに貼られていたカラーコピーの台本の表紙には、自分が子どもの頃、夢中になって見ていた番組の名前が書かれていた。

脚本は文化であり、貴重な遺産であること、それを実感した部屋でもあった。

脚本アーカイブズ事業に関する不思議な現象

杉原 秀一

世の中には不思議なことがあるもので、経済学で前提とされる、人間行動の経済合理性が脚本アーカイブズ事業に通用しなかったのは、興味深い現象である。脚本アーカイブズ事業とは、過去にテレビで放送されたドラマ脚本や構成台本を収集・保存し、その膨大なデータベースによって、文学、社会学、歴史学、放送批評等への一次資料とする事業であって、大学等の研究機関では、極めて重要なデータとなり、放送メディア等では、制作現場で“よすが”となる資料であり、そして、その事業では当然のごとく、活用において、有料の対価が支払われることになるのだが、事業を続けていく内に、内部から批判があり、事実上、著作権者の手によるアーカイブズ事業は終わりを告げた。構想としては、国内、外の大学の図書館を拠点とした「産学官」事業連携であり、コンテンツ検索分類を始めとしたグローバルスタンダードによる放送文化の世界戦略であったが、その夢は、この3月で潰える。

文化資産を支えるもの

鈴木 良武

「主人は有名作家でもなく華やかなスポットライトを浴びたこともありません。ただ書くことが好きでこの道に入り、コツコツと書いてきた人です……」送られてきた小さな段ボール箱には、詰め込まれた寄贈台本と一通の手紙が同封されていた。紙背からは、亡き夫の健気さに報いたいという妻の途な心情が切々と感じられた。

——脚本・台本は貴重な文化資産です——と謳うフレーズの外でこれら著作物の本当の価値の理解者は作家の奥方たちではないかと思つておぼろげに思っていた。脚本・台本の完成までの夫の苦悩、その結果得られた報酬で成り立つ生活の労苦……いわば夫婦の血肉の結晶が作品を産み出していると思えた。用済みになってゴミ箱にポイポイ投げ捨てられるような世界とは別次元の世界がそこにはあった。

夫の遺品となった作品集の収集や調査に伺った時、どの奥方も決まって一つの表情を見せられた。それは残された合作者として責務を果たしたという安堵の表情であった。

脚本アーカイブズの6年余

高谷 信之

市川森一さんが国会での脚本保存について訴えてから、平成24年の3月で丸7年が経つ。

残念な事にその市川さんも昨年暮れに亡くなられた。

脚本アーカイブズは6年と5カ月が経過した。

そして、東大や国会図書館が脚本アーカイブズの重要性を理解して下さり、そちらへ移行していくという事である。

一番のショックと印象に残っているのは2008年11月、イギリス、フランスのアーカイブズ事情を取材させていただいた時の事である。

アーカイブしていくという事と、文化の伝承という事に欧米と日本には、決定的な考え方の相違がある。

アーカイブとは次の世代、次の文化の創造の為にこそある。

文化に対して貧しい考え方と方法論しか持てない日本としては、はっきりその事を認識してもらいたいと今は切に願うばかりである。

キャタピラー

津川 泉

「まさか、あのノーマン・コーウィンが生きていたとは！」

彼の代表作「この虫十萬弗」のラジオ台本に出会った帰りの道中で、静かな感慨がわきあがった。UCLAで彼の名を検索した際、LAから1時間ほど郊外に彼の記念室があると分かって、コーディネーターが気を利かせて案内してくれたのだ。84年に設立されたサウザンドオークス財団図書館の誇るARA（アメリカ・ラジオ・アーカイブズ）は世界最大のラジオ放送コレクションの一つで、そこにコーウィンの記念室はあった（第3回報告書に関連記事）。

お目当ての「この虫十萬弗」を検索してもらう。しかし、このタイトルは邦題で、原題が分からない。「芋虫（キャタピラー）が主人公」と通訳してもらう。すると、キーワード検索のお陰で、瞬く間に台本と感激の対面ができた。さらに、98歳の彼（2008年当時）が時々、記念室に遊びに来ると聞いてびっくりしたことも思い出される。

戦後の日本で、多くの作家がこの作品に出会い、数々の名作ラジオドラマをものしたことが思い返された。飯沢匡「数寄屋橋の蜃気楼」もその影響下に誕生した作品である。

LA、ハリウッドからニューヨークまで強行軍の旅の懐かしい思い出である。

作業スタッフとして

南條 廣介

「長いことテレビ局のライターとして番宣ニュースを書いてきたなら古今の番組に詳しいでしょ。手伝いませんか」と三原治さんに言われ、平成19年度の報告書Ⅲの校正作業からスタッフの末席に加わりました。

研究調査部に身を置き、その後、収集管理部の仕事もしました。人間で言えば、アーカイブズは前者が上半身、後者が下半身に当たるのでしょうか。アーカイブズのあり方を探る上半身なくして下半身に未来はありません。一方、脚本・台本の現物を扱う下半身なくして上半身の依って立つ基盤はありません。両者は一体のものだが、意思の疎通を欠く場面も時にはありました。しかし空中分解などせず次々のステージに上がったのは各スタッフ、支援者の尽力によるものでしょう。

放送済みの脚本・台本から見える風景は放送世界の影の部分です。文化庁・国立国会図書館の「協定」を機に、ようやく光があたるようになりはじめたのがうれしい。昨年、道半ばで急逝なされた市川さんにお見せしたかった。

脚本、その一行にこめられた思い

西沢 七瀬

2007年に脚本アーカイブズの一員となった。まずは、一からこの活動を始められた先輩方に敬意を表したい。その先頭に立ち、旗を振り続けた市川森一さんの思いは、今後、国がしっかり引き継いでくださるのだらうと信じている。

ある時、市川さんに「一般の評価とは別に、ご自分で考えるこの一作といえは？」と質問した。答えは『新・坊っちゃん』(1975～76年 NHKで放送)。申し訳ないことに私はこの作品を曖昧にしか覚えていなかった。しかし、数十年前の作品。簡単に目にすることも出来ぬまま時が過ぎ、そして市川さんは逝ってしまわれた。その数日後……。

アーカイブズの倉庫で寄贈台本の整理中にたまたま手に触れた数万冊の中の一冊、それが偶然にも『新・坊っちゃん』だった。ゾクッとした。この作品、冒頭のト書きはなんと「弁当箱が走ってくる」。まさに脚本家の気持ちが伝わる一行だ。これは完成した映像からだけでは判らない。改めて、映像だけでなく台本・脚本を後世に伝えて行くことの大切さを強く思う。

演芸番組台本が少ない

福井 貞則

ドラマ、バラエティ、音楽の各番組台本はたくさん寄贈されたが、演芸番組台本は殆ど残っていない。昭和32年開始の「上方演芸会」(NHKラジオ)から、平成23年開始の「今どき落語」(BSジャパン)まで46本の演芸番組が放送された。特番まで加えると50本になる。

私の手元に残っているのは「初笑いウルトラ寄席」(TBS)、「エプロン寄席」(NET:現テレビ朝日)、「キリキリ寄席」(TBS)ぐらい。

殆どの演芸番組は、台本というより“進行表”の態。ゆえに放送(収録)が終了すると即ゴミ箱に捨てられてしまった。台本だけではない。落語や漫才、コトの原稿は、演者が廃棄されるのが常である。従って演者自身も持っていない。作者自身も生原稿を残していない。こうした理由により、演芸台本が残っていない。……残念だ!!

ありがとう北千住

増田 貴彦

三年前。わたしは準備室のある北千住の大地に降り立った。

「先人先達の貴重な脚本台本を収集管理して後世にのこさなければならない」

この崇高なアーカイブズの理念に共鳴共感したからである。

「やるぞ!」

わたしは拳を握った。具体的になにをやるのかわからぬままそう胸に誓った。

わたしは実務作業を担当した。中でもやりがいを感じたのは寄贈されてきた脚本台本をPCにデータ入力する作業であった。さまざまな台本と触れ合うことができた。

楽しかった。楽しかったが段ボール一箱分データ入力すると、目がショボショボし、背中がバリバリに強ばった。そんなわたしを癒してくれたのは北千住の情緒あふれる町並みだった。ありがとう北千住。さらばアーカイブズ。

発展的解消

南川 泰三

当時、日本放送作家協会理事長だった故・市川森一さんが提唱し、市川さんの下で常務理事をしていた僕が脚本アーカイブズ委員会の委員長を仰せつかり、暗中模索の中、「日本脚本アーカイブズ準備室」の立ち上げに関わらせていただきました。

日々、喪失し、散逸していく脚本・台本を我々、放送作家が何とか食い止めねばとドン・キホーテ的にスタートしました。資金も満足にない中、ソファや文具を古道具店や、100円ショップを回って買いそろえたことが懐かしく感じられます。

あれからおよそ7年。途中より香取俊介氏に委員長を引き継いで頂き、メディアにも注目されるようになり、このほどようやく念願のナショナルなプロジェクトとして動きだしました。

脚本アーカイブズ委員会は役目を終えて次なるステップにバトンタッチすることになりました。発展的解消、感無量です。手前味噌ですが委員の皆さんは本当によく頑張ったと思います。お疲れ様でした。

大きな海に投げた小さな石

三原 治

脚本アーカイブズに関わって、あっという間の五年が過ぎた。主に研究調査部で、図書館やミュージアムへの取材と、オーラルヒストリーを担当した。直接会ってお話を伺ったのは、アニメ脚本家の鈴木良武さん、タレントの前田武彦さん、プロデューサーの嶋田親一さん、そして永六輔さん。皆さん、放送史の一頁を担い、ラジオ、テレビの共通文化を育ててきた方々である。

聴取者や視聴者の脳裏にこの方たちの作ってきた番組が思い出として焼きついている。

きらめく言葉や感動的なシーンに元気つけられ、生きる希望を与えられた人たちがどれだけいることだろうか。ラジオ、テレビが人々に及ぼした影響力は、とてつもなく大きいものである。その証拠としての脚本・台本を残そうという運動を始めたきっかけを、われら脚本アーカイブズが果たしたわけである。それは、大きな海に投げた小さな石ほどのものでしかなかったかもしれない。だが、その小さな石が、今、国をも動かすムーブメントになろうとしている。

ただ、最初の石を拾った市川森一さんのオーラルヒストリーが出来なかったことが、心残りである。

けれども、市川さんが提唱した脚本アーカイブズの夢のつづきはこれからだ。

私のアーカイブの行方

山西 伸彦

この7年間、次から次と押し寄せる各々の思いに染まった台本・脚本の箱。山積みされる“宝”を保存していく作業。一方で調査・研究等をすすめるスタッフ。その連携は、時に戸惑い、時に停滞し、時に活気づく。それは、まさに、未来を見つめ、過去を掘り起こす作業であった。そして、今、約5万冊の資産というべき台本・脚本の行方が見えてきた。それは悲願であったが、まだまだスタートラインに立ったばかりだと思う。今後どうなるのか。資産がよりよく活用されるようになって欲しい。

そして実は、私自身のアーカイブに悩んでいる。30数年前から少しづつ蓄積されていく仕事の台本、資料、VTR等。それはすさまじい勢いで部屋を侵食して、押し入れから始まり部屋が1つ2つと埋まった。家族にとっては、これらが生活の糧になった“証”とわかっていても、憂わしいことでもあった。遅々として整理、整頓が進まず、他人が見れば、ゴミ屋敷の様である。最後の手段は、引っ越し。新居に持ち込んだものはほんのわずか。残りは、1年近くも旧居にあるが、私にとっては大切な“宝”である。正直、捨てるのは忍びない。はて、どう処理していけばいいのだろうか。この私のアーカイブの問題は、まだまだ続く。

アーカイブズの思い出

水原 明人

その昔、アーカイブズがスタートした頃は今から思うと、作家の意識も随分違っていたような気がする。その当時は「アーカイブズって何だ？」という人達が多かったし、その目的を知らされると、

「そんなもの必要あるのか？」「放送作品は本来一回ごとに消えるものだ。残す必要はない」

という声も結構あったように記憶している。

しかし、六本木の教室で脚本家志望の人達を相手に講義をしていると、過去の作品や作家の業績が如何に新人達の刺激になり、意欲の源泉になるのかということが身にしみて感じられる。私自身、脚本家を目指して勉強していた学生時代、何よりのお手本は早稲田の演劇博物館に所蔵されていた無数の過去の作品だった。それを読むのが楽しくて、教室へ出るのを忘れてしまうほどだった。

脚本アーカイブズが、未来の作家達を育てるための豊かな土壌になればと願っている。

みなさま、ご苦勞様でした！

日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書〔Ⅶ・最終版〕
新しいステージへ
～7年間の総まとめ～

■平成 24（2012）年 3 月 25 日発行

発行 社団法人 日本放送作家協会
日本脚本アーカイブズ特別委員会

〒 107-0052 東京都港区赤坂 2-9-2 ウェイタワーズ 501
社団法人 日本放送作家協会
TEL：03-3568-2276 FAX：03-3568-2889
www.hosakkyo.jp/

印刷・製本 株式会社 三交社
〒 162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 3 丁目 4 番地 生泉市ヶ谷ビル
TEL：03-3267-3641（代表） FAX：03-3267-6220 www.san24.co.jp/

本誌の無断複写（コピー）は、著作権上の例外を除き、著作権侵害となります。

脚本・台本は記憶と記録の宝庫

社団法人 日本放送作家協会

日本脚本アーカイブズ特別委員会

本報告書は、文化庁の委託事業として、社団法人 日本放送作家協会が実施した平成23年度「アーカイブズ構築および、デジタルデータ公開のための調査研究」の成果を取りまとめたものです。
従って、本報告書の複製、転載、引用等には文化庁の承認手続きが必要です。



平成23年度文化庁芸術団体人材育成支援事業